女鑑

第拾參年第拾參號
（明治三十六年七月一日發行）

口繪

實踐女學校職員並卒業生
京都看病婦學校 京都產婆學校 職員並卒業生
女鑑兼題投稿優等者（其二）
京都第一高等小學校女子部卒業生
高野山風景
清國蘇州城外寒山寺と農家

重要目次

夏期休業　社說
女鑑といふことに就て　リギロル博士
節婦鈴木お辰傳　深田文學士
隣國結婚事情　土肥月巴
月の光り　幸田露伴
七夕　小畑郁子

御注文の節は女鑑廣告に依りたる旨御附記被下度候



女鑑 第拾參年 第拾參號 目次

口繪

實踐女學校職員並卒業生

京都看病婦學校 京都產婆學校 職員及生徒

女鑑兼題投稿優等者(其二)

京都第一高等小學校女子部卒業式

高野山風景

清國蘇州風景

社說……一

夏期休業

論說……五

女鑑といふことに就いて……博士リギヨル

史談……一一

節婦鈴木於辰傳……文學士 濱田廉

美人の始祖……栗島狹衣

學藝……一八

通俗土佐日記……兒玉彌三郎

和歌評釋小倉の色紙……中川愛氷

家庭……二七

農業と家庭の關係……農學士 江南牧夫

佛國結婚事情……土肥月巴

蚊トンボ物語……橋村生

家庭雜言……鳥峰樵夫

だいどころ……石井溪太郎

雜錄……四六

月の光り……幸田露伴

名婦の墳墓……內田芦文

女子講話會……一記者

七夕……小畑いく子
高野山 ―――――――――――― 錦衛隱士
日比谷公園……山岡超舟
小說……六四
仲の娘……篠原温亭
文林……七〇
和歌……東久世通禧外
新體詩……岩埀蒼松
短歌……山岡良旗
藪の庭……七四
山家夏(歌)……日高かず子外
雨窓書を讀む(文)……篠田圓子外
彙報……八六
○數十件
○新刊書目

定價
一冊 金拾錢
六冊三ヶ月分 前金五拾七錢
十二冊半年分 前金壹圓拾錢
廿四冊一年分 前金貳圓拾錢
全國無逓送料

廣告料
五號活字廿三字詰一行 金三拾錢
半頁 金八圓
一頁 金拾弐圓
表紙一頁 金拾六圓
(色刷は特に御相談に應ず)

明治三十六年六月廿日印刷
明治三十六年七月一日發行

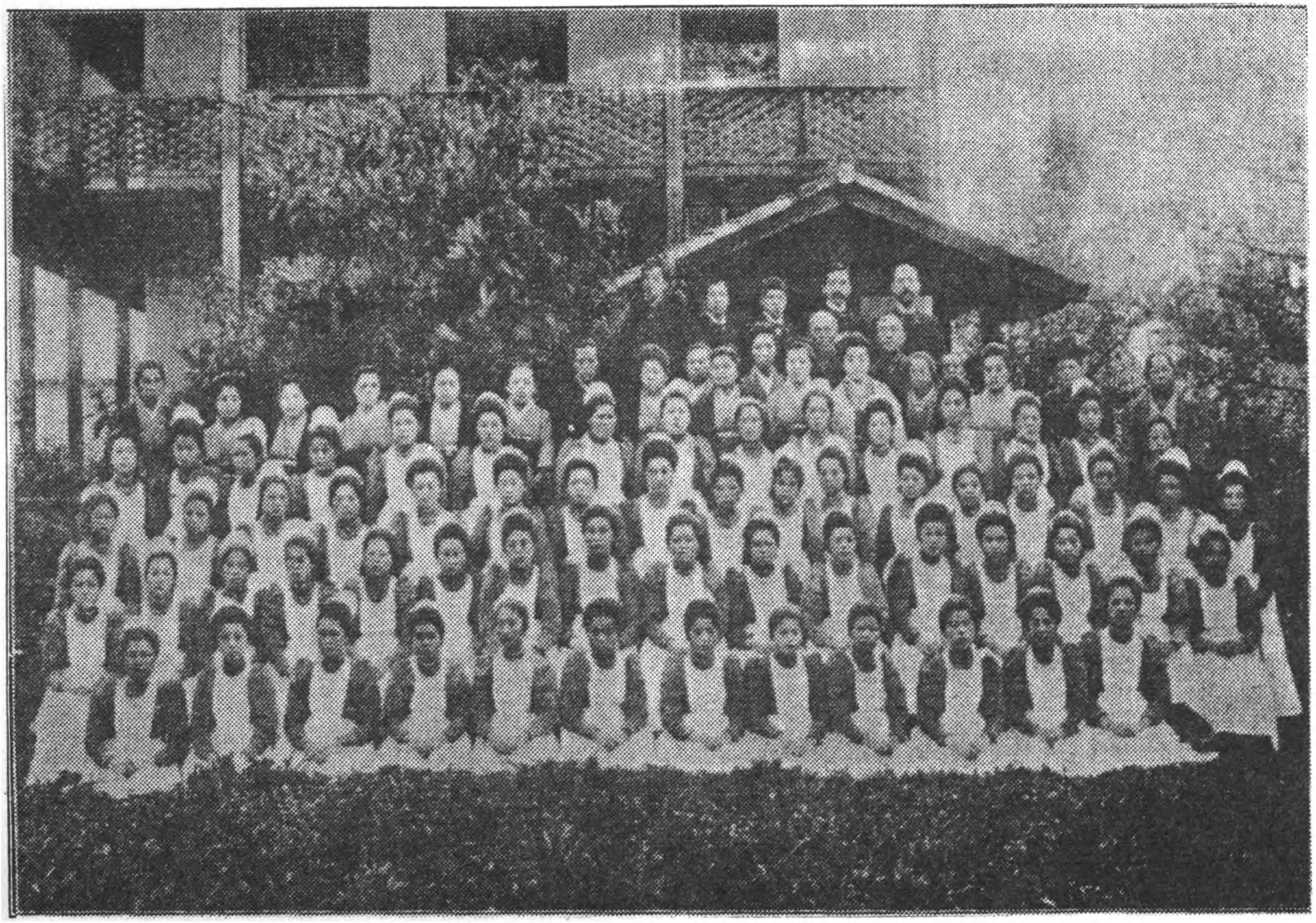
東京市京橋區築地二丁目二十一番地
編輯兼發行人 渡邊素一
東京市京橋區南八丁堀一丁目十二番地
印刷人 並木貞雄
東京市京橋區築地二丁目二十一番地
發行所 株式會社 國光社
(電話新橋二六九三番)
(電話新橋特八八番)

御注文の節は女鑑廣告に據りたる旨御附記被下度候





實踐女學校職員並卒業生

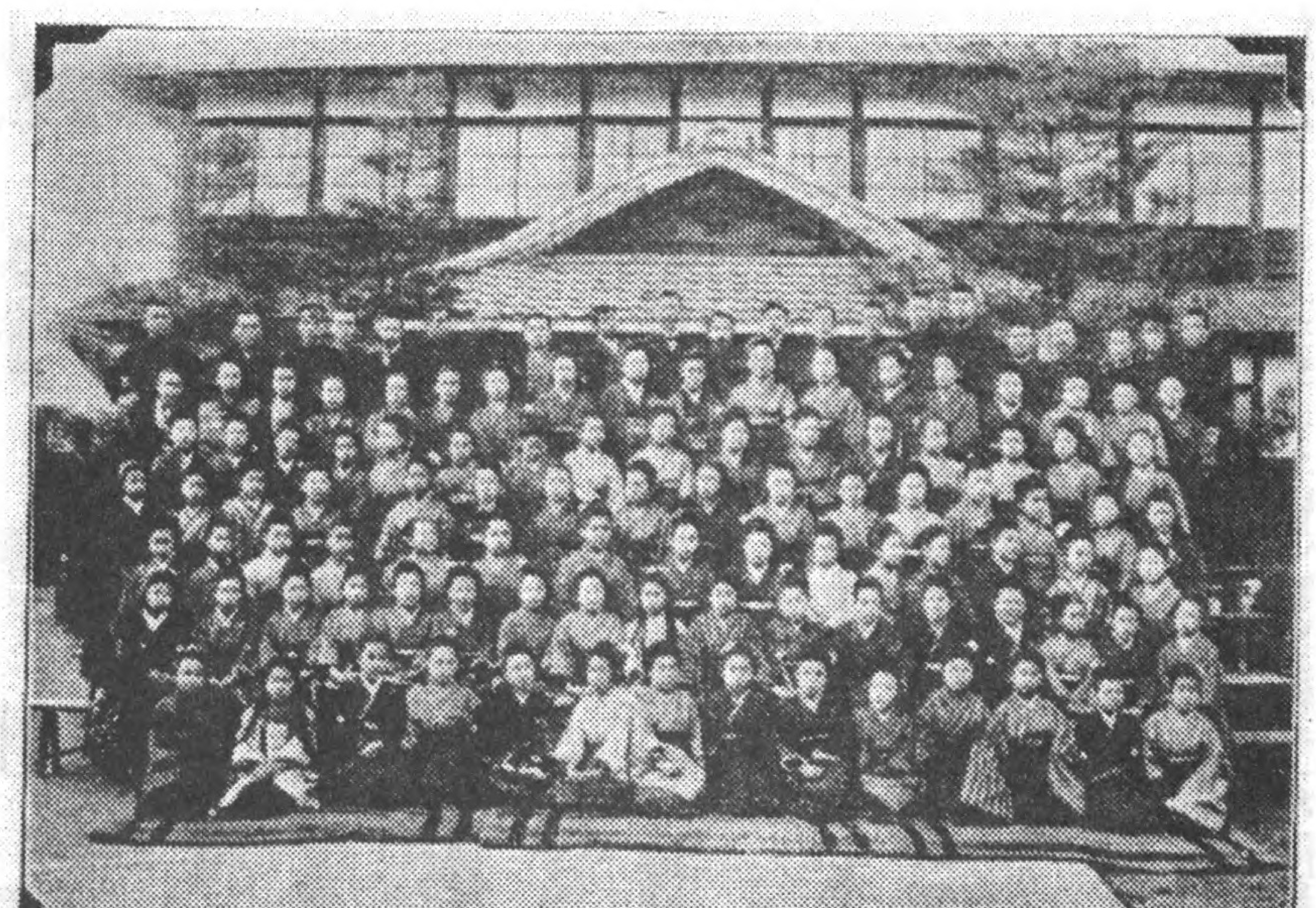


京都看病婦學校及京都産婆學校職員並生徒

女鑑兼題投稿優等者（其二）



金原玉城刀自



京都第一高等小學校女子部卒業生

御注文の節は女鑑廣告に據りたる旨御附記被下度候

毛はへ藥

はつぼう等のはげ●まゆげ●口ひげ●はげ其他男女有べき所に毛なきに可驚効驗あり且拔毛を止め毛足を速む
●近頃流行の禿頭やけど●で●もの
●はへ際うすき●婦人こまあたりの

價名（ベグネス）乙價貳圓甲價特別製參圓五拾錢●送料拾四錢●本劑を塗擦すれば皮膚は速に新陳代謝をなし**皮膚を改造し毛根を**〔〕にせしむるを以て如何なる禿〔〕も甲〔〕壹瓶で必毛髪發生す

梅毒

キニーネル

本劑はサイフヒリスに就て多年學理と實驗に依り研究の結果初めて發見の一種特有の新劑にしていて〇その〇毒〇か〇さ〇り〇ん〇病〇ふ〇き〇でき〇もの〇よこれ〇かんそうづき〇其他如何なる慢性梅毒も必全治確證す輕症は壹劑重病も貳劑用ゐ必す奏効す世間種々雜多の無効に驅除藥の比に非す價半劑八拾五錢壹劑壹圓六拾錢貳劑參圓貳劑は保証付也

わきが

必ず全治

本劑を塗擦すれば主成分は皮膚及び肉の組織に吸收せられ其組織にある**毒素**を潔滴驅逐せらし惡臭を**根底より全滅**せしむる作用を有する最新發見の新劑にて大家の醫療も效を極め〔〕さ者も必根治す輕症は丙價如何なく再發せず丙價七拾錢乙價壹圓特製貳圓五拾錢送料拾貳錢

色白くなる藥

ハンドコロン溶液

本劑は貴女紳士淑女粹客間に大高評を博し最新流行の秘方の奇劑にして本劑を塗擦すれば主成分は皮膚にグランラド氣吼**藥力**に依より吸收せられ皮膚は次第に新陳代謝を盛ならしめ**色素**を漂白する**皮膚**を改造するが故に如何程色黒きも壹瓶で**白色に變化**し●吹出物を去りるさ共に〔〕を消發す〔〕價貳圓中價特製參圓五拾錢送料拾四錢 秀美艶麗、容貌〔〕

専賣 東京本郷湯島四丁目十二 **オリエンタル藥舘**

傳染病研究所、養生園 東京病院其他各病院御用

アルボース案内

◎**消毒** 傳染病豫防にはアルボースを種々に用ひよ是完全の消毒也

◎**防臭** 便所便器不潔の場所等へアルボースを撒け能く惡臭を止む

◎**洗濯** 衣服を洗ふにアルボースを用ひよ蚤虱等の蟲のたかるを防ぐ

◎**入浴** アルボース石鹼を入浴の時用ひよアセボ ニキビ等を治す

◎**頭髮** 禿頭病を患ふる者はアルボースにて洗へ毛の拔けるを防ぐ

◎**毒蟲** 蚤蚊蜂等の刺されたる時はアルボースを付けよ痛痒を止む

◎**植物** アルボースは蟲を殺す効あれば植物の害蟲を除くに用ひよ

◎**疵所** 突疵切疵等はアルボースにて洗へ一時しみるとも早く癒ゆ

定價●原液一斤入金三十五錢●通常液一斤入金十三錢同二斤入金二十錢、同卅五斤入金二圓●石鹼大形金十三錢、同小形金八錢

東京深川區東扇橋町五番地 **扇橋製藥株式會社**

第三回内國勸業博覽會褒狀寫

冷礦泉八代湧出　富山縣　扇浦正二

多量ノ鐵分ヲ含有シ泉質良好ナリ頗ル嘉ス可シ

審査官　清水鐵吉㊞

正七位　巨知部忠承㊞

審査部長　中濱東一郎㊞

正六位　和田維四郎㊞

審査官長從三位勳二等　九鬼隆一㊞

褒狀

前記の薦告ヲ領シ玆ニ之ヲ授與ス

明治廿三年七月十一日

總裁大勳位　貞愛親王㊞

褒賞贈與之證

東京市日本橋區蠣売町貳丁目

富山靈鑛泉販賣業宮本龍眼堂

監理者　小林遜

名譽賞金牌

天然ノ靈効補血滋養ニ富ミ内外ノ有功最モ著ク販路多シ國益上斯業奬勵模範トナル其偉功ニ據リ前記褒賞ヲ贈與ス

明三十六年五月十一日

香川縣

第拾回内國々益品博覽會㊞

病者安心

官山　藥山

富山靈鑛泉

◎政府免稅醫藥之大王◎

効能は無量廣大病として一々全治せざる事無し是以て他藥の如く効能書を揭載せず

此靈泉は平凡の藥と異なり天然にして有らゆる藥の原素を調合せられし神聖の天創なれば諸病一度之に觸るゝ時は忽ち平癒す故に輕症は勿論是迄醫師に懸つて効無く長年難儀する病人試みに五瓶服用せば暫つて全治す

三日分金十五錢
七日分金卅五錢
内外應用

◎効驗不思議難病即治◎

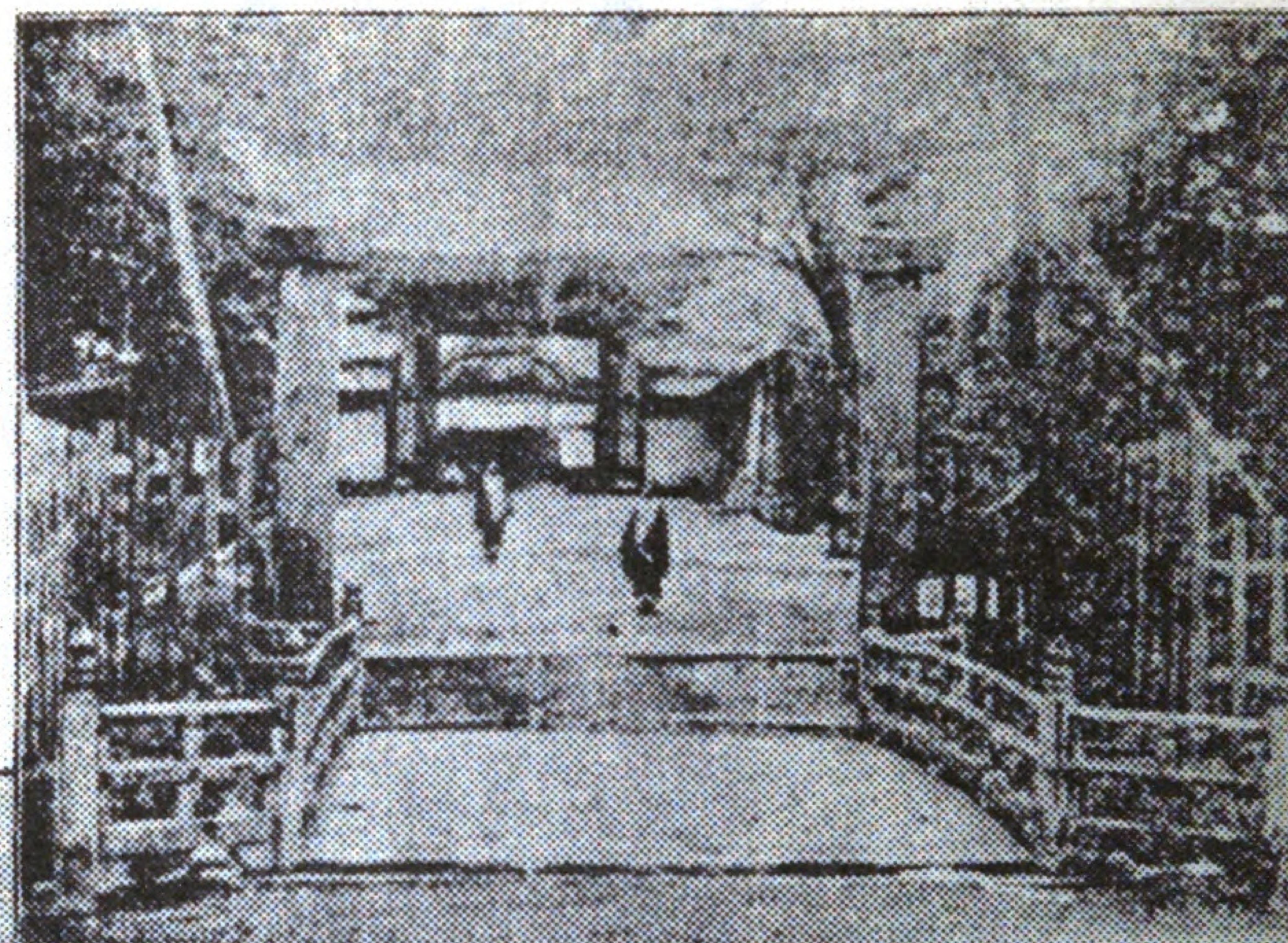
見本入用は金一圓送れ二週分發送
照會郵券封入
全國各地特約店有尚廣く募集す

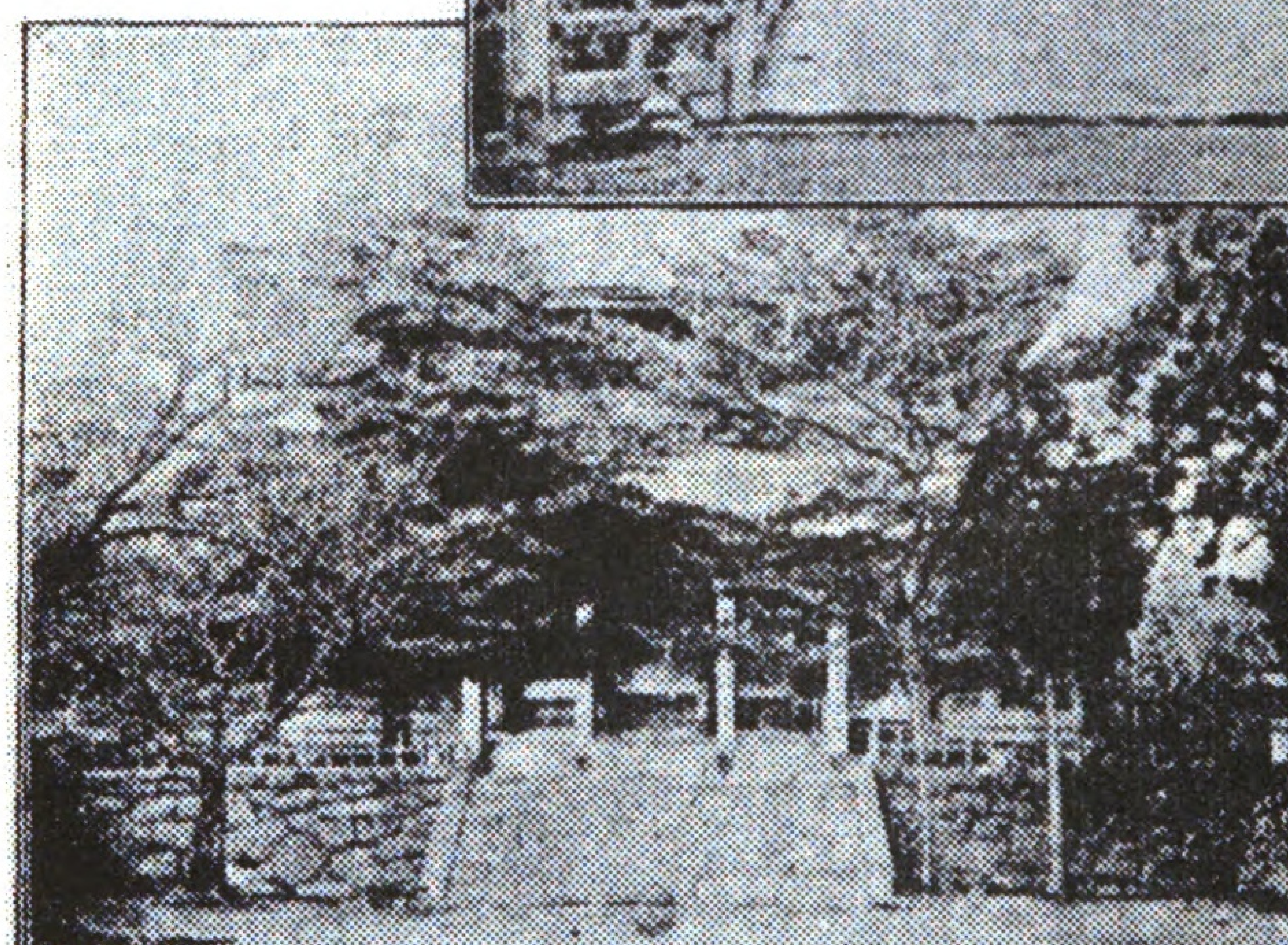
東京日本橋區蠣殼町二ノ三
總本舖　宮本龍眼堂

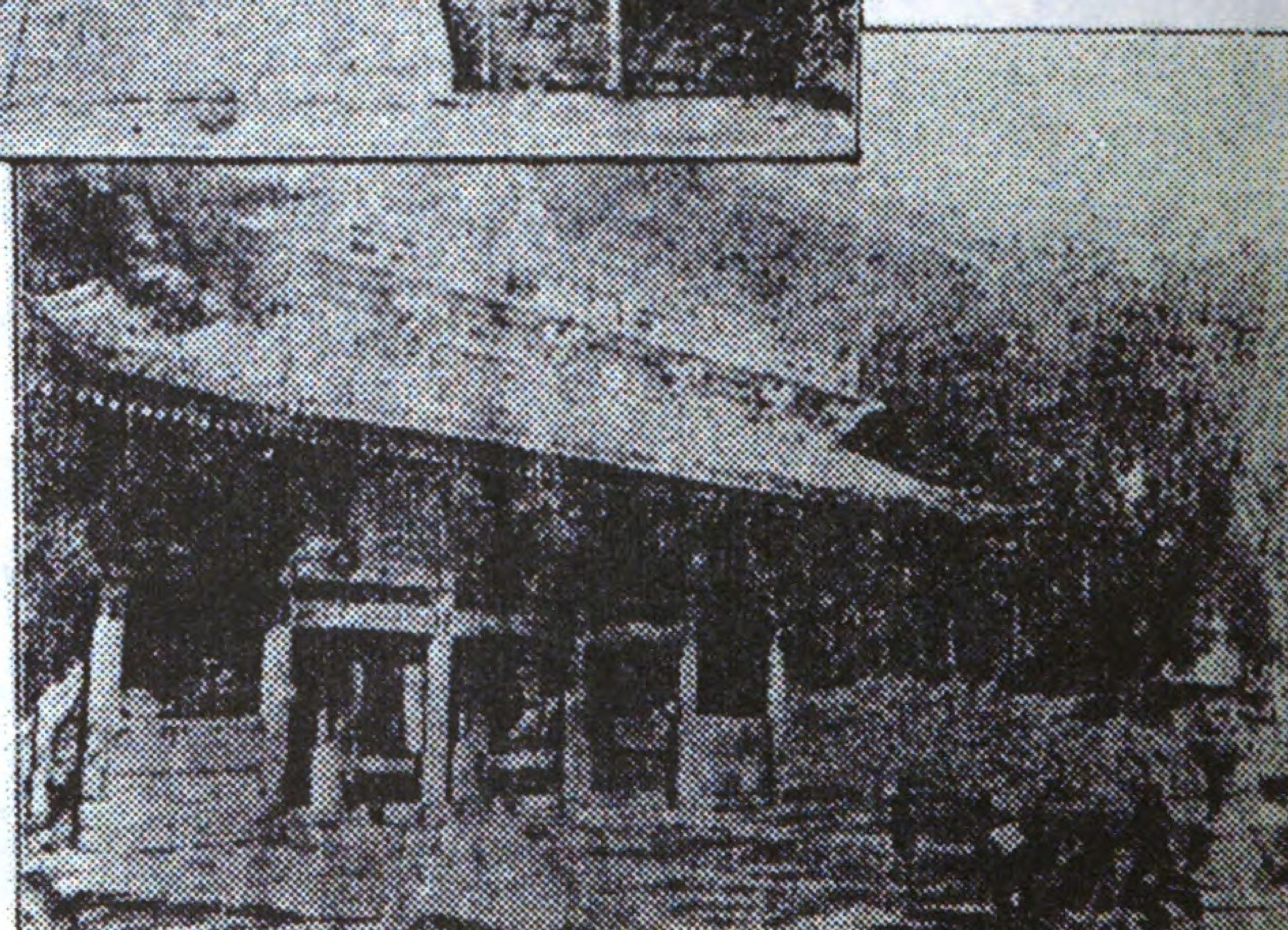
同　日本橋區上槇町三番地
代理店　安川晃榮堂

同　深川區佐賀町二の十一
同　福田彦兵衛

高野山風景


金剛峯寺門前


金堂正面


大門

清國蘇州風景



蘇州城外寒山寺



蘇州農家

豫約募集

子爵 黒田清綱大人撰

歴代歌選

全貳冊

○和紙和裝美製
○紙數凡三百頁
○定價金壹圓
○豫約金六拾五錢
○郵税金八錢

◎明治の歌學界に於て卓然斯道の木鐸を以て任ずるものは黒田清綱大人也

◎黒田大人が本書を公にせらるゝは深く當今歌學界の亂雜を慨嘆せらるるが爲に外ならず

◎本書は歴代の和歌に就て更に大人が平素好尚せらるるものゝ中特に體格風調の優麗にして且氣骨を有して斯界の爲に標準たるべきものを選ばれ併せて開卷第一にこれに對する歌學上の意見を述べられたり

◎大人は我が歌學の爲に平素蘊蓄せられたる意見を本書に發表せられたり大人が時俗に傑出せる歌調は本書によりて認識するを得べし

◎本書は卷尾に作者ゝ小傳を載せたり歌と傳と兩々相對して益その趣味を知るべくこの傳記は五十音引に編したれば廣く文學上の利便とも成るべし

豫約法手續

豫約期限（豫約募集期限は本年七月二十日迄とす（但豫約御申込あると共に豫約金と郵税相添御拂込なきものは無効とす）

配本期 本年十月までに配本す

豫約申込所

東京市麹町區下二番町三十二番地 修文社

東京市京橋區南傳馬町一丁目 弘文館 吉川半七

東京市淺草區北東仲町五番地 文淵堂 淺倉屋久兵衛

東京市神田區仲町二丁目六番地 青山堂 青山清吉

東京市麹町區麹町四丁目十三番地 文晶堂 磯部太郎兵衛

御注文の節は女鑑廣告に據りたる旨御附記被下度候

胃活

右は明治二十七八年戰役後我國民の體格に付て余等は感ずる所あり即ち日本人の普通病なる胃病患者を救濟するの目的を以て學理と實驗とにより共同研究の結果發見したる胃病新藥にして效能確著誠に驚くべし之を廣く天下に弘布し世の胃病患者を救はゞ實に大日本國民の幸福なり

陸軍軍醫監正五位 長瀨時衡 印
陸軍藥劑監從六位 石塚左玄 印
海軍醫少監從六位 日向次作 印
海軍大軍醫正七位 横井太郎 印
海軍大軍醫正七位 門倉梅三郎 印

登錄商標

胃病新藥



効能

●溜飲●胃弱●慢性胃弱●胃加答兒●胃痛●胃痙●食慾不進●胸痞●宿醉●悪心嘔吐●呑酸嘈雜●腹滿●食傷等一般の胃病に著大の効能ある靈藥なり論より證據二三週間分を試めし玉へ

●官吏●教師●僧侶●學生●商人●銀行●會社員●婦人●店員其他座業に從事して、常に運動不足し、精神を勞する人は、平素に持藥として、少量宛の胃活を用ひ玉はゞ、食物の消化を助け、血液の循環を善くし身心を活潑ならしむ

注意

◉藥は可成高きものを買玉へ●藥は可成思ひ立たる時に買玉へ●全國有名藥店にて請賣す●若し最寄になき時は發賣元へ注文あれ●全國無遞送料

定價	
一週間分	二十五錢
二週間分	四十九錢
三週間分	六十五錢
五週間分	一圓

發賣本舖 東京銀座一丁目廿三番地 大阪南久寶寺町堺筋東 山田安民藥房

女鑑

第拾參年第拾參號

夏期休業

間居して不善を爲すとは、少しく過酷の語なるに似たれども、遊惰と罪惡とが、相伴うて離れざるを以て見れば、間暇遊逸は多くの場合に於て、誘惑の乘じ易き危機にして、此の誘惑や、實に人をして不善を爲さしめ、惡行に陷らしむるものならずんばあらざるあり。而もこれ啻だ謂ゆる小人のみならず、賢人君子と雖も、往々にして、此の危機に投ずる誘惑の爲めに、知らず識らず、其の平生に反背せる行爲を冒して、遂に臍を噬むの思を爲すに至ること無きに非ざるなり。

學校生活に於ける夏期休業の日は近づきぬ、學窓一年の勉學は、此の休業に値ひするものなれば、此間に暢適自由の遊を爲して、心身を靜養し、活潑なる意氣と、壯快なる思想とを將て、復び勉學の新生涯に入るは、將來成業の上に於て、少からざる資益を與ふるものなれば、海水

浴にもあれ、入湯にもあれ、又は故山に歸省せんにも、勉めて、その心身を暢適すべき方法を取りて、一年勉學の苦を忘れんこそ、夏期休業の本旨にも適ふべきものなれと信ずれども、左り迚て起臥悠々更に爲すことなくして、日を送るが如きは、獨りその身體に害あるのみならず、また其の精神をも不健全ならしむることなきに非ざるなり。例へば臥ながら小說院本の類を讀み、或は倦み來つて晝眠を貪り、或は時ならざるに菓子菓實を食し、或は歌牌、トランプなどを弄びて、日夜を送るもの丶如きは暑中休暇中に於て有り勝のことにして、之が爲め遊惰の風を養ひて、休暇後と雖も、尙は遊逸無爲を好むの癖を生じ、自ら讀書勉學に闕くるところあるものなきに非ず、而して尙甚しきは、昨日の勉學者も、今日の遊惰者となり、明日は更に廢學同樣の姿となるものさへあり。是れ實に夏期休業なる閒暇遊逸の時に於て、誘惑の機に乘じて入りたるが爲め受くるところの弊害にあらずや。

多くの女學生を觀るに、東京在住の人は暫くいはず、其他の人々は或は故鄕に歸るあり、或は朋友、知人と共に海水浴又は入湯などに行くもあり、或は親戚知己の內に身を寄するもあり。又た閒には下宿屋、又は貸閒借などして、依然東京を出でざる人もありて、一槪にはいふべか

らざれども、さらぬだに學校の内にありてさへ、兎角の批評を免かれざる妙齡の女學生が、一たび其の學校の監督を脱がれて、自由の生活を爲すに當りては、縱ひ短日月の間なりとはいへ、世俗の注目するところのものたらざるを得んや。而して其の結果は時として哀むべき出來事の生ずるを見ることなきにあらざるは、予輩の嘆息して已まざる所なり。

されば都會遊學の女學生に向つて、予輩が希望する所のものは、夏期休業中は、成る可く故山に歸りて、父母兄妹の團欒せる家庭の一人となるにあるなり。況んや故鄕の山川は、滴る許りなる綠色の衣を粧ひ、紅白の繡をさへ飾りて、此の新下りの舊友を迎へ、新鮮なる空氣を饗して、心をも體をも壯快ならしむるに於てをや。若し事情の許さゞるものあらば、親戚知人若くは師友の許へ身を寄せて、朝夕家事の手傳をも爲して、宛然其の家族の一人となるを可とす。斯くすれば自然家庭生活の情趣をも解するを得て、將來に裨益するところ尠からざるべし。海水浴といひ、湯治といふが如きは、父母親戚師友など長上者に隨伴する場合の外は、單行はいふまでもなく、同伴者ありたりとて、猥に赴むくべき場所にはあらず。

殊に最も注意すべきは、下宿屋若くば貸間にありて、此の期間を空過することにあるなり。

事情に據りては、下宿屋にあり、又は貸間に自炊して、學校へ通學するも亦已むを得ざることなれども、休業中六十日又は九十日の日子を、依然として下宿屋に起臥し、又は貸間に朝夕を送らんは、徒然無聊に堪へざるべく、而して徒然無聊は、小説となり、院本となり、午睡となり、菓子菓實の類と爲りて、竟に膓胃を傷ひ、心神を害すのみならず。女生に取りて尤も哀むべき出來事は、多くは斯の徒然無聊の時に生ずるものたるを知らざるべからざればなり。

論者或は予輩を以て因循なる退嬰主義を唱ふるものと言ふ方もあらん。されど間暇遊逸の際は、賢人君子と雖も、往々過誤に陷るの危機たるを思はゞ、誰れか又可憐なる孃子に向つて、戒むるところ斯の如くならざるを得んや。況んや男女を問はず、學生の操行に變動を生ずるは、多くば此の間暇なる休業中に見るところなるに於てをや。又況んや吾國の女子敎育は、今は最も愼重戒飾を要すべき時代にして、女生一人の失行もまた延いて敎育全體に影響することなきにあらざるに於てをや。境遇の人を遷すことは、予輩嘗て之を説けり。故に予輩は此の夏期休業の時に於て危き境遇に近づかざらしめむことを、その父兄、師友に望むと同時に、危き境遇に近づかざらむことを、諸孃子に望まざるを得ざるなり。



女鑑といふことに就て

博士リギヨル

女鑑と云ふ文字は天下の青春妙齡の女子の實益と娛樂とを計る雜誌に至極適當して居る好文字であります、何せ斯く名けましたか、私は一種異樣の解說をして見やうと思ひます、天下の妙齡女子に必要缺く可からざるものが二品あります、鏡と寫眞で御坐ります、天下の妙齡女子は始終此の二品を帶の間に携帶して居ります、時に鏡を出して見、時に寫眞を出して見、兩々相比較して恰も日も足らざるが如くして居ります、若し姿色上多少の進步があつて、鏡面の姿が寫眞の夫よりも一層美しく見えますときは、直ぐに又寫眞を撮り直します、嗚呼滔々たる天下の女性、是れが則ち其の大心配で、時としては是が爲に多くの時を費すことがあります。

　人は直ぐに想ふでありませう、此は女子の虛榮虛飾より出ることとで、彼等は終日自分を眺め、自分を感心するが爲に之を空費して居るのであると然し仔細に考へて見まするに、必ずしも左にあらずです、彼等は蓋し高崇なる理想美を抱て居るので、之を自分の身に實現して見やうと務めて居るのでありますが、中々思ふやうには行かぬのであります、夫故に鏡を見たり、寫眞を見たり、手を

換へ品を替へ、種々様々にして、自分が自分の氣に入るまで務めて見るのであるが、中々うまく成効しませんから、是れが其の大なる頭痛の基となるのであります、例へば鼻が餘り短小でありますると、之を摘んで見たり、之を尖らして見たり、之に白粉をなすつて隆く見せやうとして見たりしますが、成効は矢張り中々覺束ないのであります、目の斜なる者も又百方直視しやうと務めて見ますが、矢張其の目的は達せられません、あはれむべき目は依然例に依つて例の如しであります。

近頃の事でありますが、或る年若き海軍士官の勇敢豪邁なること猶其の腰間のサーベルの如しと云ふやうな人でありますが、流石軍人の事とて自分の鼻の長短如何などを測量する暇はありませんでしたが、其の妹が某學校の寄宿舎に居るので、それを見舞に參りました、處が年頃の事でありますから、其の妹は一意専心にお化粧の大事業に従事して居りました、(私は憚る所あつて此の兄妹二人の姓名を記しませんが、女鑑の讀者の中にはそれと推察する者がありませうと思ひます)乃で今の士官は兄たる資格を以て眞面目に諭して云ふには、

『お前はよく鏡を見るが、あまり書物は見ない、乍併お前の爲には鏡よりも書物の方が良友益友である、お前が如何程鏡を見ても、駄目である、鏡は決してお前が美人であると言ふまい、實際美人でないから仕方がない、お前の頭は餘り大きいし、額は餘り廣いし、口は餘り開き過ぎて居る、幾ら白粉ばかり塗付ても、左官屋のお化見たやうで却て可笑い、それよりもお前の大きな頭に一つでも高崇美大なる思想を入れたならば、私は尚氣に入る。』

如何にも今街上を歩して學校に往來する女子の群を見るに、其の最も有識者の注目に價するものは何であるかと云ふに、決して其の容色の美醜ではない、女は花と同じく榮枯あるもので、一時は嬋娟として咲き開く時節のあるものであるが、そんな事は人も我も氣を附けて考へるものでない、然らば其の衣裳の美であるかと云ふに、さうでもない、勿論今日の學校通ひの女子は昔の女子に比べて幾分か輕佻にして擧止閑雅の風を缺て居るに相違ないが、併しそれは年齢にも、時勢にも依ることである、學校に通ふて居る年頃の者に望むに、奧様時代の嚴正を以てするのは、少し酷であります、彼等も亦鳥の如く羽あつて飛ぶを要します、彼等は今や雛人形ではありません、活ける人間であります、教育があり、學問もあり、腦に一個の思想もあつて、自らをも規畫し、人をも教誨し、尙進んで國家の爲にも盡瘁したいと思ふて居るのであります、嗚呼是れ實に今日の女子の理想にして、人若し其腦を解剖するならば必ず學び、働き、暮すと云ふ三個の思想を以て成立つて居るのを認むるでありませう、彼等の秀越して居るのは正しく此點に在るので、彼等の美も亦是より出で來るものであります、何ぜなれば人の美と云ふものは其の形體より來るものではない、其の精神より出で來るものであります、苟も腦に一の高崇なる思想あり、心に一の義俠的決心あらば、優に其の全身を飾るに足ります、否、顏容の美をも發射させます、水晶の器が如何なる形であつても、鮮明なる光線に照らされるときは如何程奇麗に見へますか、それと同じく尋常の顏容でも、美なる精神が反射するときは、實に高崇なる光彩を放つものであります。

是より西洋近時の出來事を一寸申上げませう、此頃或母が其娘の十五年期を祝つたことがありました、蓋歐洲の或國には女子が今迄家庭には其母と共に在り、學校には其の教師と共に在りて、未だ世間に出でたることもなければ、固より世間を知る由もなく、丸で子供育ちなれども、十五歳になれば、始めて一人前の人間になつたと云ふ事にて、其の成人を祝ふの習例は、餘り舊きことにはあらざれども、歐洲の或國に行はれつゝあるので之を祝はんが爲め親族朋友を招き、其前に娘を出して一人前の人となりたることを示すのでありますが、此は今迄深窓に養はれて人と成つた子女に取りましては、實に其の一新紀元、一生の大事で御座ります。

乃で今の母は此時娘に化粧道具を與へましたが單だ帽子だけは自分で嗜好に合ふのを買ふやうにと云ふので、母は之を買求めず、其代りに二十フランを娘に與へました、娘は無論年頃になつて居ることでありますから、其のお化粧に一心を凝し、此の帽子にせんか、彼の帽子にせんかと、母より受け得たる二十フランに就き隨分腦を痛めました乍併感心な事には其間自分は稽古を止めず、寧ろ却つて一層の熱心を以て之に從事して居りましたのは、是れが親の恩に報ゆる一番好い道であると思つたからであります、實に是れは殊勝な心掛でありました。

愈々祝祭の前々日になりました處が、遂に紅白入りまじりの薔薇花帽を買ふことに決定しました然るに其の決定しました晩、日頃懇切に教訓を受けて居りました一人の教師の下に參り、少しく躊躇しましたが、併し日頃懇切にして下されましたのに甘へて申しまするには、

先生、一寸御意見を窺ひたいのでありますが。

何です？

實は私の英語の教師が永らく病氣をなされまして、聞けば（其代りになりました方の話に據れば）、非常に困難なされて居ると云ふ事であります、若し出來る事ならば、私が作文を出しまして、それと共に母から受けました二十フランを奉呈しやうと思ひますが、如何で御座りませう。

併しさうすれば貴女の花帽はどうなさいますか。

私も考へましたが、花帽を頭に戴て、一寸と虚榮心を悦ばせました處が、迚もそれは年頃日頃御恩になりました先生に御恩返しするの樂みには及びません。

併し貴女はよく御考へなさいましたか、殘念な事とは思ひませんか。

報恩のやうな善事をするに何んで殘念で御座いませうか。

それなれば結構な事であります。

では先生、御許しなさいますネ、あヽ嬉しい？

でも先生、人に言つては不可ですよ、人の知つた事ではありません、實は私は先生にもと思ひましたが、併し母の言ふには、大切な事なら先生の御許しなくて、行つてはならぬと云ふ事でありますから、先生の御意見を伺うたのであります。

是に於て先生は默然として一語もなく、熟視すること較々暫くにして去りましたが、眼には涙が溢れて居つて、胸中には感喜の念が充ちて居りました。

翌日英語の作文は例に依つて綴られ、例に依つて集められました、老教師は病床に呻吟して居れた

にも係らず、之が添删に從事せられました、處が不思議なる哉此日誰にも知れぬやう、作文の紙を折つた中に二十フランと共に『此は先生に奉呈す、他言無用』と云ふ文字がありました。義俠なる令孃は家庭の祝祭日に當り、淺褐色の頭髮に尋常の剪絨のリボンと共に、家庭の女王として一座の前に顯はれ出でましたが、人々皆驚きました、友達は申すのに、

貴孃の花帽は

實は秘密で、お耻しい事ですが、人の氣に入らうと思ふて故意と花帽を除りました、花帽を被ると、年老つて見えるものですから……

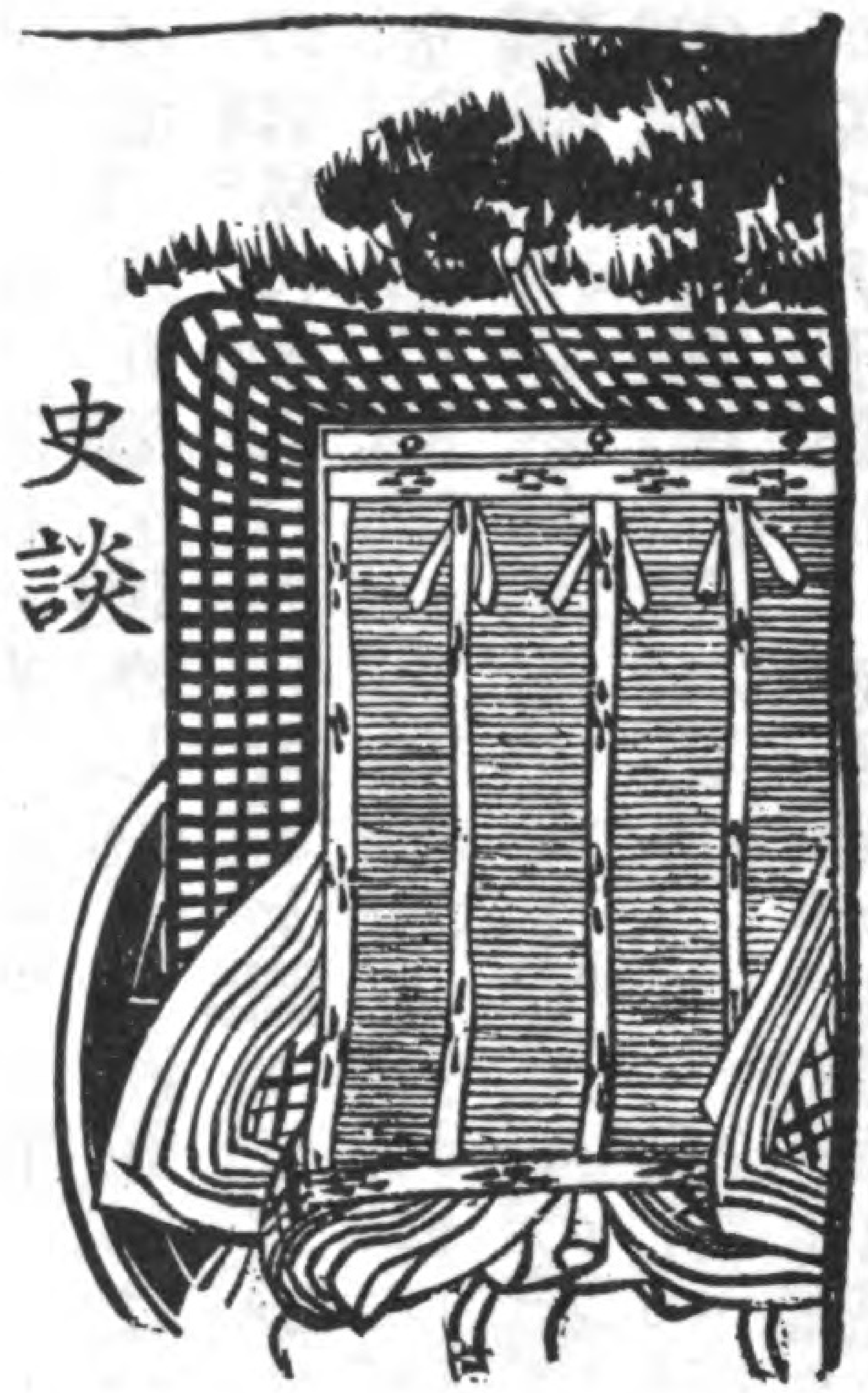
是に於て誰も二十フランの使途如何に就て疑を狹む者はありませんでした、其母は聞て知りましたが、我娘の善事に感じて、知らぬ振をして、何人にも尋ねませんでした、花帽を犧牲に供したる心事は實に殊勝でありませんか、母も我娘ながら感に打たれまして、同夜夜會の散じて後、母は例の剪絨のリボンを解き、之を一生の紀念として寶藏したと云ふ話であります。

靑春妙齡の令孃に取りては、嬋娟たる薔薇の花帽は良好なる榮冠たるに相違なかつたが、德を行つた時の悅ばしき樂みは、此の令孃に取りまして尙一層の光彩となつたのであります。

妙齡の女子が鏡と共に己の花顏を永く保たうとしても、そは望む可くして行はれざる事である、唯だ德に至りては之を求むる意志の儘であります、而して花は枯れるも、德は枯れませんで永く人の氣に入るものであります、之を知るは、大切な秘訣ではありませんか、之を行ふは、一生の慰籍ではありませんか。

然り、勿論鏡が必要である、然り女鑑の如きものが必要である、就中我が心の美醜を見るが爲に最も必要である。

（完）



節婦鈴木お辰傳

文學士　濱田康

舅は乃ち我が父にして、良人は乃ち我が所天なり吾夫却て吾父の誣を被る、人倫の大變これより甚しきはなかるべし、實を告ぐれば父を如何にせん、告げざらば夫を如何にせん、夫と父との際を全うせむと欲せば、一死の外更に他なかるべし、室に入りて我が子を刺し、白刄喉を貫いて死す、鮮血淋漓として戸外に流れ、哀痛の一書天地泣く、吁嗟世間滔々として人夫に盡くす、節烈辰の如き幾有る乎、これ仙臺の儒者大槻磐溪先生が、節婦お辰の碑に題せられし詩なり、いでやお辰が苦節の跡をたづねむ。

今は昔、正德の頃、陸奥國仙臺藩の下士に、鈴木八五郎と云へるものあり、その心ばへ頑固にして腹黑きしれものなりしが、世の諺に鳶か鷹生むと云へるにたがはず、お辰と云へるありがたき娘を持ちけり。お辰は薄祿の家に生れたれば、絲竹茶花のたしなみなかりしも、天性温順にして頑父に事へ、孝養怠りなかりき、かくてやう／＼年長けし程に、八大夫といへるものを納れて所天となしぬ、お辰は別に兄弟なかりしが故に、八太夫は遂に八五郎の嗣子に定まりぬ、伉儷いよ／＼厚かりしかば、遂に一女子を設けて、蝶よ花よといつくしみたり。

しかれども禍福はあざなへる繩のごとし、天つ神無情にして、八太夫は思もかけぬ惡病にかゝりければ、犬自物たる八五郎は、これを忌むと糞土の如く、忽ちこれを離縁して、更にお辰を他家に嫁せしめむと謀りしも、操正しきお辰の、いかでかこれを肯はむや、父上の仰にそむくはうしろめだけれど、貞婦のなさゞる所なり、況んや良人なは病の床に在り、故なくしてこれを拾つるは、人情の忍びざる所なりかし、妾敢て從ふこと能はずとて、固くこばみぬ、その母も深くその志を憫れみて、八五郎を諫めしかば、八五郎はお辰の志の容易に奪ふべからざるを圖りて、いよ／＼惡計をこらし、遂にお辰を死地に陷れぬ、燒野の雉子夜の鶴、子をあはれまぬはなきものを、禽獸にも劣りし八五郎の心かな。

かくて八五郎は、或夜窃かに隣家に忍び入りてその蓄穀を盜み、故らに米粒を撒き散らして、八太夫の病牀に及ぼし、即ち隣人に至りて、昨夜の盜賊の八太夫なることを誣ひたり、されどその夫婦は更に身に覺えなきことなれば、少しも意に介せずして、孝養ます／＼等閑なかりけれど、八五郎が心の鏡は、愈々曇りゆきて、終に八太夫の罪過を設けて、これを官に訴へ出でぬ、官乃ち八太夫を捕へて、吟味を重ねけれども、固より證據は甚だ不分明なりき、さればお辰も亦召喚せられぬ。

お辰はさきに父の出訴せしことを聞きておもへらく、若し父に從うて實を告げざらは、良人は無實の罪を被りて、我は不貞の妻たらむ、然れ共若し良人に從うて實を語りなば、親父は誣告の科に處せられて、我は不孝の兒たらむ、言はぬもつらし、言ふも憂し、我身の去就はこゝに谷まれり、是非いかにも辨へがたし、只死してこの苦患を免るゝ

の外はあらじと、やがてその女兒を負うて廣瀬川に至り、水に投せむとせしが、途上の行人、その擧動の異なるを怪しみて、連りに目を囑せしかば、お辰は志を成すこと能はずして、空しく歸り來りぬ、さて思ふやう、家を出づれば人に妨げらるる恐あり、如かず家に在りて白刄の露と消えむには、さらば我身は今日を限りの命なり、唯よそながら父母家人に訣別せむと、何げなき風情にて、家僕を酒舗に走らしめぬ、あゝ危機いよ〳〵迫り來れり。

その僕未だ歸らざりし程に、召喚の命至りぬ、お辰從容として請うて曰く、願くは少間を賜へ、婦女のたしなみ、髪を梳り衣服を整へむと、吏これをうべなひて外に待つこと久しうして、お辰遂に出で來らざりければ、怪みて室を覘ひしに、事こそ起りけれ、あな無殘や、お辰はその愛娘を刺し殺し、躬らも刄に臥して、既にこの世の人にあらざりき、傍に遺書一通あり、親父と良人との間に挾まれて、その身のおき所なきに、獨り自ら潔うする旨をかきつけたり、文字に血あり涙あり、讀む者涙せきあえず、腥氣座に滿ちぬ。

吏復命しければ、藩主もその清き操に感じ給ふこと一方ならず、八五郎の罪を糺せしに、誣告竊盜欺罔共犯の科は、死刑を免るべからざれど、お辰の孝心にめでゝ、一等を減じて牢朽に處せられぬ。八五郎の妻は心正しきものにして、屢良人を諫めしこともあれば、放免せられ、剰へ一生御扶持方下しおかれぬ、八太夫は固より犯しゝ罪もなかりければ、これも無罪放免の宣告を受けたり、かくて兩人は嫌疑の雲晴れて、晴天白日の身となりし喜悦はありしかど、八五郎の良からぬ心をかこち、又孝心深き娘、貞心厚き妻が非業の横死をかなし

みて、文目もわかぬ五月雨の、晴れ間は更になかりけり、かくてあるべきにあらねば、お辰の遺骸はいと懇に志田郡天性寺に葬られぬ、藩主その孝貞を旌表せむとて、書を天性寺に賜ひて、一基の石碑を建立せしめぬ、その書簡に曰く、

去四月寺内へ葬候鈴木八太夫妻辰事、此度父八五郎事、右八五郎惡事之品々訴申出候砌、八太夫妻自殺に及候、右心底父之惡夫之事申出るに不忍、身之置處無によつて、自害に及候、近來稀なる節婦と感じ思召る丶所に候、仍之寺内之石碑被建下候條、永々斷絶せざる樣、此趣可申傳道候事、

御小姓頭木戸源六にて令首尾候條、石碑寸法之儀は、御儒役田邊喜右衛へ承合可申事、

その文句懇歎にして、その取扱の鄭重なりしを觀れば、その藩主がいかにお辰の高行に感服せられしかを知るに足らむ、この事變は實に正德四年四月十日に屬せり、その後藩主樂山公、藩儒大槻磐溪先生に命じて、その題詞を撰せしめられき、冒頭に擧ぐる所は、即ちこれを和譯せしものなり。正德四年は今を距ること約百九十年なり、天性寺の墓畔人影稀にして、苔むせる古碑は風雨に曝らさる丶とも、お辰の芳しき譽は、乘せて史籍に在り、鄉人亦これを說いて厭かず、桑滄の變もこの節婦の令名を如何ともする能はざるべし。

苔むせる石も碎くる時のあらむ
朽ちぬは人のほまれなりけり

美人の始祖

（中）

栗島狹衣

姫と皇后との御關係はたゞに姉妹といふ許りでは

あく、人情の上にも極めて複雑な關係を生ずるやうになつたといふのは、同じ天皇に仕へた結果、皇后との御交誼におもしろからぬ事柄を生じた事である、これには一條皇后の御性格をも說明しておく必要があると思ふ、皇后は意多本杼王の御妹で允恭帝の二年に皇后とならせられたが、その御器量のあつたことは仁德雄略の后にもまさるほどであつた、初め天皇が御多病の爲めに群臣が御踐祚の事を勸めても御承知がなかつたので、天下の憂は久しきにわたつた、時に皇后はいたくも之を心配して、一日も早く群臣の望を遂げさせ、從て天下の憂をも除かうとの雄々しい心を振興して、天皇にくれ〴〵も御踐祚の儀をすゝめられた、併しながら天皇は少しも御聽容られず、果ては斯ゝる事は耳にせじとの有樣で背をむけて仕舞れた、時に皇后は手に杯盤の水を捧げて居られたが、天皇の御返事のない限りは、決して退かじとの覺悟で、其まゝ其處に佇んで居られたが、何をいふにも時節が冬の中央であつた爲め、杯盤の水は見る見る氷り、溢れて腕にかゝつた水はつらゝとなつて肌に砭をうつが如くであつた、爲めに皇后は凍えて倒れやうとなすつたので、天皇は大に驚かれて、直ちに扶け起して御介抱遊ばした後、其御心の堅固なのに感じて、遂々御即位なされたといふ事であつた、又もう一つは皇后が御母と一緒に住まはせられた時、獨りで苑中をそゞろありきせられて居つた、時に倭闘鷄國造が此處を通り合せて、馬を籬の側へ寄せ苑内をさしのぞいて『汝は能く此園を造つて居るが、私にあの蘭一莖を贈れ』といふも應柄にいひかけたので、皇后は心に快からず思はれたが、兎に角國造といふので文句もいはれず『何の爲めになさるのか』とたづねた處

が、國造はいよ〳〵不遜の態度を示して、『山へ行く時に蟻を撥ふと思ふのだ』といひ放つた、されば皇后はこのことを永く記臆して居られて、いつか其不禮を咎めてやらうと思つて居られたが、程なく宮中へ召されて皇后の位に陞らせられたので直ちにかの國造をめし出して大に其罪をば糺された。國造は昔日の不遜無禮を惶み恐れて、ひたすら罪を宥められんことを哀訴したので、皇后も流石に憫みの心を起され、纔に其姓を貶して稲置になされたといふ事である。實に彼といひ此といひ、その男まさりの御氣象を現すには充分の事柄であらうと思はれる、それであるから皇子達にも安康天皇のやうな温順な帝も生れ、又雄略天皇のやうな剛毅な方も生れさせたまひたるものと推量られるのである。それであるから、弟姫に對する妬みの度も一際深く、やはか妹などに寵愛を奪はれてはと厄鬼となられたには相違ないので、其初め天皇が藤原へ行幸があつた時などは、皇后が雄略帝を生せられるので産家に居られた時であるから、御立腹はいよ〳〵深く、天皇の薄情を怨せられて、果ては産家に火をつけて焚死して仕舞ふとせられた、天皇此事を知つて大に驚かれ、百方言を盡くしてやつと皇后の心を解くことが出來た、併しそれからといふものは、我背子がといふ姫の歌を耳にしては怨みたまひ、はなぐわしといふ帝の歌を聞しめしては憤らせたまひ、遂に安き日とてもなかつたので、姫は初めに勅命を否んだのは乃ちこゝだといふことを悔ひたけれど、今更如何ともすべきやうがないので、前にもいふた通り、せめては行幸の度を節減して、だん〳〵と帝の遠ざかる樣にと考へて、藤原の宮から茅渟の宮へと移らせられたのであつたけれど、帝の御執心は日一日と

篤くなる計りで、日根野の御獵に托しては行幸をせさせられたから、皇后は矢張り御心を痛めさせられて、遂に十年の春正月御幸のすんだ後、天皇に奏していはれるには、妾は決して弟姫のために妬むといふのではないけれども陛下のしばしば茅渟へ赴かせられるのに依て、百姓の煩ひとなることも尠くないと思はれます、それ故に今後は車駕の御數を減じ奉るやうにといふことであつた、そこで天皇もその心情を察せられて、十年二月の行幸のあとは、十一年の三月まで少しも行幸がなかつたと見える、さて斯樣な事に依て見ると、いかにも皇后は妬心家であり姫は不倫の人とも思はれるやうだが、それはくどく謂ふまでもなく、姫の志といふものは、初めに於て明瞭に説明されて居るのみならず、勗めて皇后の御德に對しては傷けまいと計つて居かれるのであるから、不倫といふべき行爲は微塵もない、又皇后とても前にいふ通り負けず嫌ひの御氣象であつたから、自から妬み心も深く、かやうに御心を痛めさせられたのではあつたが、それとも他人ならぬ姉妹の間柄に關しての情合であるのだから、却て無理のないといふことも合點がゆかれるので、敢て妬心家などの惡名を負はすべき御方とはおもはれない、もし此場合に於て誰れが惡いかといふ問題に移りたらば畏れ多いやうだが天皇が第一に其責を負ふべきものかとも、考へられるのである。（未完）

こゝろの弓のはりつよく　いのちを的にねらひなば
中らぬものとて更になし　それ矢多きはひくひとの
ねらひ定めぬあかしなり
鈍舟



學藝

通俗土佐日記（第拾八回）

北海道廳師範學校教諭　兒玉彌三郎

今日、波な立ちそと、人々、終日祈る驗ありて、風波立たず、

○波は立ちそ　は波立つ勿れの意なり、今日といへるは今日たに立たずば、和泉の灘をも無事に通過すべければ、斯くいへるにて、明日は兎も角、今日一日を案ずること切なるなり、斯く祈りの驗にて波の立たざるを喜べるは、後に非常の暴風に遭ひて危かりしに對せしめんが爲めなり、

今し鷗群れ居て遊ぶ處あり、京の近づく喜びに、或る童の讀める、

祈り來る風間と思ふを文なくも鷗さへだに波と見ゆらむ、

○京の近づく云々　今日の海上の靜けさに、此の儘難波まで疾く到着すべきことの如く思はれし心をいふなり、

○或る童　是れも例の設けたるなるべし、

○祈り來る　前文の祈る驗ありてを受けていふなり、

○風間　は風の吹かぬ間をいふ、

○文なくも　文とは文理にて、文なきは條理なきこと丶と思へるなり、

○鷗さへだに云々　さへだにといふ詞は用例少なけれども、さへは俚言のまでにてだには俚言のさへなり、故に鷗までさへの意にて重複にはあらざるなり、さて其の意は、鷗までさへ波と見ゆれば其の他の白き物は皆波と見ゆとなり、

○一首、表は、神佛に祈りつゝ來し驗ありて風も吹かぬ間なりと思ふに、何故に條理もなく鷗までさへ波と見ゆるにやと、風間にすら鷗の、波の如く見ゆるを忌々しく思ふ心を讀めるにて、實は、斯く天氣の好きを楫取に誇るなり、然して又、後の、暴風に遭ひしに對する抑揚なり、

と言ひて行く間に、石津といふ處の松原、面白くて、濱邊遠し、

○石津　和泉國大鳥郡にて、古の高志濱なるべしといふ説あり、住吉に隣れる處あり、

○松原面白くて濱邊遠し　とは松原の面白きは大に好む所なれど、濱邊の遠きは前途尚は遠き思ひを生ずるが爲めに厭ふべきことなるを思はせたるなり、

又住吉の邊、漕ぎ行く、或る人の讀める、

今見てぞ身をも知りぬる住の江の松より先きに我は經にけり、

是に、昔方人の母、一日片時も忘れねば讀める、

住の江に舟挿し寄せよ忘れ草驗ありやと摘みて行くべく、

となむ、うつたへに忘れなむとにはあらで、戀しき心地、暫し休めて、又も戀ふる力にせむとなるべし、

○又　といへるにて、石津の濱邊の遠くて心苦

しかりしを漕ぎ過ぎて、今又行く先き長く見えて詫しき住吉の邊を漕ぎ行く意思ひ知らる、

○今 とは是れまで度々見たりしかど何とも心付かざりしに、今といふ今、即ち土佐の任滿ちて京に歸る途次との意なり、

○身をも知りぬる とは身の老いたる程を知りたりといふ意なり

○住の江の松より先きに云々 とは松の經たる年よりも我は先きに經にけりといふ心にて、畢竟、松よりも老いたる心をいふなり、住の江の松は古き例しに引かるゝを常とする物なるに、其れよりも先きに立ちて古り行く由をいひて、我が齡の程を思はせたるなり、

○一首、表は、齡の非常に老いたるを歎けるなり、上文に頭皆白けぬ、七十八十は海にある物なりけりなど書きたるに應じて、海賊の恐れ、風波の憂にて、歸路俄かに老いたる由をいへると同趣なり、固とより然るべき理あらざるは明らかなれば、實は、任の不幸、愛兒の死亡、歸路延滯等を思ひ合はせて、身の不運を歎けるなり、

○是に とは端を改めて前のと區別したる詞なり、

○昔方人 とは亡兒を指したるなり、其の母は即ち紀氏の室なり、

○忘れ草 は萱草又は忘憂萱とも書く、之れを食へば人をして憂を忘れしむといへり、故に此の忘れ草を摘まば憂を忘れもやせんと、摘みて試みんが爲めに舟を棹し寄せよといふなり、

○一首、亡兒の戀しき餘り、何卒忘れたさに忘れ草を摘みて其の驗を試みたき由を讀めるも、實は、好まざる任中、此の愛兒を亡ひたる不幸

を歎けるにて、夫に同情を寄せたる處いと憐れなり、

○うつたへに　は前に釋ける如くまんざらにといふことにて、斯く忘れ草の驗を試みんといふも、其の實、まんざら忘れて仕舞ひたきにはあらずとの心なり、

○戀しき心地云々　一日片時も隙なく戀ひ慕ひては、終に心身共に疲れ果つるものなれば、暫く其の戀しと思ふ心を休めて、其の間に精神を養ひて、再び戀ふる勢力を貯へんとの心なるべしと、女の記者が、母の心を察して書けるらしくせるなり、總べて此の邊の詞遣ひ、親の、子を思ふ情溢るゝばかりにて後人の企て及ぶべからざる所なり、

○此の段、住吉に來てより、又忘れ草につけて愛兒のことに及ぼせるなり、常に忘るゝにはあらざれども、天氣好くて舟中長閑なる時は、一層其の情も切なるが故に此の日記中、何時も亡兒の事を書けるは舟中長閑けき時なり、然して亡兒の事を書けるは、やがて天氣の好かりし爲めにて、從つて、楫取の天氣豫測の虚誕なりしを思はせ、以て下文の暴風の條に對照せしめたるなり、

斯く言ひて、詠めつゝ來る間に、ゆくりなく、風吹きて、漕げども〳〵、舟は、後方退に退きて、殆打ち塡めつべし、

○詠め　は心に物思ひある時、見るともなく一處に目を放たず恍惚として居る貌をいふ、

○ゆくりなく　とは不意の事なり、前の、楫取の言を侮りて、暴風など起らんとは思ひ掛けざりしに突然起りしが故なり、

○漕げども〳〵　をたゞ漕げども〳〵とせる本あ

り、其は手繰れどもの意にて、綱にて舟を引きしものと見ゆ、

○後方退きに退き　は後方に退くことの劇しきをいふにて、其の事の甚だしきを示すときは、斯く上下同じ詞の間に、にの字を挿む例多し、しぞきはしりぞきの略語なり、

○打ち塡めつべし　とは舟を海中に打ち塡むる勢なるをいふ、

○右、昨日楫取の言ひしこと虚妄ならずと知りて、深く後悔せる心を思はせたるなり、

楫取の曰はく、此の住吉の明神は、例の神ぞかし、欲しき物ぞおはすらむ、とは今めくものか、扨、幣を奉り給へといふ、言ふに從ひて、幣を奉る、

○此の邊、楫取、己れの豫言の中れるを以て得得たる樣、及び一行の人々は楫取の言に信を置きて、其の言を採用せる樣共に見る樣なり、意を留めて見るべし、

○住吉明神　は伊弉諾尊、筑紫日向之橘小門之檍原に禊祓し給ひし時生れ給ひし底筒男命、中筒男命、上筒男命三柱の大神にて、神功皇后此の神の敎に依りて新羅を征し、還り給ひし翌年齋き給ひしなり、

○例の神　とは古くより此の神屢靈驗を現はし給ひしが故なるべし、此の句と次の句とは意を離して見るべし、物を欲しがる例の神などいふにはあらず、

○欲しき物ぞおはすらむ　とは舟中に有る物を望み給ふならんと、此の神の物を欲しがり給ふをうるさく思ひたるにて、固より楫取の俗情を以て推せるなり、

○今めく　とは當世めくの意にて、楫取が神に

不敬となるをも顧みずして、物知り顔に言ひ過ぎたるを聞き咎めたる詞なり、ものかはものかはの意にて、然か言ふべきものならんやと、人の思ひ取れる樣に書きたるなり、

○言ふに從ひて　とあるに注意すべし、昨日楫取の言の實なかりしより、今までは毫も楫取を信ずる心なかりしが、此の暴風に遭ひしより俄かに其の言に從ひしこと、我が身の言ふ甲斐なさを思はせたるなり、

斯く奉れど、專ら、風止まで、いや吹きに彌立ちに、風波の危ふければ、楫取又曰はく、幣にはみ心の行かねば、み舟も行かぬなり、尚ほ、嬉しと思ひ給ふばかりの物奉り給へといふ、又言ふに從ひて、如何はせむとて、眼もこそ二つあれ、唯一つある鏡を奉るとて、海に打ち塡めつれば、いと口惜し、

○いや吹きに彌立ちに　はいや吹きに吹き、いや立ちに立ちといふ意にて、にの字の下何れも省けるなり、是は奉りたる幣にて風波の少しは靜まることゝ思ひしに、其の効驗もなく一層度の高まりたるをいふなり、

○幣には云々　幣にては神慮滿足し給はぬが故に舟も動かぬなりといふ意にて、楫取がいかにも神託を承りたるかの如く斷言せるを示したるなり、

○尚ほ　は嬉しと思ひ給ふに續けずして、奉り給へに續けて見るべし、

○又言ふに從ひて　とあるを以て、昨日まで不信用なりし楫取に、いかに信頼したりしかを思ふべし、

○眼もこそ二つあれ　とは眼は無論人の身に缺

くべからざるものなれど、其れさへ二つあるからは餘り貴からずとの意にて、女の身には一日も離すべからざる唯一の鏡を重く見せたるなり、

○口惜し　とあるは神に對して不敬なるが如きも、是は神に奉る物を惜むにあらずして、其の名殘をさへ口惜しと思へる意なりと知るべし、斯く重々しく書きて次の効驗ありし條に對照せしめしなり、

和歌評釋 小倉の色紙（つゞき）

中川愛氷

藤原敏行朝臣

父は按察使富士麻呂にして、母は紀名虎の女なり、仁和二年從五位上左兵衛佐となり、右近衛少將に遷り、後從四位上左近衛中將となる、敏行和歌に巧みに又書を善くす、村上天皇嘗て小野道風に、古今妙書の最なるものを問はせ給ふ、道風すなはち空海、敏行を以て對へ奉りしと、道風にして此言あり、推して其能書を知るに足る、延喜七年僅に二十七歳にして卒す、

住の江の岸による波よるさへや
　夢のかよひ路人めよくらむ

○住の江　攝津國住吉郡にあり、今住吉といふ
○岸による波　よる波は寄する波なり、此句は前の句とゝもに、次句のよるといはん序としたるまでにて、取たてゝ住の江としたるは、名高き地名なればなり○よるさへや　よるは夜に波のよるを云ひかけたるにて、さへは「デサヘ」とつゞく意にて、やは感歎の詞なり、結句らむの結びのかゝりとなる○夢の通ひ路　女のもとへ

行くと見る夢の中の路○人目よくらむ　人めは他の見る目を云ひ、よくは避くにて、らむは推量の詞なり、

この歌、新古今集戀の二「定平御時きさいの宮の歌合のうた」とあり、

○一首の意　晝の中に女の許へ通ふあらば、それこそさとられぬやうにと人目をも憚り避くる筈なれど、その思ひ寢の夢のかよひ路さへ、人めをよくる事やらん淺ましきことぞとなり、

猿丸太夫

攝津國菟原郡深草郷の人にして、時代及びその姓氏を詳にせず、或は曰ふ聖徳太子の孫、山背大兄の皇子弓削王の別名なりと、蓋し萬葉集弓削王の詠中に猿丸太夫の歌を列記せる故ならん、そは兎まれ太夫と唱ふるからは相當の官爵ありし人なるべし、後近江國曾束山中に隱るといふ、

おく山に紅葉ふみわけ鳴く鹿の
　　聲きく時ぞ秋はかなしき

○奥山に　奥山は深山にて、には「ニテ」といふを略したるなり○紅葉ふみわけ　もみぢは木の葉の霜にて黄色に又赤くなれるをいふ、ふみわけは蹈分けてなり、また蹈分けてとあるうへは、このもみぢは落葉の意味なるべし○鳴く鹿の　つまなど戀ひて○聲聞く時ぞ　ぞは强助辭にして「は殊さらに」といふ意味あり○秋は悲しき　はさらでも淋しき秋の一しは淋しく悲しきといふ意、

この歌、古今集秋の上に「是貞のみこの家の歌合のうた」と題し、よみ人しらずとして載す、

○一首の意　秋となりてはいろ〳〵憐れなることゞも多かれど、それは看過しもせしに、奥山

にて散り布く紅葉をふみわけ、鹿のつまなど戀ひて鳴く聲を聞く時ばかりは、誠に言はんやうなき悲しさを覺ゆるとなり、

蟬丸

宇多天皇第八の皇子敦實親王の雜色にて、和歌を善くし琵琶に堪能なり、美談として人口に膾炙したる彼の源博雅三位に傳へたる、琵琶の流泉啄木の秘曲は、敦實親王の彈かせ給ふをいつしか聞おぼえたるものゝ由、盲目となりて後に、逢阪山の麓に住みしといひ、或は後撰集これやこのゝ歌の詞書に、行かふ人を見てゐるより、盲人ならずといふ說あり、

これやこのゆくも歸るも別れては
　知るも知らぬも逢阪の關

○これやこの　これは往來の人をさし、このは彼の人にて、俗に曰ふ「これがあの」に同じ、かねてきゝ居たることを、今その物を見てしかしかと思ひとる意なり、すなはち逢阪の關をさす○ゆくもかへるも　人といふ體言を省ける語にて、行く人も、かへる人もなり、行く人とは、都より關を出でゝ行く人を言ひ、かへる人とは、田舍より歸り來る人をいふ○別れては　ゆきゝの人のこゝにて別れ〳〵となりたらばの意、後撰集には此一句「別れつゝ」とあり○知るも知らぬも　これも人といふ體言を省ける語にて、知る人も知らぬ人もなり、○逢阪の關近江國滋賀郡に在り、都より諸國へ行くには必ず此關を越えしなり、

○一首の意　これがあの、都を出でゝ田舍へ行く人も、田舍より歸る人も、知る人もまた知らぬ人も、此所で別れては、又此所で逢ふといふ名の、逢阪の關であるかとなり、



家庭

農業と家庭の關係（中）

農學士　江南牧夫

◎田舍の生活と都會の生活　我國は西洋と反對にて、一般に田舍の生活を忌み嫌ひ、都會の生活を希望する者が多いのに、搗て丶加へて都會に住む人々が田舍の生活を卑む樣になつて居ますから、現在田舍の人々までが、自然に其懷かしき故鄕を棄て、都會に出て參りまして、何か夫々に糊口の途を搜しますから、都會は日々に繁昌し、田舍は月々に衰微して、自然と田園荒廢の傾を生じて參りますから、尊農の旗色は容易に擧がらぬのであります、左なきだに社會組織の狀態は、常に都會に濃密にして田舍に稀薄なるの通性を有するものでありますから、都會の人々が田舍を侮らず、田舍の人々が都會を慕はずとするも、自然の人心は都會生活の安きに流入するを常と致します、故に國家と社會とを健全に發達せしめんとせは、苟も此の濃淡の調和と申すことに深く注意せねばなりませぬ、前にも申上げました如く、農業は主として田舍の事柄でありますから、田舍の衰へて其田園が滅びますれば、我々國民は立ろに衣食供給の途を塞ぐ樣に爲つて參りますることは、火を見るよりも猶ほ明かであります、故に常に稀

薄に傾き易き田舍をば、種々の方法に仍り務めて之を稀薄にせぬ樣に豫防せねばなりませぬ、西洋の貴族が田舍に農場を設け、主人は勿論其妻君令孃までが、常に農場に赴きて、耕地、作物、家畜、農屋、農夫の生活等を具さに視察して居りまする譯は、全く尊農の一義と申すのであります、之れ即ち社會の上流に立つ處の貴族の本分と申しても宜いのであります。

◎尊農の道甚だ遠し

之に反し我國の貴族は如何でありますか、又た其貴族の家庭は如何でありますか、思ふて此に至れば尊農の道も又た甚だ遠しと申さねばなりませぬ、處で此に一つ御注意を申して置きたいことがあります、此れまで能く貴族々々と申したが、此の貴族と申すことは單に華族樣のみを呼び指したのではありませぬ、世間一般上流の階級に在る人々と申す意味であります、ハイカラ口調で申しますればゼントルマン即ち紳士紳商の意味を含みて居るのであります、此の中に眞の華族で固より、官吏、宗敎家、軍人、政治家、學者もありませうが、倶に其身分の高尚なる階級にある人々と御承知になれば甚しき間違はありませぬ。(此れより以下もまた同じことであります)而して田舍に領地を所有て居ました所謂華族樣が、領地奉還と同時に其居を都會に移しましたのは、種々の事情もあることではありますが、特に著しき例は奥方や令孃か、田舍の生活を忌み嫌ひましたと申すことも、領地を離るゝ一つの理由に爲つて居ります、愚蒙なる家令どもが御子方の御敎育にも不便がありますからと申して、其居を態々都會に移さしめた例も確かにこれあることであります、此れ等は例の武士根性の反動にして、百姓町人を輕侮したる一個の證據であります、

此の餘弊が今猶ほ存在致して居りますから、深窓の間に御成育に爲りました、奥樣御孃樣が直接に御自身の衣食に御困まりがないと申す點から、自然と農業を輕んずる傾きを助長致しました例もあります、随つて御維新後即ち明治十年の戰爭前後までは、例の士族と申す連中より種々の惡體が農家の上に加へられて居りました、相當の學問もあり、又た相當の見識もある士族は左樣でもなかつたが、分らず屋では手厳しく農民をいじめたそうであります、此の餘弊は今猶ほ尊農の道を遠く致して居ります。



○○○○○○○○○○

◎田舍の緣組と令孃の敎育

斯樣の風が自然と妻君や令孃に及びましたと見へ、現に今日まで多く農業を輕侮致しました事實が殘つて居ります、第一都會の家庭より出て、田舍の農家に嫁ぐことを御嫌ひに爲る、令孃が澤山あります樣に窺ひました、甚しきは相當の敎育ある方々が、田舍の緣組を夫れこそ地獄にでも落ちて行く樣に御考に爲つて

居る向がありますゝ御當人のみかは其母君其友達までが、兎角に田舍の緣談を避くる事に同意を表せられて居ると云ふ事實に至りましては、驚かざるを得ないのでありますゝ而かも此の傾が何れの方面の令孃方に一番多いかと申しますと、矢張多少の御敎育を受けました處の……失禮かは存じませぬが半可通の御令孃に多い樣に思ひます、這は婦人敎育の一大欠點と申しても宜いのでありますが、啻に半可通の御令孃のみに限らず、相當の敎育と相當の思慮とを有する處の御令孃にも又た多く見る處の通弊であります。

◎都會と村落の調和　斯の如く致しまする と、遂に田舍には良妻賢母の跡を絶たねばならぬ樣な譯に爲つて參ります、今日は所謂形式的敎育は强ちに良妻賢母を網羅する譯のものではありませぬから、左程に失望するには及ばぬ樣に考へます方もありますが、敎育と云ふことは先づ別の問題と致しましても、都會と村落との調和と云ふ大事の問題が、直接間接に此の緣談に波及して參ります、我々は極力此の調和の必要に伴ひまする處の、一種の良妻賢母を田舍に嫁入すべき方法と手段とに就きまして、十二分に排農の不條理を訴へ、併せて、都會に御成育に爲つて御座る處の令孃達及び女子敎育に從事致されまする處の先輩方の一顧を願ひたいと存して居ります。

◎有力なる女性としての目的　排農の不條理に就きましては前旣に其大要を申上げましたが、更に之れよりは田舍の農家に嫁ぐことを避くる令孃諸君の爲めに、二三の御注意を申上ぐることに致します、第一諸君が有力なる女性として、世の中に御立ちに爲る目的より伺ひたいのであります、假りに同一の事情あるものと致しますれば、寂寥

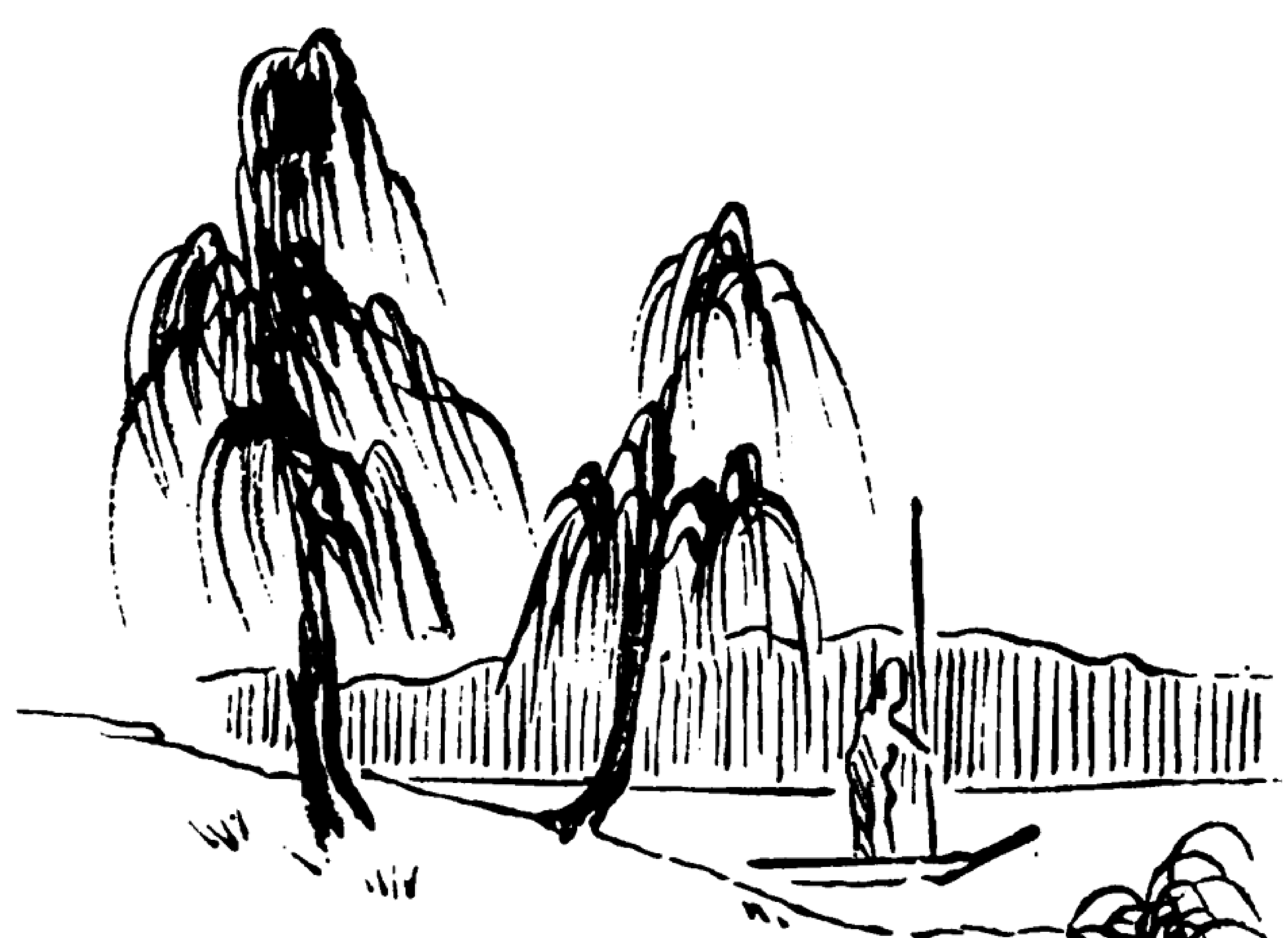
にて乾燥なる田舍に滯りて、獨り田圃の間に其一生を終はらんことは、何人たるを論せず深き希望ではなからうと思ひますが、苟も人と生れて參りますれば、我儘勝手のみに、其日々々の安きを偷むと云ふことは、甚だ腑甲斐なき所爲であります、故に人間一應の務を完うせんと致しまするには、先づ宜しく其我儘と申すことを忍ばねばなりませぬ、若し夫れ都會に生活することが別段我儘勝手でないと致しましても、其本然享有する處の智識と頭腦とを、是非とも都會に於て働かせねばならぬものと、又是非さうする必要のないものとの二つがあります、但だ僅かに生の安きを欲し、其名を釣らんが爲めに、又た其情を制する能はずして都會に走り去りて、此に滯ふる女性の輩を多く見受けまするとは、獨り我國のみでは御座いませぬ、何れの國々も皆な同一であります、文明の中心として世界に誇つて居ります英國の如きも、其帝都の倫敦は殆んど女性の大集合と形容すべき程に田舍の女性が集まつて居ります、而して彼れ等は有用に將た無用に都會生活の常習を學びて居ります。

◎農家の縁談に對する疑問　併しながら英國にては此の大集合に伴ひ案外に田舍を稀薄ならしめずして、能く都會と村落との調和が取られて居ります、這は各種の職業に關係致しまする現象と見做しまして、他日更に詳細の御話を致す機會を待ちますが、此には先づ如何なる事情で猶は都會の夢に戀々せねばならぬ必要がありますか、何故に田舍の生活を忌み嫌ふのでありますか、何故に田舍の生活が不便でありますか、婦德を涵養し良妻賢母の實を示すことは、獨り都會のみに限られて居りますか、田舍にては良妻賢母の實を示すこと

は出來ぬのでありますか、田舍の地は子女を敎育するに果して不便なる事實がありますか、田舍に生活する男性は果して都會生活に慣れたる、令孃諸君の夫としての資格を有せぬのでありますか、此の疑問に對しまして、夫々解決を試みることに致します、前にも申上げました通り其男性たると將た女性たるを問はず、社會の必要上是非共都會に止まらねばならぬ者と、其然らざる者との二つがあります、前者は已むを得ぬ事情ありとして、猶は都會に滯ふることを許すと致しますも、後者は斷然都會を去つて田舍に赴きまして、夫々有用の方面に働かねばなりませぬ、東京に就て申しまするも實際有用に働いて居ります所の女性は其數甚だ少く、他は全然不生產的女性のみであります、然れども此れ等の人々を驅りて悉く之を田舍に送れとは申しませぬ、成るべく都會に入用のない處の女性而かも之を田舍に移しますれば、充分に其應用の途を有して居る處の女性は、務めて之を田舍に移しまして有用に働かしむる方法を取り度と存します、然らずして徒らに之を都會に充滿せしむるときは却つて女性の本分を傷くると云ふ危險が起つて參ります。

◎女性の都會に充滿する危險　一例を申しますれば一定の學校を卒業致しましたる御婦人が別に都會に殘らねばならぬと云ふ程の必要もないのに、都會生活の面白さに、卑屈にも其の未練を制することが出來なくつて、遂に無理算段を運らし、不平均なる配偶を求むるが如き、又た敎育の程度に不似合なる職業に就くが如き、生活の困難に迫まられては、餘義なく不義の情を賣るが如き、何れも都會生活の夢に戀々たる不用の女性に仍りて發動せらるゝのであります、然かも此れ等の人々

と申しましても其初めより不善を敢てする心底は秋毫もなかつたのでありませうが、唯だ都會生活と申す非望を脱することの出來なかつた爲めに、配合の時期を失ひ、遂に終を完うすることが出來なくなるのであります、此れ等の人々が思慮もなく教育もなく又た品格もなき下等の婦人なれば、別に深くは之を怪まぬのでありますが、苟も階級ある家庭に成育し、其父母及び一門は倶に相當の名譽を有して居ると云ふに至りましては、默せんと欲するも又た得べからずであります、常に婦德を涵養し、良妻賢母を作ると申します、學校の宣言も此に至つては遂に其用を爲さすして終るのであります、要するに以上



は學校の罪と申すのでもなく、又た家庭の罪と云ふのでもない、唯だ都會に不用なる女性を充滿せしめたる結果にして、社會が之を有用の部面に配給することの出來なかつた罪と申すの外はありませぬ。

◎婦人の教育に花を咲かす

故に此の危險を除くの方法は、一定の學校を卒業したる後に於て、其都會に必要のない處の婦人は、悉くとは申しませぬが出來得るだけ、田舍の農家に嫁入せしむるの一事あるのみで御座います、左樣致しますれば、農家にても充分に歡迎致しまして、都會と田舍との調和に就て、又た婦人の教育にも夫々花を咲かすることが出來ます、何を苦んで此のセチ辛き都會の夢に戀々と致しまし

て、遂には不幸の境涯に陷ゐる樣な事を致しますのでありますか、之れ甚だ解し兼ぬる一つであります。（つゞく）

佛國結婚事情

土肥月巴

題して佛國結婚事情と云ふも實は佛國結婚に關する總てを詳説するにあらず唯だ其の幾分慣例中略々我邦と類似せる者を列記し以て東西人情の冥合を證し讀者と所感を頒たんとするのみ

◉其の一

假令男子其の娶らんと欲する所の女子の家族と懇親の交際あるにもせよ、自身に往きて希望を述ぶるを許さず、而して若し其の周旋を擔當すべき父母親戚あらざるときは朋友の中年長者に依賴するを常とす。

◉其の二

公然縁談に及ぶ以前に於て、先づ其の女子の兩親たる者の內意を照會し、且つは竊に手を廻して其の財產をも尋ねしむ。

▲註に曰く　男子一旦縁談に亘りて破談するは極めて不面目の事なればなるべし。

◉其の三

女子の父存在するときは、周旋人之に縁談し、若し父存在せざる時は其の母に對して婚談す。

◉其の四

縁談を申込まれたる兩親に於ては、亦た能く婿方の身元其の他總てを探偵して、然る後諾否の挨拶に及ぶ。

◉其の五

女子は其の縁談に關係する席に臨むこと無し。

◉其の六
縁談は總て之を秘密とす。

◉其の七
娶らんと欲する男の方は、縁女の家に往來するを止む。

◉其の八
双方の兩親或は後見人等熟議の上、愈々縁を結ぶことに決定せば、他の家或は劇塲或は寺院或は遊歩所に於て、男女相見るを以て例とす。
▲註に曰く○○○ 是れ我邦の見合なるべし。



◉其の九
右の式既に結了せば、双方の兩親たる者、各々其の朋友親戚の間を訪問し、其の男或は其の女の爲め、披露の挨拶に及ぶ、但し縁女は隨行せず。
▲註に曰く○○○ 但し最近の親族より先にすべきも又た遠國に在る者に對しても、速に通知するを以て欠くべからざる禮と爲すが如し。

◉其の十
婚姻の披露を受けたる者は、眞實に祝賀するを義務とす縱令結縁者の一方に於て、多少嫌忌すべき

欠點あることを知るも、一大事件にあらざる限りは、默して之を撥く事なし。

▲註に曰く○○。○○。　假令之を撥きたればとて、啻に信ぜられざるのみならず、剰へ嫉妬心より無根の誣説を弄する者と思はれ、將來兩家と不和たるに至る恐あり、左れば既に當事者間に於て萬事探偵を遂げ了りたる者と見做し強て先方より問はるゝにあらずんば、進んで自ら云ひ出でざるを可とするは、東西人情の一致する所なり。

◉其の十一

結婚の通知を受けたる人は、答禮に祝賀の意を兼て郵書或は名刺を送る。

◉其の十二

一旦婚姻を通知したる上は、緣女の家に於て客を接待する事なく、而して緣女の外出を停止す。

▲註に曰く○○。○○。　婚禮用意の際は、諸事の用向多端にして、普通の禮式に從事する暇なきと同時に、緣女の外出を止むるは婿家に對し謹慎の意を表する也。

◉其の十四

嫁入道具の一切は、緣女の兩親之を給與す、而して其の價格に至つては、身分相當を限度とす。

▲註に曰く○○。○○。

(一)若し持參すべき財産あれば、其の總額の百分の五を以て、普通の程度とするが如し。

(二)從來女子十二三歳の頃より早く婚嫁の準備に着手し、漸を以て物を集むるの風ありしも、當時の如く萬事便利に、且つ新様の流行に於て年一年に變遷を見るに際しては、最早斯る見越的用意も不必要なるべし。

◉其の十五

男子より贈る所の禮物、即ち我國に於て――迎ひ

装束——と稱する者と、宛然同一意味を有する婚禮鑑の調度には成るべく緣女の滿足すべき品を用ゆ。

▲註に曰く　緣女の滿足すべき品物としては、化粧室內に用ゆべき者を最も適當とす、而して其の價なき品の徒らに多量なるよりは、寧ろ少くも實質の善良なる者數品を擇むを要す、女子の習癖價なき者を帶ぶるを悅ばざれば也

蚊トンボ物語　橘村生

美はうるはしき葉を有するも苦き實を持つことあり（獨逸俚言）

明治卅六年七月一日、武藏野の眞中で虫國議會が開かれた。東西より集る者無慮四萬、其內各代議士を選んで國政を討議せらる。これは益虫黨の首領蜻蛉大頭の助と中立黨の旗頭孑孓蚊太郎の演說である。先づ孑孓蚊太郎演壇に立ちて。

『諸君！、拙者は孑孓蚊太郎でございます。今度虫國議會が開かれまして、各々方の職分を議し、虫類が世に生を受けて居る所の義務を明かにしやうと致しますに付ては、何卒充分にお討議下さつて、之より決して人間の爲めその身分を誤られ、無辜の罪名を以て命を落さぬ樣に御確定を願ひたい（此時謹聽と呼び、蚊燻がきゝましたなど叫ぶ者あり）。其れで此拙者ですが、諸君も御承知の通り、拙者は夏出ゝ晝は物蔭などに隱伏し、夜いでて人家に入り、人或は牛馬を刺して血を吸ひますが、之は拙者が天帝より授かつた性質で、拙者が好きこのんで致す次第ではありませぬから、

如何とも仕方がない（ノー〳〵ヒャノ〳〵などと呼聲起る）。然るに人間は拙者を撲滅しやうと致し、拙者が未だ孑孑の中に溝へ石油などを灑ぎますが、拙者とて決して効の無いものではない。夫は拙者が幼虫の孑孑でゐる時分、常に水中を浮沈し水面に上り、尾端に具ふる細管を以て、空氣を呼吸し、水中に在て有機物を食ふから水の腐敗を防ぐ功がある（因に同族は池沼溝等の瀦水の中に棲む）。此孑孑が蛹と成り、再び蛻皮れば御覧の通りの蚊となるので、孑孑より直に蚊となるのではない。以上申述た通り、拙者は蚊となつてこそ人間に何の奉公も致しませぬけれど、前身が有益な事業を致しましたから、之より人間初め動物等一切拙者の身に害を加へないと云ふ御決議をして頂くやう希望致します。」と細長い脚を踏張て壇を下ると、其より討論に移りまして審議した結果、蚊は「功罪相半するもの」だから、待遇方世上の習慣通りと云ふ事になりました。

次に演壇へ上りました大頭の助は美麗な燕尾服をつけて居ります。先づ咳一咳して演じまずると満場水を打つたるごとく寂として聲を立る者もない。『我敬愛なる満場の諸君、今日は諸君に我平常の希望を聞て貰はねばならぬ。これは我蜻蛉族の虫權擴張で且又總ての虫權擴張であるから、何卒熱心に御討論あらんことを希望するは、餘の義でない。（謹聴）一體我日本帝國は古へより、秋津島と稱へて、我蜻蛉族が限りなきの光榮を荷ふてゐるので、我族の權利は人間と雖も容易に浸害することのできないものであるのに、近來惡少年共が、慘忍なまねをして、我等を捕獲しては糸の如きものでつり、甚だしきは尾を切りて棒の如きものを差し、心のまゝの惡戯をこらすを、教育あ

る父母が見てゐるのは目過することのできない處業である(ヒヤ〳〵)。それも我々が世間に害をなす毛虫や地虫の如きものであつたらば格別、常に動物に害を與る蚊や蠅の如きものを捕食し、且又昆虫の類を食するが故に農業上の益虫であるものを、暗々事理を解せぬ人間共に殺さるゝは我々血あるもの、忍び能はざる所である。而已ならず、蟻君の如き、蜘蛛君の如き有益なもの、上にも、彼の惡太郎共は手



をのばして、蟻君が穴を掘れば、土を崩し、蜘蛛君が巣を懸れば網を破り、亂暴狼籍至らぬ隈もない、斯の如きことを諸君は默して不問に附して置かれますか、我等は決して之を不問に附して置かない積りである、何處迄も追究して其名分を明かにし、獨り我々益虫族の迫害を防遏する斗りでなく、旁々以て彼等無教育の人間が動物の虐待を防止しなくてはならないのであります(謹聽)。何卒我蜻蛉族を始め、

滿場の諸君は此意を諒して、御審議の上各々其權利を主張するやうに成されて戴きたい。去すれば我秋津島の名も汚さず、我平素の主趣も通り、諸君が心中の安度も得らるゝことゝ信ずるので、決して利己一偏の議論ではなく、こは我虫國々運の消長に關することであるから、充分に御討議あらんことを。』と眞摯至誠の氣を以て述べ了ると、拍手喝采暫しは鳴りもやまなかつた。

其れからサナヘトンボ、ハラヒロトンボ、紺蜻、赤卒、麥ワラトンボ(雄)鹽辛トンボ(雌)などが交る〴〵演壇へ出て、蜻蛉の幼虫は水蠆と云ひ水中にありては孑孑を喰ひ、後一二回脫皮して蜻蛉となれば、輕き翅(飛翔力强きやう)、强き口器(活きたる虫を嚙み殺す爲め)などを具へ害虫を捕食するといふことを演說して壇を下ると、決議をとることゝなり、其結果蜻蛉は法律を以て保獲すべき事を人間の政府へ出願すべしと云ふ意見採決になり、此日はこれにて散會になりましたが、又來る十五日にも開會するやうですから傍聽に出かけるのも面白いでせう。(了)

家庭雜言

鳥峰樵夫

頭花と髻華

頭花は和名抄に、『楊氏漢語抄云頭花、賀佐之、俗用插頭花』と、あり、又伊呂波字類鈔に、『插頭花』とある、又髻華は、日本書紀推古紀に、髻華と書いて其の傍訓に、『此云于繻、』とあつて、古事記傳に、髻華は云々、木草の枝を頭に插すを云ふ、後世に插頭と云物即ち古の髻華なり、云々とある。また書紀集解に、『按古以花木枝插頭、此謂于繻、

見景行天皇十七年紀、此制以華挿髻也、云々』とある。今これを古歌に徴するに、萬葉集一ノ巻に、

山神乃、奉御調等、春部者、花挿頭持、秋立者、黄葉頭刺理、

また同書五ノ巻に、

烏梅能波奈、伊麻佐可利奈理、意母布度知、加射之爾斯弖奈、伊麻佐可利奈理、

また

阿乎夜奈義、烏梅等能波奈乎、遠理可射之、云々

また同書八ノ巻に「櫻花歌」

嬬等之、頭挿乃多米爾、

また、

秋芽子者、盛過乎、徒爾、頭刺不挿、還去牟跡哉、

また、

高圓之、秋野上乃、瞿麥之花、于壯香見、人之挿頭師、瞿麥之花、

また同書十ノ巻に、

春日野之、藤者散去而、何物鴨、御狩人之、折而將挿頭、

また同書十八ノ巻に、

安之比奇能、夜麻能許奴禮能、保與等里天、可射之都良久波、知等世保久等曾、

とある。保與は寄生のことである。また髻華の詔歌を擧ぐれば、古事記に『倭建命云々、到能煩野之時、思國以歌曰、

伊能知能、麻多祁牟比登波、多々美許母、幣具理能夜麻能、久麻加之賀波袁、宇受爾佐勢、曾能古、』

とある。

如上の古歌によつて考ふるに、上古は草木の花又は枝をその儘、かざしたること明かであつて、其

心ざまの優美なりしこと、自然の美を愛したる樣を知ることが出來る。然るを後の世に至り次第に奢侈の風に流れ、金銀を用ゐて徒らに華飾を貴ぶやうになつて、美的觀念がガラリと變つたから、時ならぬ剪綵花を挿しても、怪まぬやうになつた。然るに近來は束髮といふもの丶流行につれて、自然に髮の飾も革り、剪綵花よりも自然の花をかざす樣になつたのは、誠に目出度現象である。そこで此の現象は、敢て洋風摸倣といふ譯ではない、皇國の古風に立復つたものであると謂つても宜からう。

前垂と褌

前垂は、日本書紀には韠と書いて傍訓に、未閇毛とあり、伊呂波字類鈔には、『韍、鞅、マヘダリ、亦作二韐韎一蔽膝也、』とある。また太神式、縫殿寮式等には、『帛袾』『暴布袾』などあつて、上古前垂を用ゐたものである。其形も今の前垂と同じものであつた。さてこの前垂は、儀禮士冠禮に、『素韠』同餘論には、『鄭氏康成曰、韠蔽膝也、古者田獵、而食二其肉一衣二其皮一先以二兩皮一如レ韠、以蔽二前後一後世聖人易レ之以二布帛一猶存二其蔽前一示レ不レ忘レ古、尊祭服異其名曰黻』とあつて、支那にも古くより用ゐたりと見ゆ。而して古は、神の前にも前垂の儘にて、奉仕したものであるが、天武天皇十一年三月詔して親王以下、百寮諸人、自今以後、位冠及褌、褶、脛裳を著ることを禁じた、前垂は膝の汚染を防ぐと、又婦人抔の蹲みたるとき、其醜體を隱すには、至極妙を得た物であるが、下婢などが往々其の正用外の用、即ち鼻紙手拭に代用し、甚だしきは湯卷の代用にさへする者がある。斯の如く不潔極る前垂を、其儘食物に蔽ひて、意

の介せないものがある。若しも恐るべき傳染性の疾を有てる者の前垂であつたら、如何であらう。ア、劍呑々々。そこで前垂を用ゐるならば、白布を用ゐ、屢洗濯して常に清潔にするは勿論、その濫用を愼んで貰ひたい。

襷は、或は、繦或は襁(廣韻)或は襷(壒嚢抄)に作り、其字體詳ならぬが、神代紀に、『手繦此云多須岐』とあり、又景行紀に、『以レ蒲爲二手繦一』、允恭紀に、『木綿手襁、』天武紀に、『手繦肩巾、』また人名にも『縣犬養連手繦』、などあつて、上古よりこれを用ゐたものである。且又神代、天鈿女命天の羅をたすきとして、天岩窟戸の前に、歌ひ舞ひつることと見えたり。そこで、たすきは左右の腕に懸けて、一つには其袖を搔擧げ、一つには手の力を助くる爲に、用ゐたもので、殊に膳部を扱かうもの丶要具であつたらしい。姓氏錄に、『雀部朝臣、巨勢朝臣同祖、武內宿禰之後也、星川建彥宿禰、謚應神御世、代二於皇太子大鷦鷯尊一、繫二木綿繆一、掌二監御膳一、因賜レ名曰二大雀臣一、』また同書に、『襷多治比宿禰、火明命十一世孫、殿諸足尼命之後也、男兄男庶、其心如レ女、故賜レ襷爲二御膳部一』とあるにて明かなり。これも天武天皇十一年三月詔して、自今以後、膳夫、釆女等の手繦、肩巾、並に服することを禁じた、と日本書紀にある。

そこで前垂といひ、襷といひ、後世には貴人の前はいふも更なり、常人の前にも憚かるやうになつた。けれども庖厨を掌るもの丶要具と て、今も之を用ゐるは、古風の一つであると思ふ。

世のなかに虎狼はなにならず
ひとのくちこそなほまさりけれ

だいところ

女子美術學校講師　石井湧太郎

一　茶碗　結びさより
　　　　　輪切里いも
　　　　　もやしみつば

◎結び細魚の拵方
先づ細魚の鱗を取り、頭をつき（つきとは取る事）腹を割きて、わたを出し水にて洗ひ、よく水氣を切るべし、次に其の身を開きて中骨を取り腹骨を去り之れに鹽を振りて三十分程も置きて後ち竪二ツに切りて片身ツヽ結ぶべし、之れを蒸籠に竹の皮を敷きて蒸すべし、蒸籠なき時は味噌漉にてもよし、凡そ十分間位を度にして取出し用ふるなり。

◎輪切り里いも仕方
里いもの皮をむきて小口より薄切りにして茹るなり別に下煮等にも及ばず。

◎もやしみつばの用ひ方
小鍋に湯を沸し鹽少しばかりを摘み入れて後ちみつばの能く洗ひたるを入るべしみつばは茹で過ぎざるをよしとす之は長さ一寸位に切り揃へ用ふべし。

◎つゆかげん
かつうをぶしの煮汁を用ひ醤油は極少量を入れ其の他鹽酒を以て加げんなし能く沸騰したる後ち右の三種を茶わんに盛り置き上よりつゆを掛けて出すべし。

鉢肴　鳴戸かれい
　　　茶巾空豆

◎鳴戸かれいの拵方
此のかれいには種類甚だ多くして皆時々によりて、いづれも眞味の季節異なるものなり、星か

れい、めいたかれい、この葉かれい、からすかれい、むしかれい、かしまかれい、まこかれい（まことのかれいと云ふ意なるべし）等にして星かれい、めいたかれい、石かれい、等は五六月頃を尤よしとするものなり、然し鳴戸かれいと云ふは、かれいの名にあらずして拵方の名なりと知るべし、先づかれいの鱗をふきて三枚に卸し鹽を振りて二三十分間置きて後ち其鹽を洗ひ落し、布巾を以て水氣を拭取り、皮の方を外にして尾の方より卷き竹の皮を以て二ヶ所程を結び止め蒸籠にかけて蒸すべし、蒸籠の内にも竹の皮を敷き込むをよしとす、十五分間位にて魚肉白色なりたる時取り出し、少し冷して結たる竹の皮を解き、中程より二つに切なり、其の切口の渦を卷きたるを以て鳴戸とは申なり、さて之に醬油と味淋とを等分に合せ煮つめたる汁をかけて出すべし。

◎茶巾空豆

新空豆の皮をむきて柔らかになるまで湯煮し尤も鹽少しを入をよしとす、然して能く茹りたる時其の湯をしぼり醬油、砂糖、味りん等を以てよき程に味を付け煮込べし、醬油をあまり多く用ふる時は豆の青色を失ふ故注意して用べし、煮ながら杓子を以て搔きませ其の半分を潰すべし、之もあまり乾燥に過ざる内に火より降し、少時さまして後ち布巾を以て其の少量づゝを包み捻りて下方より母指の先きを以て少しく押すべし、之を茶巾と云ふ前のかれいに附合せて皿に盛り出すべし、

一折衷料理の一種

鹽鮭の成べく甘味なる者を撰びて皮を去り其の肉を薄く大片に切りて之に豚脂或は牛酪を塗りて金網にのせ能く炙るべし、さて萵苣、芹の類を水にてよく洗ひ程よく切りて添物とし別に白味噌を擂

鉢にてよく摺り裏漉にかけて漉し之れを酢にてどろりとする程にときゆるめ添ものゝ上に掛けて出すべし之れは一寸口あたりよろしきものなり。

▲佛國の畫家コローの逸話　佛國の大畫家コローは客を歡待し晩餐には多くの客を見ること屢ばなりしが晩餐の料理にはスープの後に必ず鱸の焙りたるものを出すを常とせり佛國の鱸は殊に味宜しからず誰とて之を好むものなかりしが常に饗應せらるゝことゝて何れの客もコローは殊に鱸を嗜好するならんと思ひ居たり左れはコローを招きて饗應する人あれば必ず鱸を馳走せざることなかりきコローは何處にても鱸を馳走せらるゝより不思議なることに思ひ或る時招かれたる家の主人に其事を尋れたるに「私は嫌ひですがあなたがお好きだと云ふことですから」と答へたるよりコロー哄笑して私は見るのも厭だが「私の料理人が何時でも鱸を出す私は一度も料理人に小言を云つたことがないから厭ながらも默つて居たのです」と語りたりとなり斯く大畫家の料理人に對して温厚なるが爲め此家に集まる人々は三十年來好まぬ鱸を食したるなり



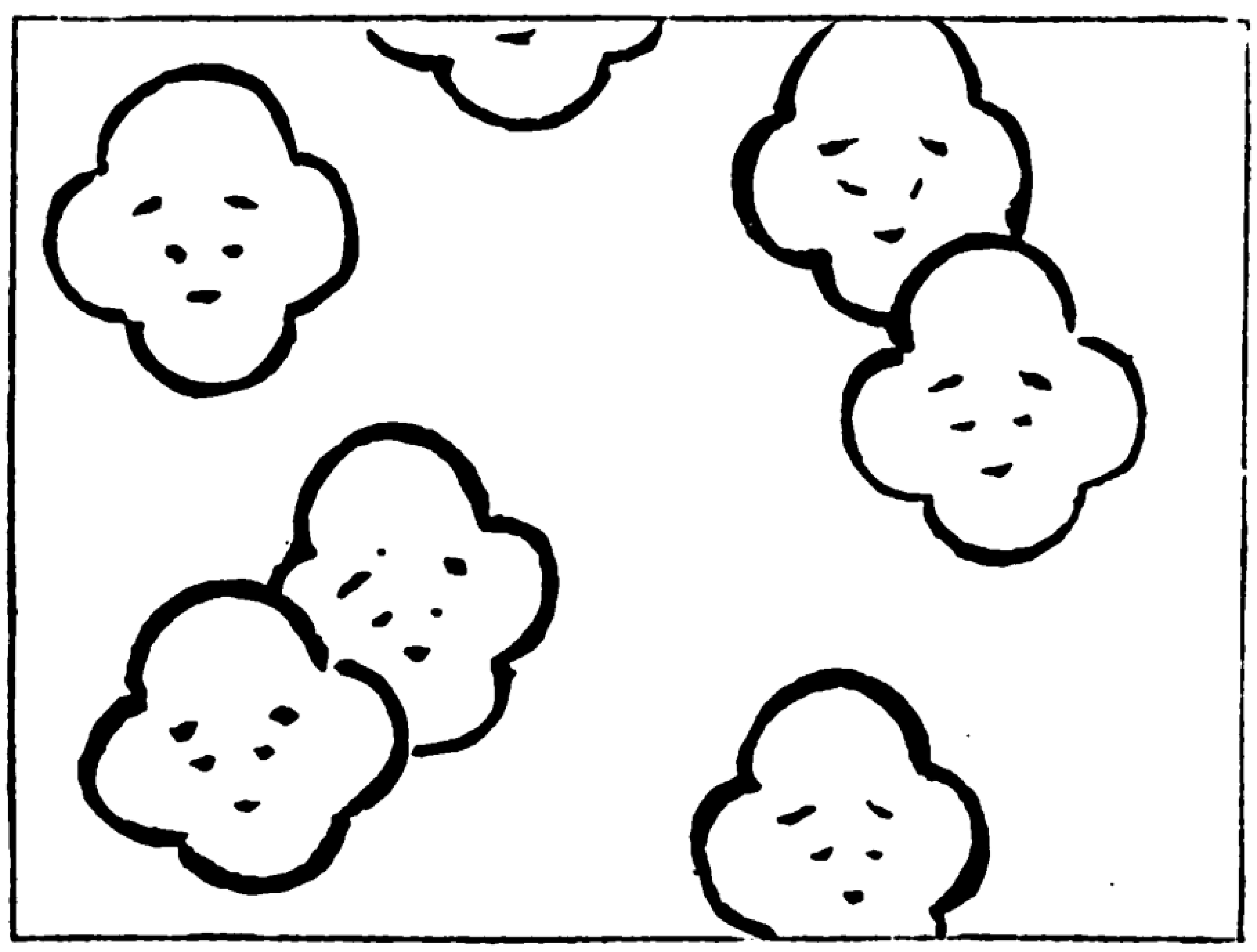
月の光り

（當世一言芳談の内）

露伴道人

◎心輕くして才鋭き男、人のやゝもすればおのが妻と相爭ひ相憎み、甚しきに至つては別るゝことなどあるを見て笑つて曰へらく、夫の好みのまゝに作りたるといふ妻も無く、妻の好みのまゝに作

りたるといふ夫も無き世の夫婦合なれば、長き年月連れ添ふ中には、男も女を嗚呼好ましからぬ女かなと思ひ、女も男を嗚呼好ましからぬ男かなと思はんことは、必ず有るべき筈の事なり。されば男の其の心根が妻が氣に入らず、女のその振舞が我が癇に觸るなど丶云ひ合はんには、爭ひは已む時無くして、緣は斷たる丶よりほか無かるべし。こは互に其の始を忘れたるいと愚なる迷ならずや。それ男の妻を迎ふる時の眞の情を檢め見よ、あなめでたの我が妻よ、と思ひて妻を定めたる人、世には幾許か有らん、心の中には或は其の色の黑きを厭ひ、或は其の身の横ぶとりなるを憾み、或は其の鼻の低きを悦ばず、或は其の



つらのかは梅

支度の乏しきを悲み、或は其の敎育の足らざるを飽かず思ひ、或は其の音樂美術の心がけ無きを歎かはしく感ずるなど、その程々につけて差違こそあれ飽き足らず思ふ節の二ツ三ツ無きは無き習なり。されども儘ならぬは世の常なればと人も言ひ己も諦めて、或は珊瑚珠を海より取り上ぐる繪にあるやうなる女を娶り、或は梅ケ谷を昆布卷に仕たるやうなる女を娶り、或は酉の祭の熊手の眞中を自轉車もて轢きたるやうの女を娶り、或は小葛籠一つに風呂敷包二つのほかには荷物も無き貧しき女を娶り、或は七の字の末は右へ曲ぐるやら左へ曲ぐるやらも知らぬ美人を娶り、或は調子外れの可笑さも分らず土佐狩野の區別も

無き姫君を娶る、娶る人々の心の中を云はゞ誰かはおのが意を矯め情を抑へざらん。女もまた是の如し、はじめて夫を定むる時に當つて、心の底の底には不足に思ふ節も無きにはあらねど、餘に自己が心をのみ高く持たで古の小町の愚なる例に似るにも至らんと思ふ恐怖もあり、且は父母の辭、人の勸なども無下には拒みかねて、おほよそ宜からんと思ふ方に我身を寄するなり。されば夫婦の語らひのはじめは、互に少しつゝの不足はありながらも好と思ふことの多きに其不足ごゝろを矯め抑へて、めでたく縁を結ぶなり。然に月日經るほどに、いつと無く互におのが不足心を抑ふる事を忘るゝまゝ、男は吾が妻を醜しとて厭へば、女はまた吾が夫を才無しと侮り、男料理拙しといへば、女小づかひ錢足らずと云ひ、女は男の茶屋酒飲むを罵り、男は女の小芝居覗くを叱り、彼方の頰の膨れ返る時には此方の額に青筋立ちて、終に泣聲は向ふ三軒に聞え、耻は兩隣より廣ごりて、男も女も不幸の境に墮つるに至る。是皆其のはじめの心を忘るるより起るなり。おのれもまた世の人と異なるところあるものならねば、時々は堪へがたきまでに吾が妻を厭はしく思ふこともあり、吾が妻もまた我を好ましからぬ男なるかなと思ふことありげなり。されどおのれは然る時には直に妻の傍を去りて、或は一日二日、或は三日四日、我も彼を見ず、彼も我を見ざるやうにすれば、おのづから二人の心そのはじめに返りて不足心を矯め抑ふる念の湧くと、年月相睦びたる、愛情の流石に復起り來ぬにしもあらぬとのために、おのづから互の惡さところを相容すやうになりて、世の人の如く耻をあらはすまでには至らざるを得るなり。月の光の都べてのものを美しく見するは其の明らかさ足らざる

が故にて、川の彼方の景色の好く見ゆるは、眼の力の汚きものを見出すまでには達かざるがためならずや。亡せたる人の特に戀しく懷かしきは、其の人既に我が記臆に精しく明らかならざるより、その人の惡きかたは夢と消え失せて好きかたのみ現に殘ればなるべし。かゝる道理をもて相遠ざかるは相思ふよすがとなり、こゝに薄らぎたる感情を深め、高まりたる惡感を消し去るの働きをなし、面白からぬ家の內のありさまを復び春風吹くが如くなすを得るなり。此の理を知らぬ夫婦、相厭ひながら相近く居り、相惡みながら相逼り坐るものから、小さなる路の上に二つの車を西東より推し進むるが如く、相毀ひ傷つけずば已まざるやうに至る。愚なる哉、自己を幸福多くする事を知らぬ男女や。とて鼻うごめかして語りけり。

名婦の墳墓（二）

内田茂文

淀君

大阪北野太融寺內なる辨財天堂の奥に在り。即ち是れ淀君の遺骸を葬むれるものにて、素大阪城の北、鴫野にあつて淀姫神社と稱されたるが、去る明治十年中、前記の處に移し、石を建て刻して『淀姫之墳墓』と記せり。

京橋の倭文

倭文は江戸京橋弓町伊勢屋平右衛門の一女にして、世の彼を傳ふるもの稀なり。而も彼は幼より加茂眞淵の門に投じて研鑽し、最も和歌和文に長じたり。惜いかな天假すに年を以てせず。享年僅に廿二歳にして、寶暦二年七月十八日沒せり。墳墓深川本誓寺墓地に在り。左の一首は彼が辭世の

吟として傳へらるゝ所のものなり。

ひとのよにさきたつことのなかりせば
きりのひとはもちらずやあらまし
和泉式部と小式部内侍

是れ其、倶に何の地に於て沒したるを知らざれども、予は先年房州に旅行したる際、同地の那古寺境内に兩式部の靈塲あるを認めたり。塔は何れも祠の裡に安置されたものにして、一見、寶篋塔の如き形狀なるが、その石材も兩式部が生存時代の物とも思はれず。且つ同地に塔の存在するに就ての正確なる信據すべき傳説のあるなし。思ふに是れ何人か誤り傳へたるものには非る歟。

善となり惡となり、苦難を受け、幸福を受け、富裕を致し、貧困に陷るは、皆我が心ひとつにあり　スペンサー

女子講話會

一記者

婦女新聞社の催ふしに係る第一講話會は本月十四日、神田帝國教育會で午後一時から開會された。聽衆は女學生の他、二三雜誌記者をも雜へ、約二百名ばかりもあつた。其の內重なる人々の演説要點をかい摘まんで記せば、

◎藤田文藏君の女子に對する希望といふ演説は、中途で聞いたので、其の要點は知らないから省くとして次の

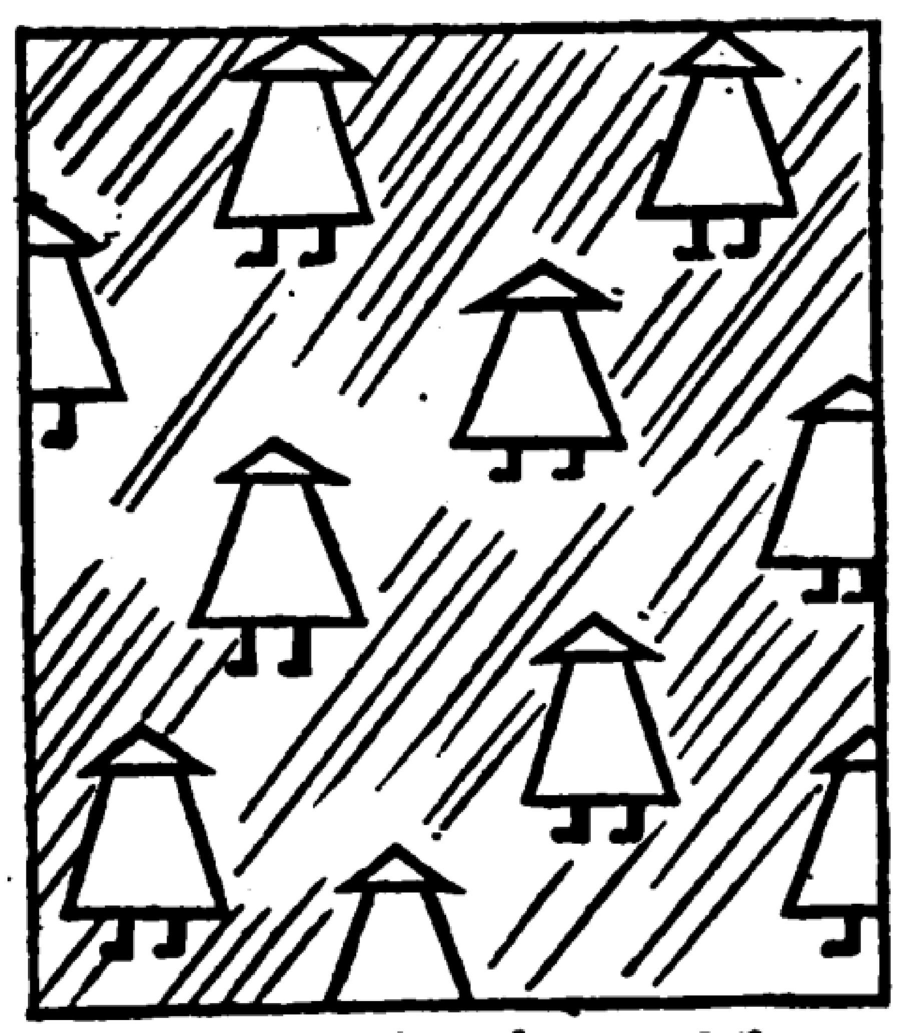
◎三輪田君の動物虐待防止會に就いてといふ演説は、世の中には哀なものも多いが、我が苦痛を告ぐることの出來ない者程憐なものは無いと前提を置き。それより無告の動物其の者に對しては、萬物の靈長として誇つて居る人間は、必ずこれに同情を表せんければならぬと斷定し、猶進んで五個條の例證即ち、(一)人道上より推して動物にも愛を及ぼすといふこと。(二)小兒の性として、動物を虐待し面白がる其の惡習を矯めて之に愛を及ぼすといふこと。(三)法律上よりして動物を虐待するの害あること。(四)農業上或は社會經濟上よりしても虐待することの不都合なること。(五)自然の美を損する點より不條理なるといふことを上げて、動物虐待の無慈悲なる理由を。明白に述べて、此故に動物虐待防止會の設

立せられしものなれば、諸嬢子達願くば奮つて、本會に同情を寄せられたしとのことであつた。次は、

◎安井哲子孃、態度悠々として壇に登り、流暢なる辯舌を振つて、婦人の矛盾的生活といふ演題に就いて、喋々述べられた。さて其の要は從來我が國の婦人は、皆自己を中心として、利己的生活ばかりをして居るから、自然彼我人情疏通といふことが出來ない、それが爲め、厭世的世間知らずの人物と成つて、賢母良妻の意義に背き、却つて夫の爲め害になるといふことが湧いて來るから、從來の矛盾的生活法を打破し、何んでも自己を捨てゝ、世態人情を察し、甘く樂しく世を渡つて行かねばならぬと、滔々數萬言、適切なる例證の下、噛んで含める樣に話されたのは實に熱心の程感服されて面白かつた最後に、

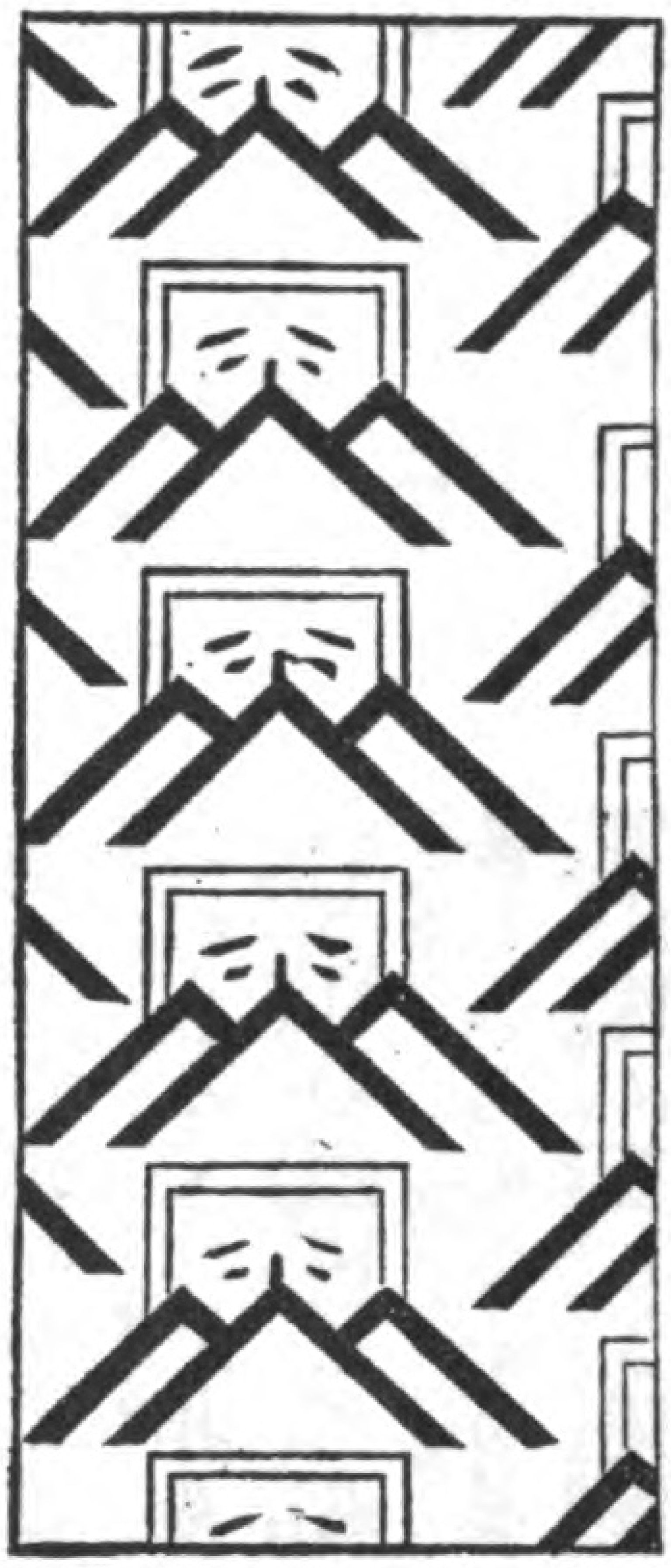
◎巖本善治君。何か新らしき女學といふ題にて、長髯を撫し、靜々と說き出された。女子教育は昔は無かつて、明治御代殊に近頃になつて、非常に盛んに發達して來たと、往々此の如き事をいふ人が有るが、これは大變な間違で、如何なる時代でも女子教育は有つて、殊に德川時代の其の教育は世界に無からうと思ふ程、女子教育をやつて居る。決して近頃突然起つたのではないと一つの狼煙を噛ませ置き、夫れから德川時代の女子教育は支那の儒教から取つて、却つて其の本家本元よりも立派に教育した。其の原因は家の建築で分ると說明して曰く、「支那人の家でも臺灣人の家でも、皆別々の室になつて、婦人の室屋と云ふものは、夫でも自由に出入することは出來ない樣にして、婦人は其の室内では神聖にして侵すべからざる權力を持つて居るのである。而し支那婦人は男子に壓制されて居ると、表面上より見れば、かう考へられるかも知らないが、其の室内にては眞の女王で、權勢の盛んなるは大したものである。が其の壓制的に見ゆるのは、婦人の勢力が外に現はれず、常に室内に潜まつて居るからである。夫れと違つて日本の家の建方は、ガラン開きて何處の隅々までも一眸に見ゆるに、其家に在ては主人の勢力は甚だしくある、西洋や支那の如く、キチン／＼と室が定つてないから、女子は毎日朝から晩まで男子監督の下に、一日を廚屋に暮して行く。此れが幕府時代女子教育の有樣である。だから女子は常に覺悟して注意を加へ、能く其の業務をやつて行く。夫で我儘勝手な振舞は無つた。」と更に語を接ぎ、愼重の態度をとり、聲を低くめて「教育の屆いたも一つは、日本の女が他所に嫁す前に當つて、耳底に響く一種の恐しき言葉がある。即ち姑舅若くは小シウトと云ふのである。此の言葉は他家へ行けば、苦むので有るぞと云ふ意味を表して居るので、西洋等と差ひ此れから苦勞しに行くと云ふのである。實際左樣で、自分が樂をするのは、我が子に嫁を貰つて、財産を讓つて其處で始めて、隱居然たる娛樂が出來るので、實の樂の間は短かい果敢ない」と感慨に堪へぬかの如く、しばし聲を吞んで、此度は一段力を入れ、「近來學校が盛に出來たからと云うて、女子教育が完全に行はるゝとは云ひ難い。なぜなれば、學校教育は一人／＼に對

して完全に教育することが出來ないから、理想の教育では無い。處が昔の姑は家庭の教師で、夫れ〳〵の格式に依つて嫁を教育し、朝から晩まで一意專心監督して行く、之が即ち立派な教育で有る、其で教へられた女は、彼の三從の敎に叶つた、實に見上た立派なもので有る。我が身を犠牲として、しとやかに夫に仕へて行く程、立派な奇麗なものは世にない」。此の如く縷々徳川時代女子教育の盛に行はれた、事實を稱揚して、女性の從順たるべき性を鼓吹した。が忽ち一轉して舌端は其の缺點に及んだ。即ち「第一女子には敎へないと云ふ敎がある。それは女は社會政治國家の事は知るまじきことゝして有つた。故に男子の敎の中に社會上の事等は女に語るなとして、之が又男子の敎で有つた。何故其樣に定めたかと云へば、凡て女は秘密を保つことが出來ないからとして有る、之は甚だ間違つた話で、女は却つて秘密を保つ方で有つて男子こそ劣つて居ると思ふ。女子はたとへ友人間たりとも、決して心を許して云ふことはしない。それだのに何故に秘密を保てないかと云へば、即ち秘密を保つ丈けの教育が無い爲めである」と一刀兩斷、思はず快哉を呼ばしめた。夫れより其の秘密を明された女子は、之を處理する智力の無い爲め、父兄に相談を懸け、衷情を訴へて憐みを乞ふに至るを以て、其の洩るゝ初めなりと云ふ世に有觸れの事實より、羅馬の英雄シーザーの暴横を憤り、之を刺さんとして巧んだ友人ブルタスが、其の妻ポルシヤ憂悶數日の後、腕を傷り血を流して誓ひし眞心に感じて、秘密を打ち明けたのを、よく藏して夫を勵まし、終に議場に於て決行せしめた美談を例として、悲壯淋漓たる程に聽者をして大に悟る處あらしめた。第二は子供の教育に智識がないため、人に斗り預け置くといふ弊害に就いて、大家の家庭の例證を上げ、第三女を輕んず、即ち人間として男子より劣つて居るとして有る根本の間違と云ふ問題に至つて、勵聲一番、「女を劣つた者として教育するのは間違である。凡て教育には信仰を持たしめるのが大切で、其の信仰の上に立つて教育し、始めて進歩するのである。夫に女と云ふものは、此程迄行く者として、其丈けにしやうとするから間違で有る。女は男子よりも劣つて居るものとの觀念の有る中は、決して思はしい教育は出來ない。而しながら幕府時代には之に制限を立つるの必要が有つたらふが、現今は伸びる丈け伸ぶることの出來る社會であるのに、女子を制裁して教育するのは、甚だ不都合で有る」と大に憤慨して、毅然たる態度をなし、猶一氣呵成、自今明治の御代にある人々は女子を尊敬し、女自身も我が性質を敬すべし。重すべし若しも人々自分を卑むが如き、野卑な精神があるならば、早早に捨てゝ仕舞ればならぬ。精神の源泉を引出さしむるのが教育者で、此を出すのが自己の勉强であるとまで說き及ぼした。


雨ふり小もん

缺點攻撃は此れ位で有つて最後に、青年の時は父を思ふよりも多く母を慕ふとの一事に就いて母親に動かさるゝは青年男子である。何故なれば、母親が男子を敎ふる時分は理想を以てする、また千の方でも理想を以つて聞いて居る、故に其の心の琴線に觸ることが美くしく且つ速やかで有ると說き、下の如き哀れなる友人某のありし昔の實歷談を悲痛なる音調にて語り、そゞろに聽者をして感涙に袖を沾ほさしめた。其は「私の古い友人で、家は極めて薄祿の武家で、其日〳〵の食物に追はるゝひがない痩世帶であつたが、武士は喰はれど高楊子とか云つて、武士たるものは食はないからと云うて、決して卑い振舞はしなかつたものである。それで友人の母は毎日毎日機を織つて、出來上つた品物を夕方賣り、米酒等を買つて、夫を父に進め悅ぶ顏を見て、樂みとして居た。或日の事、友人がまだ七八歲位の頑是ない時であつたから、食事の時刻外突然歸つて、何か食べ度いお腹が空いたと、一心に機を織つて居る母にむつがつたけれども、母は何とも云はない、幾ら云つても何とも云はないから泣き叫んだ。すると母は降りて友人を引しばり背に負うて、又機を織り出したが、餘り默して居るので、うつむいた母の顏を見ると。悄然として涙をポツリ〳〵と落して機を織りつゝ、一度や二度御膳をたべたくないと云ふやうな子が欲しいと云つた。嗚呼其の言葉は武士の理想を云つたので有つたから、非常に感じて、未だに耳の底に聞ゆる樣な心地がするさうだ。又或日平常(ふだん)から母が遊んではならないと云ふ一人の子供に賴まれて、鎭守の神の鳥居の傍で人の來るのを氣を付けて居た、處が其の惡童は賽錢を掠め來て、勞を謝し、羊羹を澤山買つて呉れた。何がさて常平生粗食をして、ひもじい思をして居る事で有るから、雀躍して悅び、直に之を口にせんとしたが、不圖先日の事等を思ひ出し、母に斷はらずに食することの何となく厭な心持がするので、其を抱へ一目散に我家を指して歸つて來て、かく〳〵と母に告げた。すると母が悅んだの悅ばないのつて、椽端をあちらに飛びこちらに走り友人を抱へ頰ずりをして、後の畑に連行き・よく御前はそれを食べんで呉れた、それでこそ實武士の子だと云はれて其の羊羹をは向ふの川へ、ザンブとばかり投げ込むだ。食い度い〳〵と思つて居たおいしい物を捨てられたのであるから、呆れて眺めて居ると母は又抱き上げて、ホントに御前は好い子だよ、それで今晩は御褒美として私は御前の好きなものを、何でも買つて上げやうと云つて、其晩大變褒られたといふ事がある。嗚呼其の時母の悅んだ有樣が眼に見ゆる樣で忘られず、何時も眼前にチラツイて非常に精神上感化を及ぼし、終に身を立つる事が出

角だるま



來たさうだ。此れ皆母の青年に及ぼす感化である。だから能く之に鑑みて子を教ゆるには注意しなくてはならない」と云ふ談で實に家庭教育の眞粹を穿つた美談である。之を聞いて居た滿堂の聽衆は水を打つたやうにヒツソリとして、窓外只だ青葉若葉を渡る風、颯々とさゝやいて居るばかりで有つた。總て時間も迫つたから一應此迄として、又第二回講話會席上で續を話し、何をか新らしき女學といふ本問題を解決しやうと云うて、拍手に送られて靜々と壇を降られた。

七夕

小畑いく子

行く水の晝夜を分たぬ如く、總ての事物循環して暫くも息む時のなきは、天地自然の現象であります、さればこそ幼兒はいつしか壯年となり、壯年は老いて終に死す、其死したる當時こそ猶其人の事蹟などに就て、是非の評などもし欣慕もしまするが、遂には其評者も亦失せて共に全く此世より忘れられて仕舞ふものであります、それはまづ人の上の事でありますが、凡ての物が皆其通りであります、第一に目に付き易きは諸種の流行であります、去年の流行は今年廢れ、春の流行は秋を待ちませぬと同じく、世の中の事は暫くも停止て居るものではありませぬ、それ故古き事は漸々世に忘れらるゝは是非もなき事であります。

いづれの國にしても其歷史を見るに隨分其沿革は甚しきものであります、我國などもこの三四十年間は殊に著しき變遷でありました。

明治の御代になりましてよりは、一般の朝廷の御儀式、年中の行事凡て一變しましたのでありますから、今では其名は知りて其實を知らぬと申事が大分あります、然し現今までは其時代の人も多く殘り居る事でありますから、全く忘るゝと申まではには至りませぬが、今より生ひ立ちます人に至り

ましては殆どしらぬ事のみとなりませう。まづ以前には重きを置かれましたが、今では全く廢されて居るのは、彼五節句などでありますが、其内にも、三月、五月は初子初孫のうれしさに、何にもあれと思ふ心の余り、雛を祭り、武者人形旗吹貫などをも飾りまするが、重陽は栗の飯に面影を殘し、七夕は形ばかりの五色の紙を小笹の枝に結ぶ事なども、少し片田舎ならでは見る事のあきやうになりて居ります、其今に殘れる處と申しても、其何の故にするかと申事などは、殆ど無頓着の有様であります、然し昔時は彌生、端午よりも盛に行はれた事は、古き撰集を見ても明であります、古今をはじめとして代々の勅撰集の、秋の部を見れば、まづ七夕の歌を以て充してあります。

古今集秋の上に

よみ人しらず

こひ／＼てあふ夜はこよひ天の川
きり立ちわたり明けずもあらなん

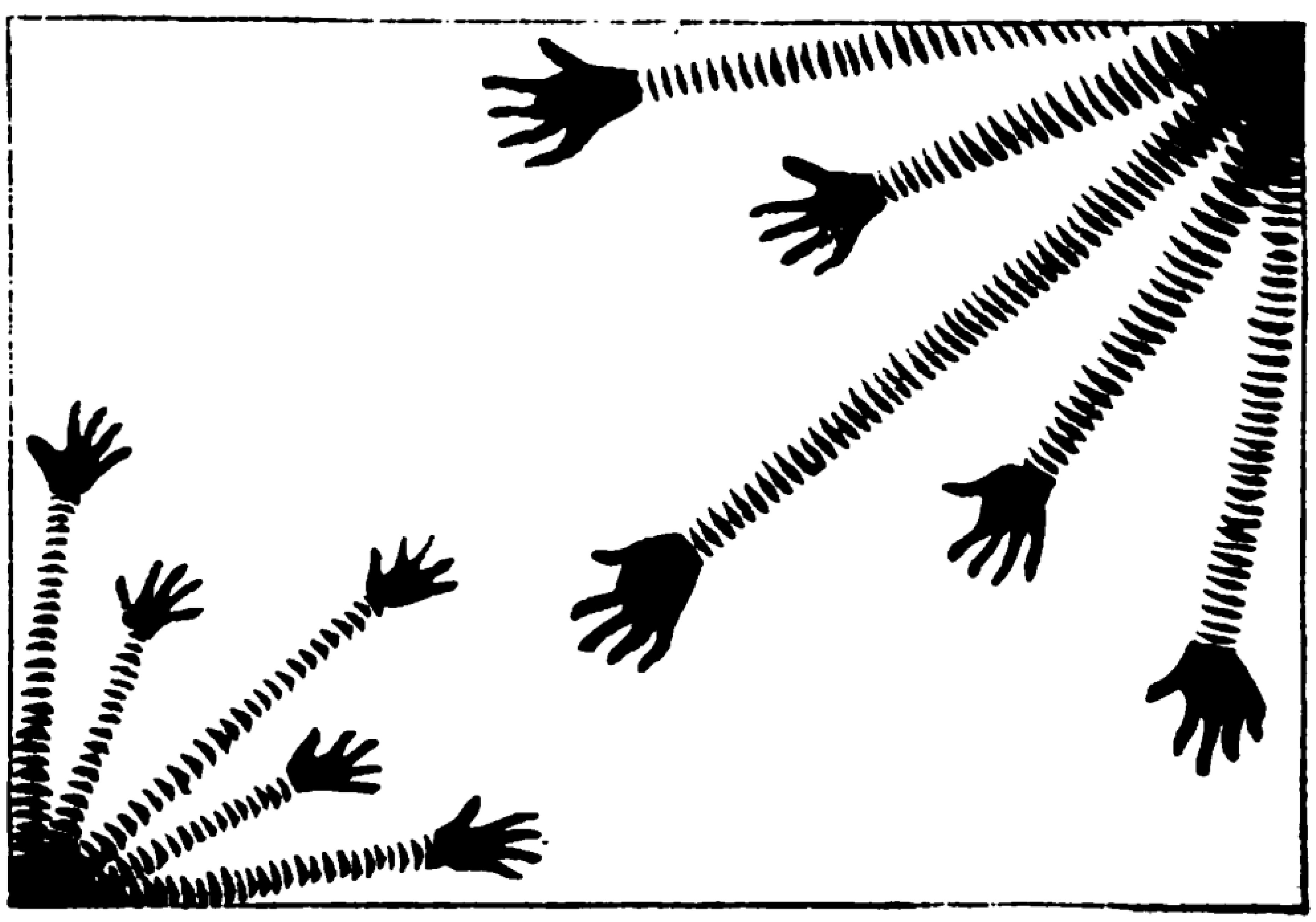
續後撰集　　赤人

一とせに只こよひこそたなはたの
あまの河原にわたるといふなれ

これらを始めとして名高きもの丶みにても數限りもありませぬ、そこで今も猶歌題にはよく出るものでありますから、聊か御子様方の御參考までに、舊記の一部を御紹介致して見ませう。

扨此七夕を祭ると申事はいつの頃より始りましたかと申しますと　隨分古い事でありまして、天平勝寶の七年、即ち孝謙天皇の御代で今を去る千百四十八年のむかし、始めて朝廷の御式に加へられたのであります、それより御代々年毎の七月七日には行はれた事でありますが、これも源と唐風輸入にあるのであります、唐では天上に銀河といふがある、其河を隔て丶居る牽牛、織女といふ二つ

の星が七月七日の夜は河を渡りて相逢ふのである
から、此夜は棹の先に種々の供物をなし、五色の
糸をかけて祈れば、如何なる願も
三年の内には必ず成就するもので
あるといひ傳へて、之を乞巧奠と
號して居るのであります、其事の
いつしか我朝に傳來して來たので
ありますが、折ふし何事も唐風を
盛に摸した時代でありましたか
ら、忽ち朝野に傳播したのであり
ます、即ち織女を和名に呼びて、
たなばたといひ牽牛を彥星とも牛
かひとも申したのであります。
扨朝廷にては此七日の朝は索餅を
奉ると申して、內膳司にて索餅と申す團子の如
き物を調進し奉る御儀式があります、是を此日に
食すれば、年中の惡鬼を拂ふといひ傳へてゐるの
であります、それより夜に入りますと、清涼殿の
御庭に机四脚を置き、其上に燈臺
九本を立てゝ之に點火し、机上に
は種々の供物を致さるゝ內にも、
箏の琴などは調子を秋のしらべに
して供へ又盥に水を入れて置く、
之れは星の影を映して見る爲めで
あります、又夜すがら空だきもの
をくゆらし、或は梶の葉に歌を書
して供へ、棹の先には五色の糸を
かけます、之をねがひの糸と申す
のであります。
かくの如くにして禁庭に於かせら
れて盛に行はれたものでありますから、自然下之
に習ふて非常に盛典となりましたのであります、

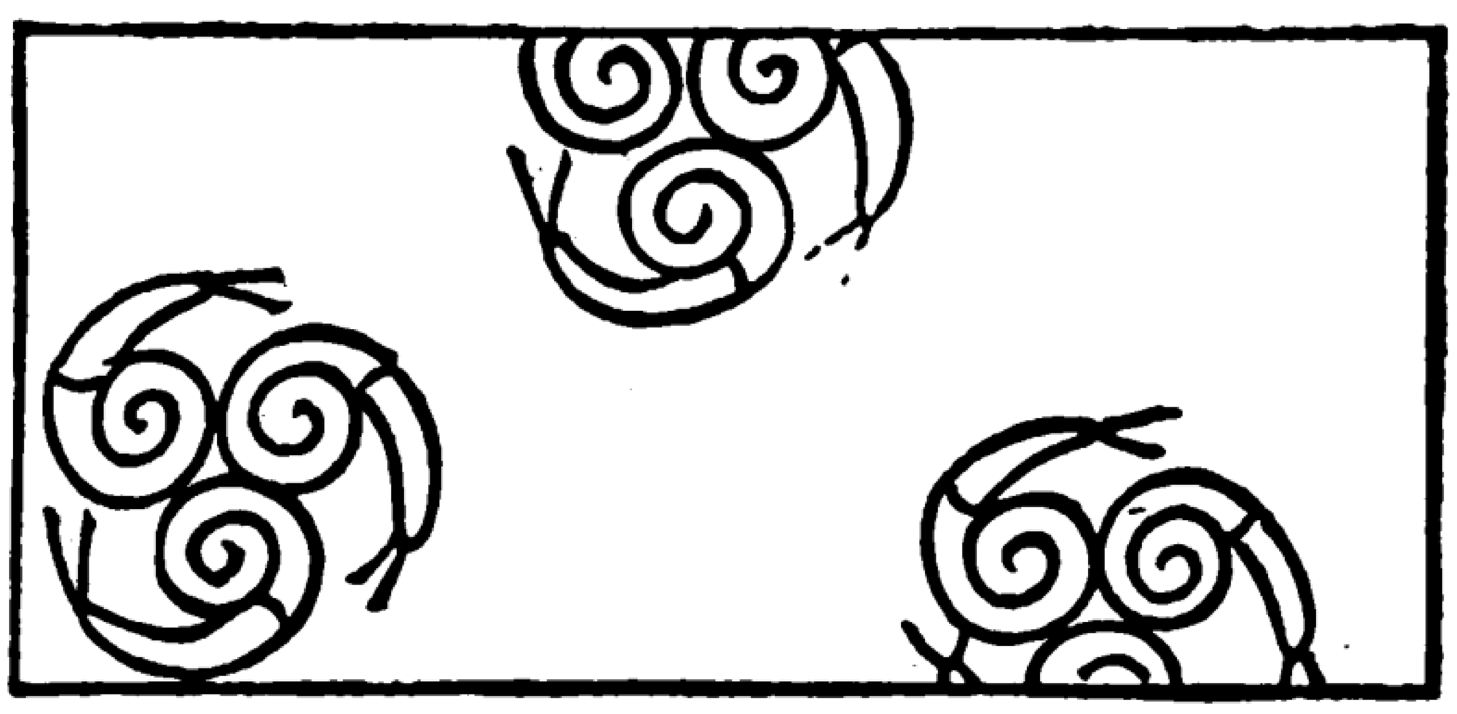


ゑんかうしぶり

そこで此日梶の葉に書くとか、或は短冊に書して棹に付るとかいふ爲めに、七夕の歌會なども催されたのでありますから、七夕につきての緣語は澤山あります、即ち『ねがひの糸』と申すは前に述べた通りの事がらより起り、又織女と申す緣よりして、糸とか衣とか申す言葉を多く用ゐるやうになりました、『星合の空』は申す迄もなく二星の相逢ふよりいひならひ『鵲の橋』と申すは其夜鵲多く天の河に集り來て互に翼を伸べて橋となして織女を渡すと申事よりいひ始め、『紅葉の御舟』などの詞は全く古今集の

天の河もみちをはしにわたせはや
たなはたつめの秋をしもまつ

とあるよりいひならはしたので、凡てかやうな都合で、折しも時は秋の初め、萬物蕭條として、風の音露の亂れにも思ひをくだく頃、天上にありといふ此情事を益々人間の理想を以て、かにかくといひなしたのでありますから、つまりは一つの迷說と申してもよいのでありますが、何分にも久しき慣例となりて居た事の、むげに世に忘れらるゝもと思ひまして、此七月の誌上をかりて、聊か述べましたのであります。



まひまひともゑ

高野山（口繪參照）

錦街隱士

紀州高野山は眞言宗の開祖釋空海勅謚弘法大師が今を距る千九十年の昔人皇五十一代嵯峨天皇の弘仁八年に開創し給へる所なり、此山は女人結界の靈場とて昔時其大門より以内は婦女の立入ることを禁止せり、以て當時の佛

教が如何に婦女を待遇せるかの一斑を窺ふに足るべし、然れども是特り佛法に於てのみならず王法に於ても亦女人の僧寺に入るを禁じられし也、嵯峨天皇弘仁三年四月の勅に云く、比來俗輩男女僧尼の院に入り聽講に託して屢侵忤あり外勝因に似て內實に淨業を汚す自今男の尼寺に入り女の男寺に赴くを禁ずと。元來高野山は一宗の大學校にて幾百千の青年僧侶を薫陶して名僧智識と爲す所なるに妙齢婦女子の出入自由なるに於ては明眸皎齒は之を戒むると色にありと云へる年輩の若僧を誘惑する一大魔障となり、大に其學業を妨げて遂に之を墮落せしめ、延て一宗の盛衰に及ぶの大事を生ずるの恐れあれば慧眼なる大師は早くも該山開創の始めに之を女人結界の地となし、滿山幾千の僧侶をして女人を視ることを得ざらしめたるものと覺ゆ、其用意誠に到れり盡せりと謂ふべきなり、本誌口繪に掲くるものは同山の大門、金剛峯寺、金堂の三建築なり。

大門　山の西口にあり、棟は南北に横はり、扉は東西に開け、二階作り十五間に十四間の大樓門にして高く雲表に聳えたり。遠くは紀南の海洋を眼中に收め、近くは一山の高厦喬木を脚下に見る。是れ大師開山最初の建立にして保延年中座主定海の再建せられしもの、左右の大金剛力士は大佛師雲慶の作と傳へぬ、勇猛の形相宛も活けるが如し。

金剛峯寺　是れ一山の座主寺にして弘法大師の高弟眞然僧正の住職たりしより今に至りて三百五十餘世に及び、山內の寺院及び全國の末派を統轄せり。中世應其上人のとき豊臣秀吉再營せられしより、桓武嵯峨靈元以來歷朝天皇の尊儀を安置し奉る。殿內柳の間は關白豊臣秀次が文祿四年七月十五日切腹せし處なり、殉死六人、秀次の墓は光臺

院の後にありと云。

金堂　兜卒の內院四重九重の摩尼殿を表して造立せしもの、本尊藥師如來丈六の座像大師の作なり、此他の佛像多くは皆大師の眞作又は唐より將來し給へるものにて美術彫像の標本となるべきもの多し、平淸盛の畫ける金胎の曼荼羅も此の堂內にあり。此堂大師の創建以來屢回祿の變に逢ひ、現今の建物は萬延元年の造營に係ると云ふ。

日比谷公園《上》

山岡超舟

沿革

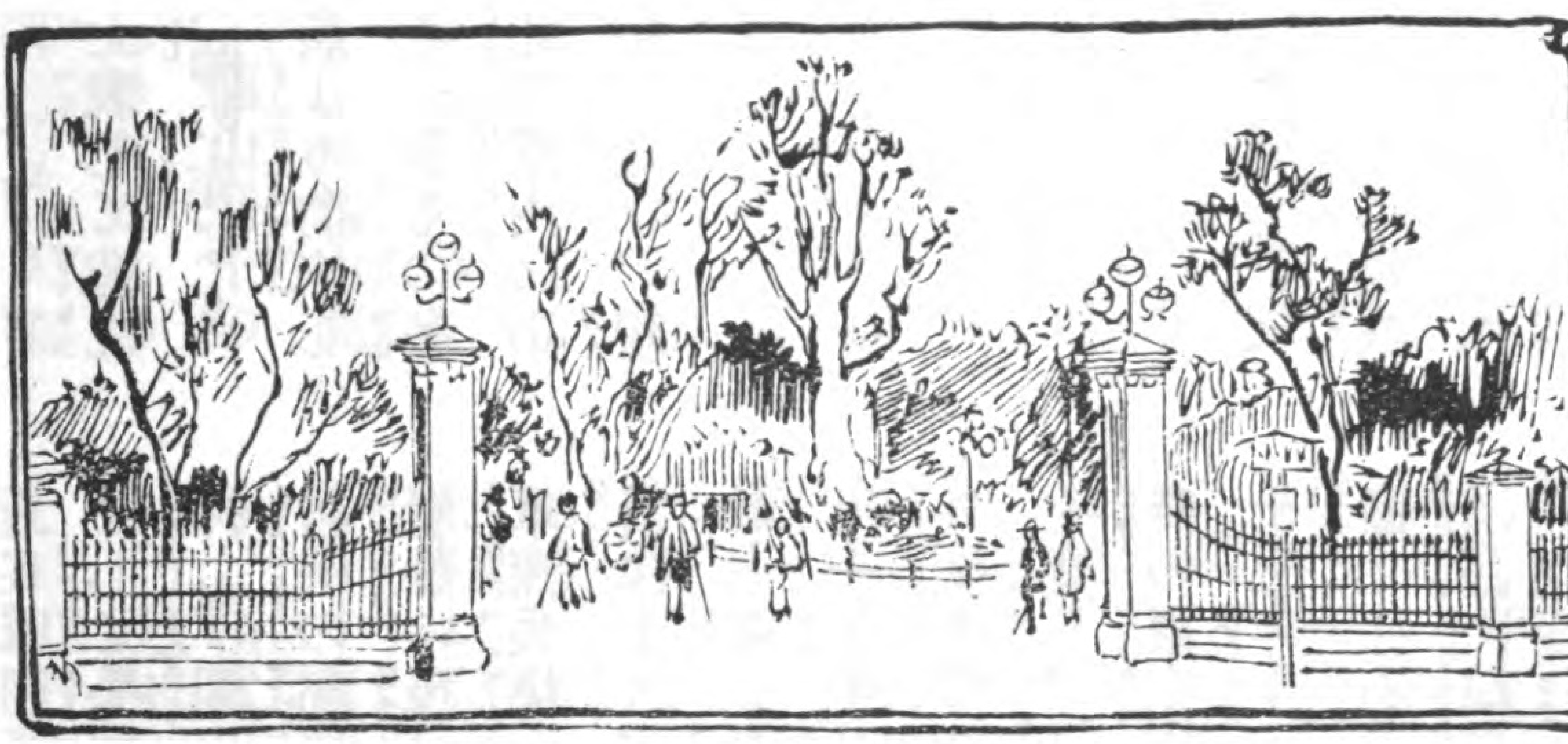
規模大ならずと雖も、五萬四千餘坪の面積を有し、東京市民悠遊の處として、又其の樂土として、建設せられたる本園は、實に十七萬五千餘圓の金額と、一千七百餘日の光陰とを費して、纔に去月第一日を以て開園の式を擧行せられ、一般衆民逍遙の地として公開せられぬ。

抑本園の地たる、幕府繁昌の往時は、毛利鍋島諸侯の邸第にて、武者長屋を設けられし處、維新廢藩の後は邸宅取除かれ概して長州原と稱し、陸軍練兵場となりしが、明治廿二年五月市區改正設計により、初めて日比谷公園の名稱起り、其の後廿七年九月日本園藝會に於て設計を試み、越えて卅一年十月に至り、漸く地ならしを爲し、同時に外園と周圍下水とを取り設けて、金八萬二千餘圓を費し、辰野工學博士等の細密なる調査に據り、時の東京市助役吉田弘藏氏造營委員長となり、三十三年十一月以來專ら之が計畫に力を注ぎ、特に、衞生に石黑男爵、公園建設に本多林學博士、花壇園藝に福羽逸人氏、造園に小澤圭次郎氏、美術噴水電燈等に齋藤久信氏等委員となり、熱心なる盡

瘁を以て、今日の施設を見るに至りたり。

概　景

本園は外部を圍むに鐵柵及び鐵鎖を以てし、門を設くること六つ、門柱總て石材を用ふ、其の內、華族會館に面する日比谷門最壯觀なり。是れ本園の正門にして、日比谷町より入る處、而して、有樂町より入るを有樂門、外櫻田より入るを櫻門、霞ケ關より入るを霞門、內幸町より入るを西幸門、幸橋より入るを幸門と稱し、各々其の地名に因りて名とす。園內に休憩所二ヶ所、共同椅子百五十脚、瓦斯燈七十基、便所五箇所の設け



日比谷門

あり。其の他アーク燈十基、共用水栓等をはじめ、音樂堂、公會場、和洋料理店など未設のものまた少からず。道路は車道人道の二とし、車道は巾三間以上にして、延長約一千間あり、人道は巾三間未滿なれども、其の延長約三千三百間を有し、以て縱橫に通ず。下水は道路の兩側に設け、之を暗渠に疏通す、其の內經七寸より二尺に至り、總延長二千六百間におよぶといふ。更に園內を大別すれば、東南、西南、東北及び西北の四部と爲すを得べく即ち東南部は、運動場にして最も開濶の地たり、其の競走用として設けられたる道路

の如き、延長實に三百九十間に至り、内部は小砂を一面に敷きたる大廣場にして、四千八百七十坪を有す、其の北端に音樂堂を設くる準備あり、されば樹陰をもるゝ嚠喨たる音響に心身を清め、終日の勞苦を忘て天界に遊ぶ思ひを起さしむるも、當に遠きにあらざるべし。西南部は森々たる樹林の地にして實に幽邃なる深山にわけ入る趣あり。此の二大部の中央の小丘には、躑躅を滿栽し、其の傍に泉池噴水の設けあり、東北部は公會堂豫定地にして、今假に花壇を設け、其東北端の泉池にもまた噴水あり。而て、西北部は日本風の庭園豫定地なれど、いまだ竣功に至らず、假に殘土を盛り小丘を築き、以て眺望を縱にせしむるのみ、其の麓の平地は一面の芝生にして、恰も青き毛氈を敷きつめたるが如し。園中いまだ珍花異木ゆたかならざれども、樹木の如きは其の種類三百を越え、其の數約二萬四千三百五十本に及び、花卉は百三十五種約一萬二千餘株ありて、見渡す限り大小の草木園内に充滿し、四季をり〳〵のながめ乏しからず。されど二株の公孫樹を除く外は、大概みな若木にして、所謂『サビ』なければ、今後十數年を經るにあらざれば、之が有趣沒趣の議論をなすべからずと雖も、遍く泰西諸國の風を參酌し、短を去り長を取りて設計を盡したる、文明國のパークなるもの、如何でか遊ぶ者をして、其の精神を清め煩勞を洗ひ、身體を養ひ耳目を娛ましめ、覺えず快呼せしむべき、神韻縹緲の風趣なかるべきや。

最初本園は、園内に於ける景致を區畫して各雅名を附したりしが、中途其の事止み、今は全く無名となりたれど、予は假に題目を附して其の便を計り、最も佳勝の處二三の美を諸媛に頒つべし。

玉の井

日比谷門を入りて廣濶なる運動場を左にし、車道によりて右すれば、木立涼しき翠陰に混々として盡きざる一つの井戸あり、あふれて流るゝ水、はなはだ清冽、玉の如く地も亦蕭爽なり。三伏の日、暑を茲に避けて、手に水を掬はんか、夏なほ寒き心地すべし。

花壇

樹陰の井戸を過ぎり車道を人道にかへて進めば、程なく洋風の花壇に至る。こゝは主として西洋の草花を栽ゆるものなれば、珍花異芳少なからざれど、今なほ栽植中なれば其全斑を評し難し、されど流石園藝家の泰斗たる福羽君の工夫を



心字池

凝されたる丈ありて栽植の位置、色彩の配合等、專門家ならざる觀者の眼にも面白く見らるべし。陽艶なる春も彌生の頃は更なり。夕風に露の玉散る七草の秋まち顔なるも面白く、さらでだに青紫紅白うちはえて、四時をり〳〵に咲き亂るゝ草花の愛らしさ。薔薇は漸く老いたれど香りはいまだ往きかふ人々の衣袖に遍まりて嬉れし。やがて月白き秋の夕、花園の露にすだく、虫の音を四邊の清き腰掛に據りて聞きたらんには、如何に心ゆくべき極みぞや。

心字池

花壇を後にすれば、前は即ち心字形をなせる池にして、心字池とも云ふべきか、前面高くそびゆるこけ青き石垣は、舊城殘壘のおもかげにして、昔の日比谷見附が變れる今の姿なり。これ本園の東隅有樂門より入りて花壇に向ふ處、水をたゝゆる事一千百餘坪、東南岸最も雅致に富み、孤舟を浮べてよるべ渚にたゞよふ處風趣いふべからず。池中に石を積で小嶼を作り、銅製の澤瀉花を以て裝飾とし、噴水これより起る、茲にまた陶製の鵞鳥四五羽あり、各其の口より水を吹く、玲瓏玉よりも麗はしく水晶を雨ふらすが如し。をりしも汀に咲き匂ふ花菖蒲の處得顔なるもやさしく、鯉魚の



公孫樹

躍るもまた面白し、更に池畔を廻りて石垣の上に至れば、昔ながらの大木枝を交へて古色蒼然たる影を、池底にしづめ、緑の色滴らんとす、其の凉おもふべし。酷暑なほ蒸すが如き夏の夕、杖を此處に曳かんか、薫風樹梢を吹き渡りて爽凉秋にあらざるかと疑ふならむ。

公孫樹

それより眺もわかぬ池畔を辭し、花壇を横ぎりて西南部樹林の地に至れば、卓然として先づ人目を奪ふものは、最大なる二株の公孫樹にして、其の一つ最も古く最も大なり。これ舊時鍋島侯の邸たりし時其の後園にありしものにして、蓋し園中に於ける歴史的唯一の樹木と云ふべきか。彼の別當公曉が匿れしといふ鶴ケ岡社頭の大木公孫樹に比すれば、以て大とするに足らざれども、是程の大樹、また近郊に其の類多からざるべし。(未完)

○動物虐待防止會の注意　動物虐待防止會は文部省に於て編纂する修身教科書及び讀本中に動物愛憐に關する教訓を加ふべき事を建議注意したる末、左の數言を添たり

歐米人の來りて日本の教育道德を視察する者多くは邦人の「小なる親切」(Smoll Kiudners) に缺くる所あるを惜むと聞く盲人を路上に助け禽獸の痛苦を思ひやる等の美事に乏しきを云ふなり更に日本教育の内容を顧へるものはかゝる教訓の教科書中に見らるゝものなく又教場に説かるゝ事なきを知りて我邦教育の一缺典なりとせり云々

又同會は此頃東京市内の各小學校長に宛て左の勸告書を贈りたり

市内各所殊に多く淺草公園邊に所謂小兒の釣堀(俗にひつかけ釣と唱へ店に錻池を造り鮒又は鯉等を放ち兒童をして極めて切斷し易き糸を用ひて釣らしむるもの)といふものあり多數無邪氣の兒童をして無益の殺生を樂ましめ申候これ一小事に似て然も兒童に殘虐を敢てするの心性を馴致せしめ兒童教育上極めて有害なることゝ被存候間申上る迄もなき事ならんが何卒深く兒童を御誡め被下度候て右樣の殘忍なる娛樂を爲さしめざる樣致度且つ之と同樣なる其他の動物虐待も不致候樣併せて御訓誡被成下度希望の至りに不堪候云々

注意！

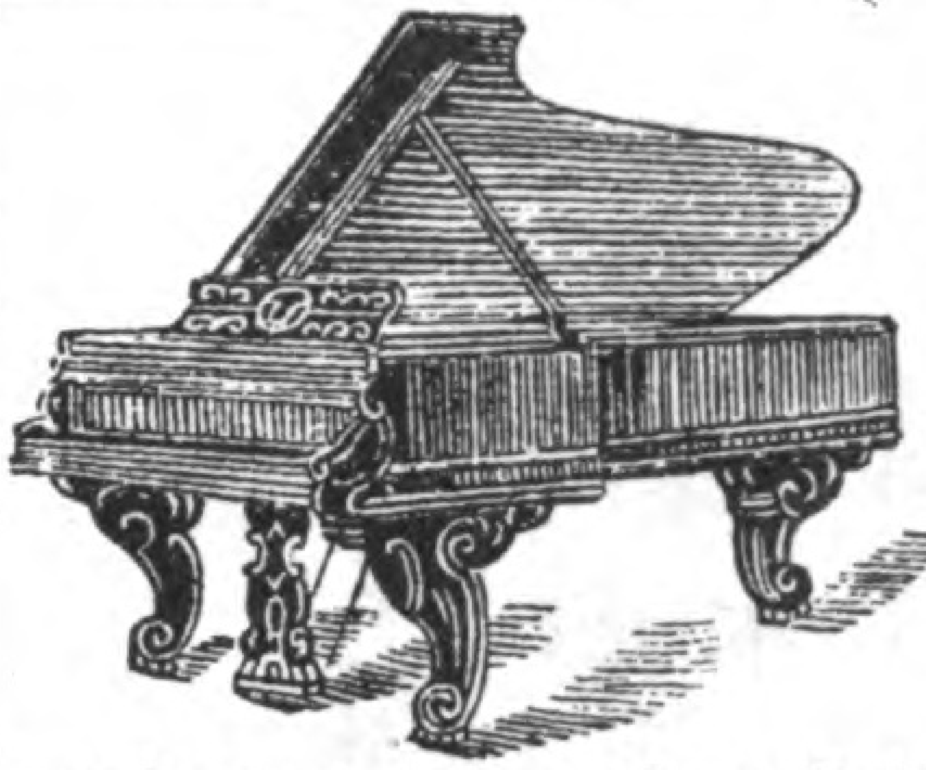
新にピアノ及オルガンを購求せんと欲する者並に其の所有者は左の宛名を記臆せられん事を望む



東京市京橋區（築地）新港町五丁目一番地

松本ピアノ及オルガン製造所

電話新橋二二九八番



所長は松本新吉氏にして、松本ピアノ及オルガンの良好なる新形各種は右の工場に於て盛に製作せられつゝあり。

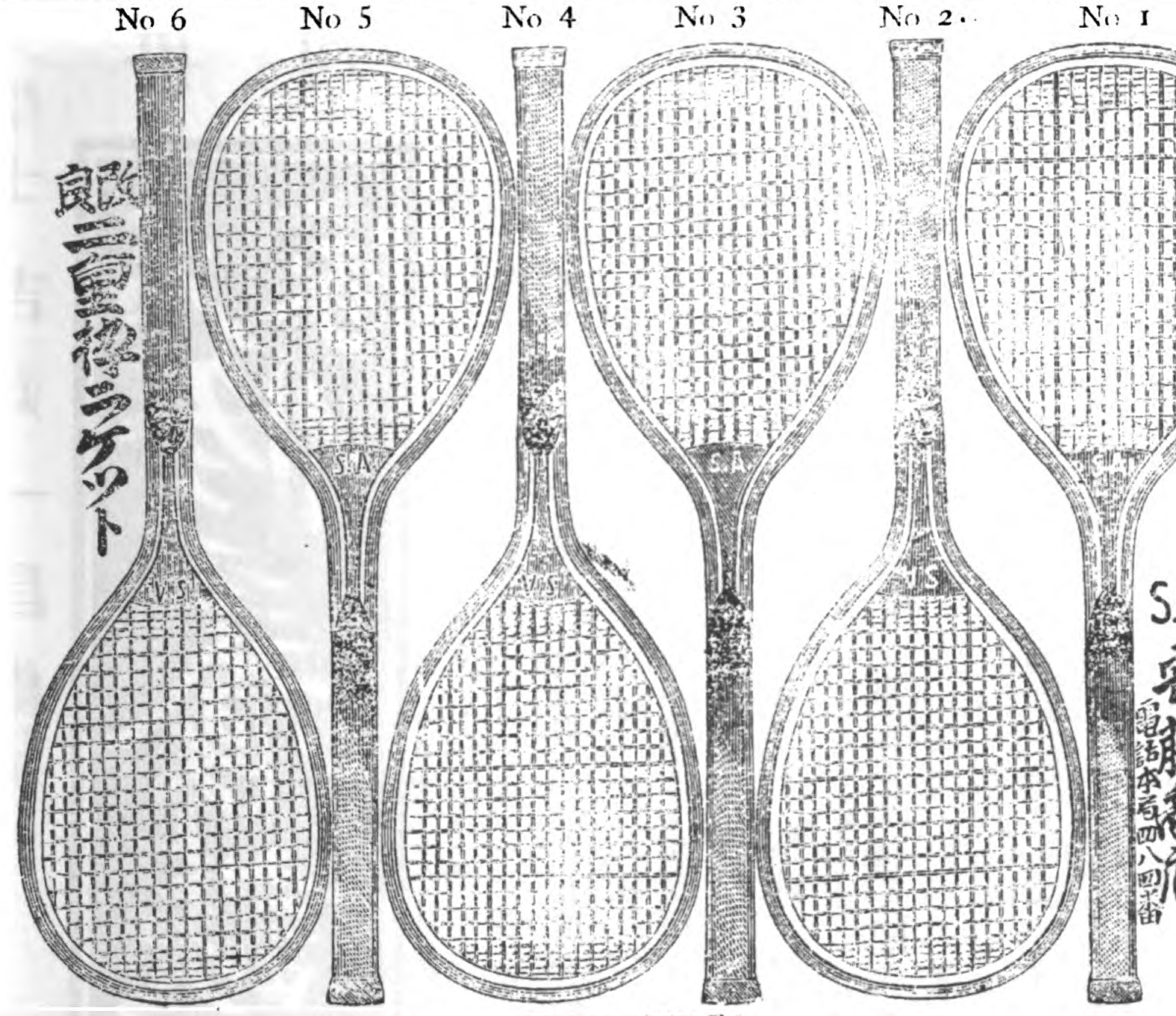
言葉は即ち薬にして實行こそ其實に外ならず。されば或は雜誌に或は新聞紙上に最優等の廣告を掲示して最良の樂器なりと吹聽する者も實際は常に必ずしも最良の樂器に非ざるは往々吾人の承認する所なれば松本ピアノ及オルガン製造所は決して過大の廣告を呼吹する事に時と力とを費す事なく唯すら最良の樂器を實地製作する事にのみ全力を注ぐの方針を維持する事を誓ふ

種々の手段を旋らして世人を遽着するが如き奸商的商策は當所の最も賤しみ避くる處にして常に着實親切を以て主眼とし。松本ピアノ或はオルガンを購求すると否とを論せず總て新にピアノ或はオルガンを購入せんと欲する諸氏の當工場に來臨を歡迎す。吾人は喜んで諸氏の爲に忠實なる相談者となるの勞を執らんと欲するものなり。

松本ピアノは五オクターヴ總鐵骨代金百八十圓より二百圓迄
七オクターヴ總鐵骨代價金三百圓より三百五十圓迄
松本オルガンは新形金二十圓より二百圓迄
右の外舶來ピアノ及オルガン新舊各種の賣品あり
ピアノ及オルガンの修繕調律は迅速に格好の料金にて完成す

○哲學者の進境及一貫の精神……文學博士 井上哲次郎
○數學的智識の必要……島田三郎
○常道論……文學博士 元良勇次郎
○日本の人種及言語……法學博士 田口卯吉
○快樂……文學博士 加藤弘之
○學問、出身、目的、手段……島田三郎
○兩極主義……文學博士 藤井健次郎
○苦學……文學博士 根本通明
○實學……島田三郎
○無窮的進步……海老名彈正
○讀書と修養……松村介石
○進化論と現今の日本……文學博士 元良勇次郎
○善良なる市民……安部磯雄
○吾人青年の三大急……農學士 志賀重昂
○苦學生に告ぐ……文學博士 村上專精
○言論文章に就て……島田三郎
○國民氣質と英吉利風……文學士 山田一郎
○青年を誡む……文學博士 加藤弘之
○ベーコン、ルッソー、及びバーゼドーの教育思想……ドクトル 尺秀三郎
○歷史的國民と非歷史的國民……獨逸文學博士 長瀨鳳輔
○慾望……文學博士 元良勇次郎
○苦學生に望む……片山潛
○福澤諭吉翁……島田三郎

御注文の節は女鑑廣告に據りたる旨御附記被下度候



東京神田表神保町五番地
S.A 安藤商店
電話本局四八四番

諸學校用　体操器械

登録商標

安藤商店

改良二重枠ラケット
一號　四本　一三、五〇
二號　四本　一一、五〇
三號　四本　一〇、三〇
四號　四本　八、二〇
五號　四本　七、二〇
六號　四本　六、二〇
七號　四本　五、二五

普通二重枠ラケット
一號　四本　一三、〇〇
二號　四本　一二、〇〇
三號　四本　九、八〇
四號　四本　七、四〇
五號　四本　六、七〇
六號　四本　五、七〇
七號　四本　四、七五

テニスネット
一號　長四間半　巾三尺五寸　一、七〇
二號　長五間半　巾三尺五寸　二、三五
三號　長六間　巾三尺五寸　二、四五
四號　長七間　巾三尺五寸　二、九五

網張棒
上等　四點付　二、九〇
並等　三點付　一、五〇

最新形室内テニス
ラケット二本
ボール四ケ
ネット一張
網張棒二本
壹箱入　一、四五

S.A 電本四八四　体操器械　遊戯品一切　東京神田 安藤商店

S.A 電本四八四　体操器械　遊戯品一切　東京神田 安藤商店



小説

仲の娘

篠原温亭

姉さんは學問で御嫁に行きました、妹は緻量で御嫁に貰はれたのです。然し私は姉さん程學校へ行きませんでしたし、妹程美くしう無いのです。ですから二十三の此歳まで、恁うやつて阿父さんや阿母さんの厄介に成つてゐます。氣の毒なことには……兄も其處らを憚かつてゞせう、まだ御嫁も貰はないでゐます、妾何と言ふ身でせう。

妾の形が今少し小さくなれば可いですけれど、其とも今少し色でも白かつたならば、甚麽に嬉しいでせう。脊の大きいのが父に肖て色の黒いのが母に肖てゐると、後添の祖母さまが何處かに行つたとき、竊つと談話を爲てゐました。尤も斷つて置ますが母は色が少し黒いですけれども、顔立は餘程美い、妹が其です。恁うなつて見ると、親に肖てゐるのが恨めしいのです。

姉さんは一番上の子で、阿父さんの氣に入りでしたし、自分も御書が好のやうでしたから、其は近所の者に飛離れて、東京に學問に出ましたのです。妾どもが幾らか目口の明いたのも一は其の御蔭です。妹は末の子ですから、其は〳〵母の思遣といふものが無いのです、加之に緻量が兄弟中で一番……いゝえ贔負目かも知れませんが、村中でも先づ澤山有りますまい。ですから父でも恁な着物那な帯と、東京に出る度に種々な物を買つて來て呉れたのです。………其はもう妹計ではない妾にも對に買つて呉れるには違ありませんけれど、元々妾は御供になつてゐる譯ですから、少つとも嬉しくは有ません、いゝえ腹の立つことも有るのです。

小供の時からさうでした。姉さんとは歳が十程も異つてゐますから那んなでも無いですけれども、妹とは三歳しか違いませんから、一緒に何處かに行ますと、皆なが妹の方をちやほやして、妾には何とも言つて呉れません其に母までが善い氣になつて、妹をそやして遣ますから、妾は甚麽に嫉しかつたでせう。其からまた兄さんまでが合體になつて、三平二滿だの種々な惡口を利くんですもの、妾死んで了ひたいと思つたことも有るのです。

姉あんは活潑で男勝でしたから、那樣ことも一向頓着しません。たゞ御書が好で〳〵、何が那樣に面白いだらうと、妾は何時も不審がつた位ですが。然し兎に角、妾を一番可愛がつて呉れたのは姉さんです。種々其は、妾が仕損なつたり仕忘たりした時は、同情を寄せて呉れて辯護をして呉れたのは姉さんです。ですから妾は兄さんよりも阿母さんよりも、一番姉さんを便にしてゐるのです。

妾も緻量で妹に負けてゐることを知ましてからは、何でも姉さんのやうに、御書を讀んで見たいと、後にはさう思つたのです。然し其も思ふやうには行かなくなつたのです。と言ふのは、姉さんや兄さんが學問する頃は、妾の家も可なりに暮してゐましたけれど、妾が小學校を卒業した頃には、那樣に學問計りしてゐることは出來なくなつたのです。其で妾はもう落膽してゐますと、幸い姉さんが教師になつて、妾を東京に引取つて學校に入れて呉れました。妾は其時甚麽に嬉しかつたでせう。もう父とも母とも賴むのは此の活潑な姉さん計りです。其から三四年は思ふこともなく浮々と暮してゐましたが、到頭大な悲が落懸つて來ました。

其は姉さんが御嫁になつたことです。姉さんは妾を東京に呼ぶ時契いました、卿の身は妾が引受ける、卿が身を固めるまでは妾は何時までも、恁うして卿と一緒に暮してゐるとね。其に甚麽でせう、妾はまだ學校を卒えない前に、もう姉さんは餘所に行つて了うんですもの。餘所に行つたら他人でせう、甚麽して意氣地のない妾を扶けて呉れませう。其はもう種々事情も聞ました、さうして心から妾も其を賛成して上げました。そして御互に泣別をしましたです。然し姉さんは甚麽せ家を持に行くのです、此からが希望の世の中でせう、妾に別れるのは辛いかも知れませんが、矢張り嬉しい所が有るには相違有りません。然しもう私は一人坊主です。

恁な事で學校も中途で下り、心細さ悲しさを胸一杯に詰めて、トボ〳〵と田舍へ歸りました。折節秋の暮方で、日の色が明日もないやうに薄く、木の葉が投身るやうに枝を離れ、鳥までが長い小い聲で啼く

のです。妾も自分の家を見忘れるまで泣きました。

自家に歸り着て見ると、思つたよりは心細く有ませんでした、父も母も久しぶりで種々世話して呉れますし。妹までが種々に便つて呉れます。まあ此ならばと一息吐きました。

其から一月も經ちましたらうか、もう大分色付きそめた百目柿の下で、妾と妹と、其か此かと質撰をしてゐますと、松が飛んで來て妹を呼ぶのです、で妾も一緒に行かうとすると、否え奥さまは昭子さま丈で可いと仰有りましたよといふのですもの、さてはまた片手打な衣裳のことであらう、と思當りましたから、妾はフイと向ふの紅葉の中へ入つて了いました。ですが何といふことはなくまだ安心が出來ませんから、切戸から椽の庭に這入つて、竊み足に母の部屋の障子に忍びましたが。其は何か妹の緣談のやうでした。然し此は妾に取つては餘り多くの打撃では無かつたのです、何故なれば此には二の原因が有つたからです。其は顔ばかりで十分の結婚が出來るものかといふ侮蔑と、其から多年愛を專にしてゐた妹が居なくなるといふ僥倖心。ですから其の時は鼻の先で待遇つて能くも聞かなかつたのです。

が追々時日が經ますと、結納の取主もありますし。母からも改めて其の相手を明されました。相手が分つてからの妾はもう腹立たしさが一杯です。と言ふのは其の家が隣村の豪家で、聟は五年も洋行してゐた立派な紳士、未來は此の邊の代議士は動かぬといふ身分、其が皆顔形で得られた賜です。先の侮蔑は見るに破れてゐたのです。嫉ましいといふのは此の時の妾の心でせう。妾は見るもの聞くもの、皆な腹立たしくてならなくなりました。其かと思ふと皆の前で身が愧て、妹の前なんぞには頭が上らないやう

な氣がして。前後が自分一人で心細く悲しく、死ぬるといふことさへ出來なくなつたのです。其から嫁入の諸道具衣類、父と母との奔走、もう馬鹿〳〵しくて、加勢も何も出來たことでは有ませんが、何故か妹は日の近づくに連れ、悄々となつて來るのです。そして明日といふ今夜になつてから、妹は到頭妾の膝に泣伏しました。其の言ふ意味は、相手が立派な丈け自分の身體が出來てゐないといふ恐と、姉の妾を追退けて自分先に方付くといふ順逆で。妾も此で初て、人に同情を寄せて其の



味を知ました。然し其は暫くのことで、一月經ち二月經つと、身を悔で世を怨む情がまた募つて來て、元の自分に返つて了ひました。其から二三の緣談も有りましたけれども、皆な氣に恇はないで謝斷つて了つたのです。其は姉の方に比べて見なければ妹の方に比べて見るといふ、不當な希望から起つたことで有らうと、自分でも幾分か覺つてはゐるのですが。

（をはり）



夏海　東久世通禧

君か代は八島のはても靜かにて
なみかせたゝぬ夏のうなはら

水族館　蜂須賀茂昭

おもひきや陸に居なから海底の
魚のゆききをかくて見むとは

夏曉　長谷信成

夜もすからならす扇めしら露と
ともにおきけり閨のあかつき

岸上藤　西三條實義

川きしの岩根にさけるふちのはな
いろさへ浪にたちまかひつゝ

彫刻　宮地嚴夫

さなからにいけりと見ゆる仙人の
此たちすかたたれきさみけむ

小式部内侍　北郷久政

たらちねの母も聞てやゑみにけむ
匂ひもふかきなてしこのはな

短夜月　植松有經

ぬるまたになき夏の夜をいつのまに
山よりやまにつきのいている

百合　鎌田正夫

夏木立をくらきかけにしろたへの
やま百合咲けりたにのしたみち

田家梅雨　遠山英一

さみたれに田川の水やわふるらむ
束ねしなへもなかれきに鳧

夏夜雨　加藤義清

雨乞のしるしみえけることよひこそ
いもやすからめ小田の丈夫

池杜若　近衛貞子

藤のはなうつろひはてし池みつの
みきはに咲るかきつはた哉

沙月涼　蜂須賀隨子

よるなみに濡て乾かぬまさこちに
光まはゆきなつの夜のつき

朝梅雨　前田朗子

朝かゝみ見れともくもる心ちして
いふせくもあるか梅雨の頃

新井白石　南郷柳子

かけ寫すことこそいとゝ難からめ
深きあらゐのみつくきのあと

雨後新樹　松平健子

嬉しくもあめははれたり夏木たち
さらに青葉のいろをそへつゝ

夏池　佐藤艶子

釣の糸にこゝろひかれて夏の日も
はやくれにけりたけ芝のうら

船納涼　田中竹子

たへかたき夏のあつさも忘れけり
今宵うれしきふなあそひして

淡海公　小川直子

撰はれしおきての流れくみゝても
きみかこゝろの深きをそしる

稍々笋成竹　鈴木小舟

しらぬまにかはぬきすてゝ笋の
枝さへしけくなりにけるかな

文林

夏田　服部磯子

水鶏なくこえもきこゑて足ひきの
やまたはよるそ涼しかりける

失ひし人形（子守歌）

岩垂蒼松

一、遠き田舎の叔母さんが
久々振りにわが家に
今年七ツの小兒をば
伴れて遊びにおはしたり」

二、家のお花は友を得て
一方ならず喜びぬ
朝夕共に睦まじく
遊びて日子を過したり」

三、お花にかねて購めたる
いと愛らしき人形あり
叔母の小兒に愛でられて
名をばお絹とつけられぬ」

四、わかぬ遊びも今は早や
田舎に歸る時節となり
お絹をつれて行かばやと
小兒は叔母に強請りたり」

五、叔母は叱りて拒みしが
うちの母御がいとしがり
お花の目をば偸みつゝ
お絹を小兒に與へたり」

六、一夜お花は淋しさに
遊ばまほしとお絹をば
小箱の中に索めしが
お絹は其處にあらざりき」

七、棚の上をば捜しゝが

お絹の跡はなかりけり
机の中に求めしも
お絹に似たるものもなし」

八、姉君お絹を見まさぬか
姉は知らぬといらへたり
婆やは知るかと問ひたれど
氣付ませねと答へたり」

九、さらば母上教へてよ
母御は笑ひてもの言はず
お花をおして尋ぬれば
今に知れむとの給ひぬ」

十、再び棚を索めしが
其處にはやはり見えざりき
再び机を捜しゝが
其處にもやはりわらざりき」

十一、お花は遂に堪へかねて
ヨゝと計りに泣ゝ出す
母御は諭して膝に載せ
賺せば間なく眠りたり」

十二、お花は翌朝目を覺し
枕邊見れば麗はしき
お絹に優る人形が
お膝つくりて居たりけり」

（をはり）

里不如歸　山岡良旗

立花の花咲きしより日ぐらしの
里わに來啼くやまほとゝぎす

雨中子規

夏の夜の深草やまのほとゝぎす
晴れ間もまたで雨に啼くなり



七月一日兼題

樞密顧問官正三位子爵黒田清綱先生撰

（門人山岡超舟子評）

山家夏

天

清水わくわかやまさとのすゞしさを
みやこのひとにわかちてしかな

熊本市光琳寺町　日高かず子

評、炎威いと烈しき都門の夏を、我が山里の涼しく、混々としてつきざる清泉に引きくらべ、遙かに忍びつる其の心の如何ばかりゆかしさよ。原作五句（わかつこころかな）とあり。

地

山口縣熊毛郡佐賀村　田村多豆子

なに事もたらぬかちなるやまさとも
なつなきのみはうれしかりけり

評、有りの儘を少しもかざらず言ひ得て遺憾なし、歌てふものは總てかくこそあらまほしきものなれ。原作二句（たらはぬかちの）とあり。

人

東京上野公園地内時鐘堂傍　松田繁子

岩そゝくたにのみつのみおとつれて
なつなほさむきやまのしたいほ

評、岩にせかるゝ谷川の水音、山のいほりに響きていよゝ寒く、却て夏なるかを疑ふ、うつし得て妙。原作四句以下（なつさへ寒き松の下庵）とあり。

甲

東京　河合象子

志けりあひてつきひもしらぬ山さとの
なつしらかしのかけそすゞしき

評、巧みなる言ひまはしにこそ。

東京　三上誠子

山さとのいはゐのもとに來てみれは
なつもなかれてすゞしかりけり

評、原作二及び三句（岩井の清水くみつれは）とあり、かく言ひては第四句の流れてに合ひ難し。
東京　三好賢子

たきのおと松のあらしもかよひきて
　すゝしくもあるかなつの山さと

評、着想新らしきにあられども、また凡歌にあらず。
尾張　後藤信子

いは清水わきてなかるゝすゝしさに
　なつとしもなしやまかけのいほ

評、岩清水よどみなく流れて涼しく、歌また流調。
東京　山口つや子

涼しさはやまへにのみやかきるらむ
　のきはのわか葉みねのたきつせ

評、此の歌の實に涼しさよ。原作三及ひ五句（かよふらむ、かどの瀧津瀬）とあり。
東京　下田しげ子

わきいつる清水をかとにひき入れて
　なつをよそなるやまかけのいほ

評、うらやましきかな山家の夏。
攝津　鹽見文子

なにことも たらぬかちなる山さとに
　あまるかけひのみつのすゝしさ

評、實景おもしろし。
東京　松本まつ子

みつ枝さしひかけももらぬ山さとは
　なつにしられぬところなりけり

評、原作初句（若葉さし）とは無理なる詞なり又五句（ところなるらん）とありてはいたく涼味を減ぜらるべし。
長野　山本直枝子

軒ちかくまつかせかよふやまさとは
　なつのあつさをしらてすくらん

評、原作三句以下（やまさとゝ夏を知らすにすこすなるらん）とありて、言ひざまつたなし。
伊勢　吉良貞子

夏されはたきのしらいとなつかしみ
　くるひとおほしやまかけのいほ

評、實景のあたり見る心地せらる、原歌五句（山のしたいほ）とあり。
東京　積山きやう

わきいつる岩井のみつにあつさをは
　なかしてすめるなつのやまさと
評、原作三及び四句（あつけさをなかしてすまふ）とあり、あつき事をあつけさとは聞に難く、又住めると云はでは惡し。（超舟子）
北見　中川伊代子

きのふまて花にうもれしやまさとも
　わを葉にかはるなつはきにけり
評、自然のさま詠み得て佳。（超舟子）
東京　林　環子

すゝしくも庭のかけひのおときゝて
　なつをよそなるやまのしたいほ
評、原作初句（すゝしさを）とあり、三句（みつに見せて）とは受取り難き言ひ樣なり、又四句（夏もよそなる）とあり。

乙

岩そゝくしみつのおともきこゑきて
　なつそすゝしきやまかけのいほ
東京　金原玉城子

よの中のなつもわすれてたきつせを
　むすふすゝしきやまかけのいほ
東京　山本梓子

若葉せし木々のこすゑもせみの音も
　しけくなりけりやまかげのいほ
美濃　吉村せむ子

やまかけの庭のすゝしきやりみつに
　なつてふこともわすれてそすむ
越前　上村ちと子

ほとときすあはれひと聲なのらすは
　なつともしらしやまのしたいほ
東京　永井さき子

ふくろふの聲もなくへく茂りあひて
　わかはにくらきみやまへのさと
東京　宮川芳子

すゝしさに秋まつむしもなきにけり
　ゆふかせわたろやまのしたいほ
茨城　飯田幸子

いへ毎にかやりたくらしやまさとは
　けふりのうちにくれわたりつゝ
日向　紀藤榮子

みやこ人あつさわすれにつとひ來て
　なつはにきはふやまかげのいほ
東京　篠田圓子

まつかせも水のなかれもすゝしくて
　わかすむやまはなつなかりけり
東京　大町律子

やまさとのし水のもとにたちよれは
　なつともさらにおほゝさりけり
福岡　武田外代子

立いりてむすひてゆかんやまさとの
　なつをよそなろたきのしらいと
東京　安井きやう子

たきの音をきくたになつはすゝしきに
　かせさへかよふやまかけのいほ
筑後　鏡山增代子

谷川のなかれもきよきみつのおとに
　なつとしもなきやまのしたいほ
下谷　椎野ぬき子

世にうとき山さとなれとなつとへは
　たきのすゝみにひとそとひくる
三河　服部正子

岩しみつおともすゝしくきこゆきて
　なつともしらぬやまかけのいほ
武藏　佐々木八重子

花さきしこすゑもけふはわかはして
ふくかぜすゞしなつのやまさと　東京　小池竹子

わきいづる岩間のみつをともとして
なつをよそなるやますみのやと　肥後　田代艶子

なつの日のあつさもしらて誰かすむ
しみつなかるゝまつのしたいほ　三河　永井さい子

山さとはなつこそよけれたにまもる
しみつとともにかせのかよひて　肥後　田代綾子

岩まもるたにのしみつのすゞしさに
あつさおほねぬなつのやまさと　横須賀　上田雪子

山さとにすめはなつをもわすれけり
みれのまつかせたにのみつおと　上總　高石登代子

夏木たちしけるわか葉のしたしみつ
くみてなつをもわすれけるかな　肥後　德永多瑠子

宵はさすかたやまかげのひとつ家は
たゞすゞしきかせかよふらん　大和　栗山髙子

世のなかのちりをはらひてまつ風の
ふくやまさとはなつなかりけり　東京　佐藤成子

花ちりてとふひともなきみよし野の
やまのおくにもなつは來にけり　札幌　山田靜子

まつかせのしらへ涼しくかよひ來て
なつをよそなるやますみのいほ　東京　三好珍子

あさ夕にかけひのみつをともとして
すめはすゞしきなつのやまさと　兵庫　泉さい子

こかくれのかけひの水にふくかせの
かよふもすゞしみやまへのいほ　兵庫　駒井登雄子

岩まもるしみつのおとをきくときは
なつとしもなしやまかげのいほ　伊豫　和氣まさる子

たきのおと松のあらしもひとしほの
すゞしさそふるやまかけのいほ　下野　森田ふで子

いつしかも夏きにけらしやまさとの
こすゑのいろはふかみとりせり　安藝　讀人不知

丙

やまさとにむすふいほりはよな安く
なつともしらてすゞしかりけり　東京　山口寧子

世の夏をへたてかほにもすめるかな
しみつめくらすやまのしたいほ　名古屋　瀬木せき子

やまさとのしみつのもとに立よりて
なつわすれつゝすゞみつるかな　東京　松本さく子

賤のめのうゑしさなへのはすゑにも
あきのたり穗のかけそ見ゑける　播磨　中田登實子

谷かはのおとをすゞしくきくいほは
なつさへとはぬところなるらし　山形　玉生照子

世をいとふみにしあられと夏こたち
ひとめをへたつやますみのいほ　宮城　大槻慶子

足ひきのやまかけのいほとひよれは
なつのよとなるかせそかよへる　肥後　佐々小寧子

山すみのいほそしつけき夏をつくる
かせより ほかにおとつれもなく　肥後　佐々有鄰子

世のつれの竹のかきれのやまさとも
なつはよしあるゆふかほのはな　埼玉　横田音羽子

しつの女か爪木にかけてめせといふ
くりのはなちるおほはらのさと　埼玉　横田秋子

歌の園

たにみつの音もすゝしきやまの庵に
なつをわすれてけふもくらしつ　兵庫　大岡はな子

垂れ來しかすみのころもぬきかへて
みとりすゝしきなつのやまさと　札幌　山田婦美子

まつ風のふくにまかせしそまか家は
なつのあつさも知らぬなるらん　薩摩　松原峯子

なつならていつかは人のとひ來へき
かたやまかけの我かひとつ家に　秋田　和田りつ子

やまさとの遠きとなりをまたさらに
へたつは木々のあをはなりけり　秋田　小島いわ子

夏木たちしけろ木かけのみつくみて
あつさわするゝやまのしたいほ　肥後　德永萬壽子

松のかけみたるゝはかりやまの井の
しみつむすひてなつをわするゝ　肥後　德永廣子

山すみはまつかけにしてかよひくろ
かせにあつさをわすれけろかな　大和　栗山たか子

みつ枝さす谷のなかれのましみつを
ゆめにもむすふ山かけのいほ　奈良　栗山たれ子

朝ゆふのかけさへとわすなりにけり
わか葉をくらきなつのやまさと　東京　石野敏子

市まちのひともとひ來てうらやむは
かやりもたかぬなつのやまさと　三河　河合ぬい子

やまさとはまつふくかせの絶まにも
のきのかけひのたとぞすゝしき　三河　宇津野代牟子

なにこともおくれかちなろ山さとは
またてこそきけはつほとゝきす　三河　服部萬子

さととほき山のふもとのひとつ家に　東京　淺井のふ子
ゆふへすゝしくむしのなくなる

夕たちのひことにかゝろやまかけの
やとはあつさもおほえさりけり　秋田　三浦さわ子

しけりあふ木立かくれのやまさとは
またなつなからあきかせそふく　東京　椎野秀子

世をへたつかすみもいまは晴そめて
わか葉かくれにみゆろやまさと　東京　椎野鋭子

日くらしの聲もあはれにきこえきて
ゆふくれさひし山かけのいほ　東京　椎野薫子

いかはかり涼しかろらんしみつゆく
なかはにそへろやまのしたいほ　相州　岩橋花子

はろすきて夏はきぬれとやまかけの
いほりはいとゝすゝしかりけり　伊豫　松山しげり

涼しくもしみつなかろゝやまさとは
むすふゆめさへなつなかりけり　福岡　武田龜子

糸つむぐくろまのおともたえにして
あをはすゝしきやまかけのいほ　日向　山下玉子

たひれしてねられさりけり山さとは
のきはまちかく啼くほとゝきす　日向　紀藤ふじ子

いかはかりいふせかろ覧かやりたく
けふりにくろゝやまのしたいほ　日向　紀藤のぶ子

むすふたひ月のこほろゝやまかけの
しみつかもとそなつはたのしき　山口　大角志賀子

まきむくの檜原のさとはやまたかみ
なつのあつさものほらさりけり　東京　中村外千代子

このころは夏のけしきとなりにけり
あをはすゝしきかたやまのいほ　神奈川　森田葉留子

みやこより文のたよりのなかりせは
なつともしらしやまのしたいほ　長野　松澤まつ子

まつかせの音のみたかきやまさとは
みやこのなつをへたてつるかな　東京　山本茂子

よのうきをはらひつゝふく松かせに
なつとしもなきやまかけのさと　和泉　稲原蕭子

世のうさをのかれてむすふ松の戸に
こゝろすゝしくなつをすくらん　埼玉　前野ふさ子

しけりあふ若葉はかせをもらされと
なつはすゝしきやまかけのいほ　東京　安井みし子

ゆふ風もつきもこゝろにまかせつゝ
なつをわするゝやますみのいほ　下總　佐倉ます子

久かたのてる日もうときやまさとは
うき世のなつもしらてすむらん　但馬　田尻保代子

やまふかみとふ人もなきかくれかも
なつはことさらたのしかりけり　東京　荒井滿武子

いはまもる水おときよしなつやまの
あを葉かくれにすめるひとつや　秋田　三浦ふさ子

こけむすふたにのしみつの音きけは
いつこになつはなかれゆくらん　東京　荒井千代子

小田めぐる山またやまのみとりはに
なつのあつさもおほゝさりけり　三河　堀田伊勢子

秋かよふいつみもなつもなかれけり
かりにむすひしまつのしたいほ　伊豫　小松千代子

みやまにも夏きにけりとわかいほの
しはの戸ちかくなくせみのこゑ　下總　佐倉みさを子

かせのおとたかき山へにかりれして
はやあき來ぬるこゝちこそすれ　伊豫　淺井治惠子

秋の庭

あつさをも忘るはかりにやりみつの
おとそすゝしきやまかけのいほ　下野　菅沼德子

山さとに住むかひありてこのころは
なつをよそなるまつのしたいほ　下野　森田みと子

かれてわか思ひしよりもすゝしさは
みやまのさとのまつのしたいほ　下野　岩間きよみ子

奥ふかきかたやまさとのわかいほは
なつとしもなきこゝちこそすれ　下野　菅沼すみれ

夏こたちしけるを見れはなにとなく
あつさわするゝやまかけのいほ　下野　田中久子

山さとはなつこそよけれあつき日も
おほゝさりけりまつのしたいほ　丹後　木村義子

ふく風のすゝしくかよふやまかけの
いほりはなつをおもはさりけり　山口　村上操子

なくせみの聲になつとはおもへとも
まつかせすゝしやまのしたいほ　松山　上原のふ子

山さとはすみよかりけりなつくれと
まつふくかせにあつさわすれて　鳥取　大塚信子

わかいほの軒端まちかくほとゝきす
きく日となりぬみやまへのさと　下野　川中子てつ子

深山とて夏來んことのなけれとも
すゝしかりけるわかいほりかな　下野　岩間きよみ子

蚊遣火もたかぬまてこそすゝしけれ
やまのいほりのなつのゆふへは　日向　楢松とめ子

夏くさを刈るへくしつのあさな〱
つとふもたのしやまかけのいほ　陸前　前田河みさを子

里とほきかたやまかけのいほりこそ　なつはすゝしくすみよかりけれ　神戸　井上品子

夏こたちこゝにかしこにみとりして　なかめもあかぬやまのいほかな　福井　平田さう子

山さとのこけのむしろのすゞしさに　なつもよそなるこゝちこそすれ　長野　山本基子

ちりふかきみやこの人につけまほし　なつはすゝしきやまのいほりを　下總　益子鑑子

まとひしてかやりたきつゝ山さとは　うきよかたりにふけにけるかな　日向　紀藤いく子

しはしとていこひしものを山さとに　あつさわすれてなか居せしかな　伊豫　小野末子

華族女學校教授　井上頼圀先生撰

雨窓書を讀む

天　東京市本郷區東片町四十二番地下田方　篠田圓子

をやみだになく降りくらす五月雨に道もいとあしければ、心あひの友もきまさず、夜はわきて徒然やる方なし。さればとよ、心づかざりし。先つ頃叔父君より賜はりし、世にも名高き源氏物語數十卷、其のまゝ文箱に秘めおきたりしが、かゝる折

にこそと、文机のちりうちはらふ。みやびなる言葉もて、なだらかに書き流し給へる式部が才筆の跡、うひ學びの身には、いかで、たやすく解し得べくもあらず。さながら闇路をたどる心地しつれど、いさゝか他の書にて、ならひ得たる事どもを細くも、ともし火と頼みてわけゆく二時ばかり間に、はじめの卷は讀みをへつ。はゝき木の卷ともなれば、おぼろげながらも、いよ〳〵興の深みゆきて、夜のふけゆくも心つかざりし。この書の中なる雨夜の御物語りいかに樂しくおはしましけむ。かゝる夜にてはあらざりしか。さるにても、源氏の君てふ御方の、若しもこの世にまし〳〵しものとせば、人は神とやあがめつらむ。其の君を生み給へる更衣の局こそ限りなくあはれにておはしましけめ。など書よみさして、しばし心をわき道にめぐらす程に、死出の田おさの血になく聲、ふと窓ちかく聞えしまゝ、急ぎとあけてながむれば、あなにくや。有明の月も殘らで唯

墨流したらむやうなる、夜半の空より、又一しきりふりくる五月雨の、いともさびし。

地

肥後國菊池郡城北村　徳永廣子

ふりつゞきたる五月雨の空。ひるのまもほのくらきまでくもりつれば。いとつれ〴〵に覺えておばしまに立出て。庭の面ながめつるに。雲の往來早く西の空になき渡る鳥の聲に。故鄉の方戀しき思ひ。いはんすべなく、たらちね、はらからの上まで思ひつゞけて。むねのくもりの晴れやらず。いとさみだれの降しきるをりしも。郵便の一聲に取手おそしとひらき見れば心盡しの母君の御筆すさみ。いとも我身をはげまし給ひて。たらちねの。山よりも高き御めぐみ。海よりも深き御なさけ。いかでそれをわするべき。おこたりし事の今更にはづかしくて。日頃供へし窓の机によりそひ。書籍とりいだしひもとき。深く心のおこたりを。小燈かき立て。時をわすれずいましめつゝ有ける。をりから窓の戸たゝく雨の音幽にして、時計の鐘午前二時を報じぬ。かく短かく夜のふくるもしらぬは。柞葉の母の御めぐみと。遠き西の空をふしをがみて。亦書籍をくりかへしぬ。

人

日向國都城町大字下長飯村　紀藤榮子

日をふる五月雨の晴れやらで、つといぶせく、夜もやう〳〵更けゆくまゝに、いよ〳〵降りまさり雨戸打ち叩くかと見れば、軒の玉水淋しき破窓に音づれて、數へなば數へられむ如し、をりしも何處の空や渡りけむ時鳥の一聲いと哀れふかく、物思ふ身には一入身にしみて軒のしのぶも朽ちぬ計り、頰を傳ふ涙のはら〳〵と落つるを覺えぬ。哀れ畏き大御代に生い立ち、御惠の露にうるほひて青人草の榮えに榮えゆく世にも思ひ忍ばるゝは、有りし其かみの古事なり。斯く思ひめぐらせし吾はふと壽永の夢とて建禮門院の御身の上を記しゝ文に心づきければ。やゝ細りかけし燈火かき立て見もてゆくに、いよ〳〵涙は五月雨の雨かと計り降り來ぬ。或る夜山郭公の二聲三聲音づれければ

女院流石に舊き事など思し召され御硯の蓋にかくなん遊されける。郭公花橘の香をこめて、なくや昔の人ぞ戀しき。斯く卷き返へし〳〵讀もてゆくに雨は其折の事を訴ふる如く窓の戸打ち叩きて、哀れ血に啼く郭公の聲〳〵手に取る如くきこえぬ。

東京　金原玉城子

さみたれの、つれ〳〵とふりくらして、雲まもなく、心さへとぢろやうにて、はれ〳〵しからぬも、びころになりにたれば、むつましき友の、ゆきゝさへ絶果て、かたりあはんよすがもなき身のなぐさめには、例のくらき窓のもとなる、机によりゐて、いにしへ今の、ふみよみくらすを、やくになむ、見もてゆくに、文字のおぼつかなく、消たる所に、書いれしたるあり、こはいにし年、わが師の君の、いまそかりし時にものしおき給ひしを、見出てゝ

わくかたもしらでよりくる涙川
この水くきをみなかみにして

いとゞながめ、まさるこころにてのきのしのふのつゆもこころせくなむ。

熊本　日高かす子

訪人も日毎〳〵に中絶ゐて、降のみ增る五月雨のいぶせきに、まして拂はぬ庭の八重葎茂る木立等の暗うなりたる佗しさも一しほになむ。螢集めんと思ひし窓の戸の閉し勝なるを、降らは降らなむ濡れても押あけて、文籍とうで、好める書繙けば、鬱りし心も晴行て空さへ頓に明うなりぬるやう覺ゆるぞあやしき。「松の下露」と詠て痛み歎き奉りし、古の帝の御折の事とも讀み行けば、我袖さへぬるゝを如何につれなき雨なりけん。「雨そゝく軒の下石」とひじりのものせし歌みれば、窓の身そ恥しき、折から這ひ出來し蝸牛の、おそき身ながら、たゆみなく分け入らば、文の林の花もいつか手折らましとて、いよゝよみふけぬ、げに雨は心の塵も降りしづむるよ。

長野　松澤まつ子

日を經る五月雨の空いぶせしともいぶせくて心晴れやらぬ、窓の下につれ〴〵をなぐさめばやと、友なるつぎ子の君より、昨日しも人もて持たせおこし給ひたる、雜誌を、ひもどくに、何れも世の徳高き君達のおろそかならぬ、言葉を集めし園になん、あはれ、巳も、此一言をだに、つみとらまほしうおもほゐて、繰り返すに、はしなくも東奥地方飢饉の慘狀ぞ記されぬ、「昨秋の收穫半年のなかばにも達せざりしかば、秋早々にして穀物全く盡き、家畜を食ひつくし、野花を堀り、糠粱を食ひ、今やそれさへあさりつくして餓莩道路に横はり、極貧の窮民は坐ながらに死をまつの有樣」とよみつゝくれば、むねいとゞみだれて、袖にあやしのつゆぞふる、雨はいよゝ降りにふり、軒の玉水音しげく、卯の花下すあたりに、ほとゝぎすのぬれつゝ名のるなど、巳も血になく思ひぞする、あはれ此悲しき景色こそ、東奥地方の狀とも見ゆるかな、さはれ又よく思ひ返せば、草木は雨のめぐみによりて生い立つなれば、やがて空はれ、日の光さしなば、さこそすが〳〵しうおぼゆらむ、されば、我ら飢になく同胞も、大君の深きめぐみの露にいやしけりゆく、民草のあまれるつゆを打そゝぎなば、やがて、豐けき御代の秋ぞ來む。いざさらば巳もせめてもの、一しづ

くなだにそゝがばやと、心づきたるぞ五月雨の窓に、文みしたものならんと、思ひ〳〵て眺むれば何となう高嶺の松原ごしに月あかく、ほのめき出でたらむ如き心地なんするぞあやしき。

大阪　桝田益子

降續きたる日頃の雨のものうさよ、立出ん心もなく、書齋に頬杖突きつゝ打見やれば、すぐ〳〵と生ひ延し、若竹の雫も涼しう、常盤木の翠靜なる庭の詠め、言ひ知らず哀に覺ゆる物から、松風の聲、聞はやすべき友も哉と、其道の書共見もて行くに、白髮の翁忽然と現れ、某は茶聖也、今汝が此書を讀み耽るを憐み、聊語り聞せん、夫茶は、一休禪師の、我禪定の助との給し如く、止水明鏡に至らしむる物也、其濫觴を遠く求んには、陸鴻漸、盧玉川を甫め、是彼あめりて盧因が茶歌に、文章に五千卷心清く、仙靈に通ずと愛でゝ、一盌より七椀の香を賞し、丹師子、黃山君、身を輕んずなど、茶譜に茶徑に、讀み盡すべうも、あらぬ物をや、然ながら源の朝臣の御法書共は、能く諳れかし。是に背き室や調(シツロ)ふに數寄を好み、器求るに千萬の黃金を惜まず、得がての逸品を尊むは、花やぎたる手ぶりに泥めるにて、金銀玉樓の雲閣に、榮花の春を極め給ひし、御歌を慕ひ奉るなるべし、富士のみ雪は坐ら見る事能はず、さる高遠の思は、まして、あらぬ方に、世のもどき夢な貧そど、閑物から穴賢と、額づきぬと見れば、若葉にそそぐさ月の雨、さと降しきて、窓の外空高う雲間を漏るゝ、杜鵑一聲、はた何物もなしや。

肥後　佐々有鄰子

此ころ降つづきたる雨に。庭の梢をぐらくしげりあひて。兒もち雀の聲うらわかく。のきばをさして雌雄とびかけるさまの睦まじけなる。窓さしおほふ。ざくろの花に露したゞり。遲さきのつゝじは。くれなゐふかく。白妙のばらの花ふきくるかぜにかなりをふかめ。西洋より渡せし草花のいろいろ。あめにうなたれ蝶もねふりぬ。鉢うゑの夏菊は文案のもとに香をはなち。新竹はみどりのわか葉うるはしく。つゆしたゞり色深し。いけのおもには。蓮の卷葉は高くかぜをしのぎて隱逸の情を含み。軒の松には。雨呼鳩すくひ遊び。園の桂は芳枝をうごかして陰涼し。池のなか島には。靑葉梅の下根に龜おどり鶴舞て。世外の樂園なり。窓にひもとくは。朝に皇典。夕に支那文。夜は西洋の書籍あさりて。まなはしら學の友の後にはたゞじと。いそしみても。冤睡神ぞ恨みなる。ぬは玉の夢には。胡蝶ともなりて。蓮花の露をなめ。鈴屋大人の心を學ては、しき島の大和櫻花やかに。西洋書によりて。我短をおきなひ。霖雨のあまれく身をなさめ。父母に孝養をつくし。舅姑にはよく仕。夫には貞ならん事晝夜の學業也。

日向　紀藤のぶ子

空もやう何時晴るべうも覺ねず、昨日今日降り續く五月雨いぶせき草庵に訪れて、軒の玉水木草の雫、實にしめやかなるは五月雨の頃にぞ在りける。いとどつれづれなるまゝに、くさ〳〵の思ひ胸に湧き出で、物思ふ袖のかはく暇ぞなき、哀れ今宵のつれ〳〵を語るべき友のなきに、讀みさしたるよべの詩集取り出すに、亡き友の事又もや忍び出でゝ、悲しみは一としきり、少き胸に溢れて、手にせる詩集に涙のはら〳〵と落つるにて有りき。哀れ詩集の終りにしるされし君が水莖の跡、足引の山鳥の尾の長々と、書かれたる文の如何に美しきよ、詩集は閉ざゝれぬ、されど〳〵軒の玉水の音は、君が私語きの如く、冴ねに冴ねぬ、又も思ひ起すつきせぬ涙、流れ行く末もうき瀨なりけり。哀れ波打つ胸を押さねつる、我は徐ろに窓の戸打ち開けて、空の景色を眺むるにあやめも分かぬ闇より闇に、何處の空とも分かず鳴く郭公の二聲三

聲…折りしも吹き來る夜風に、雨はひとしきり窓の戸打叩きて、燈の影かすかにまたゝきて、哀れさ云はん方なく、夜もいよいよ更け渉りぬ哀れあゝ………。

信州 内山けさを子

今日此頃のさみだれの空、心ある人は如何過ぐすらん、世の物ふしも知らでは、あかす身の徒然さに、取り出す文のひもときぬ、玉水の軒うつ音の外は、いぶせき、机の友もなく讀み、あぐみて、しめやかなる窓、ほそめにあけて見れば、我物顔ほこりし芍藥もあはれ、かた隅に消へ、匂ひしまがきのうつぎ花も、波の下草にならんばかりの、あはれさよ、たゞひとり築地の松のみ、おろかなる身をはげます、うれしさ雨だれの石さへ穿つあるを、我のみいかて、たへぬにや小を積みて怠らぬこそ、よけれと、又よみつゞけ、あきなん時は此を思ひてはげまし、やうやうに卷おはりぬ、されど猶やます、空のけはひの恐ろしさ、乳こふ幼子の聲もきこえて、母なる人は心引かるらん、折からひゞきわたる、暮六つの鐘の音に、あたりの淋しさいやまさりて、いつかは晴るゝ旭を、仰がるべきぞいと心細し。

東京 山本梓子

草の庵の夜の雨とかや、大和言葉にも、はた唐言はかゝすともかな、大方に物淋やかに、あはれ深きは、雨の夜ぞかし。猶秋の時雨めきてなと、かゝまほしけなる、今宵の雨を、友として、昔の人とさへ、打語らはむと、父母の惠深う、幸ある身は、窓に螢の光集むるにもあらず、燈火の下に、文讀む樂にふけりぬ。增鏡取出したるに、鶴の林の薪つきにしと、書初たるより、打も置れず新嶋守のくたりこそ、かしこくも、あはれに、絕かたけれ、鳥が啼く東のしこ草裏りて、はこやの山の月影も、八重の汐路にかくろひ行我社は、新嶋守よと、詠ませ給ひし、御歌、誰か、袖ぬらさゝる者やはある、後醍醐の帝も、同し樣に、おはしましけれとこは、御本意叶ひて、一度は、百敷の大宮所に、春の花、秋の月をも、眺めさせ、給ひぬ、猶三芳野の、奧深うかくれましける社口惜しかりしか、さはれなきの海の荒き波風に、都戀しう思し給ひし、御心のうさやまさりたらむ、時にありては、天か下知しめしゝ、御身たに、民のわらやに、軒並へ給ふ御事もあなるを、榮え行御代は、民草の末なる身迄安らけきは、大君の御惠と、父母のいつくしみにこそいて富士かねの、麓のちり斗りにてたに、むくい參らせてやはと、思ひけるほとに、雨も暫しのと絕にやあらむ、雲間の星の影、天の河原にとふ螢と、みえたるもなかし。

兵庫 泉さい子

昨日より五月雨の、空晴れやらぬに、徒然のあまり、文机に向ひくさ〱の文の紐とき、ひたふるに、讀み行けば、古より名たゝる大人たちの、ものせられし、武士の道。いさぎよき、我國ぶりを初め、行き見ぬ遠き外つ國ぶりまで、明らかに書き分ちぬ、中にも、かの紫式部のものせられし、箒木、雨夜、物語、女子、品さだめてふ、言の葉は、いともめでたきふしとこそ見つれ、なべて女子はかく淺ましう世につたはるゝこそうたてけれ、今の世の女子はかゝる世の、女子と異りて、進み行く世に交らひ、おほけなくも、大君の、惠みの露のしたゝる文の林に、生ひ立ちて、明らけき學びの道を、たどり出では、社會の婦人となり、一家の眞妻となる敎へを受くる、今日だに稍々もすれば、雨夜の品さだめにもれぬ、女子のあまたあるは、いかに、うたてき限りになむ、されば、家政のひまあるごとに、文の紐とき見ぬ世の人の敎へをたどり、今の世に接し、女てふ道を守り、萬分の一の國民の義務を果し得るこそ、文讀む人の德ならむと思へば、おのれふり來しこの年月の怠りしことの、うれたき事よと、おもほゆれば、軒の

五月雨あざけりか任にひとしきり、强う降りしきりぬ。

和泉　福原菫子

門田の早苗植ゑはてけん、面白き田歌の聲もたえて、昨日けふよりの五月雨の、いつ晴るべうもなきそふ〳〵しさ、獨り小暗き窓の下に、徒然を慰めんと、近古史などとりいでよみ行く中に、源氏の鶴岡の變の一ふしに至りて涙屢々頰につたひくるを覺えず、實朝は父兄の後を承けて將軍の職に上りしと雖、北條の奸惡暴狀見るに忍びず、夙に之を壓へん志なりしも、一族は悉く殺され、股肱は滅されぬ、其心情いかにぞや、機に臨みこ、北條を討ち、源氏の衰運さては賴朝の遺業を挽回せんと圖りしも成らず。却て義時の公曉を嗾して、簒を行なはしむるの、一くだり讀むだに、あるは胸いたく、あるはにくみても尙あまりある行ひのはら立しく、徒に當時を追想して轉た感慨の涙を吞みつ、折から一しきりふりまさる雨の音すさまじうあはれに聞ゆ、嗚呼思へば昔なりけり。王政復古の御代なれば、いまはしき內亂などの患は絕えて、吹く風も枝を鳴さぬ今の世に生れたる幸はまたあるべきかなと、治まる御代のめでたさを獨くりかへしつゝ、日のくるゝをも雨の音をも知らざりしぞ嬉しけれ、

東京　山口琴子

世の中のすみうかりせばはなれやをむすふいほりのしつけさにとむかしの君のよませ給ひしことのはのたふとくとのみくりかへすまどに、ひゞに雨ふりてながめすれともいとゝしく、ぬれてもしらですきぬる人のみをつらしと思ほえてなん、

齊のこすこのからふみをみることに
　いかにしらせん袖のうへの露

おのか心もぬれ〳〵て父母のをしへたまひしもまさるかと天をはひし地を拜しける斗なん。

安藝　和住千鶴子

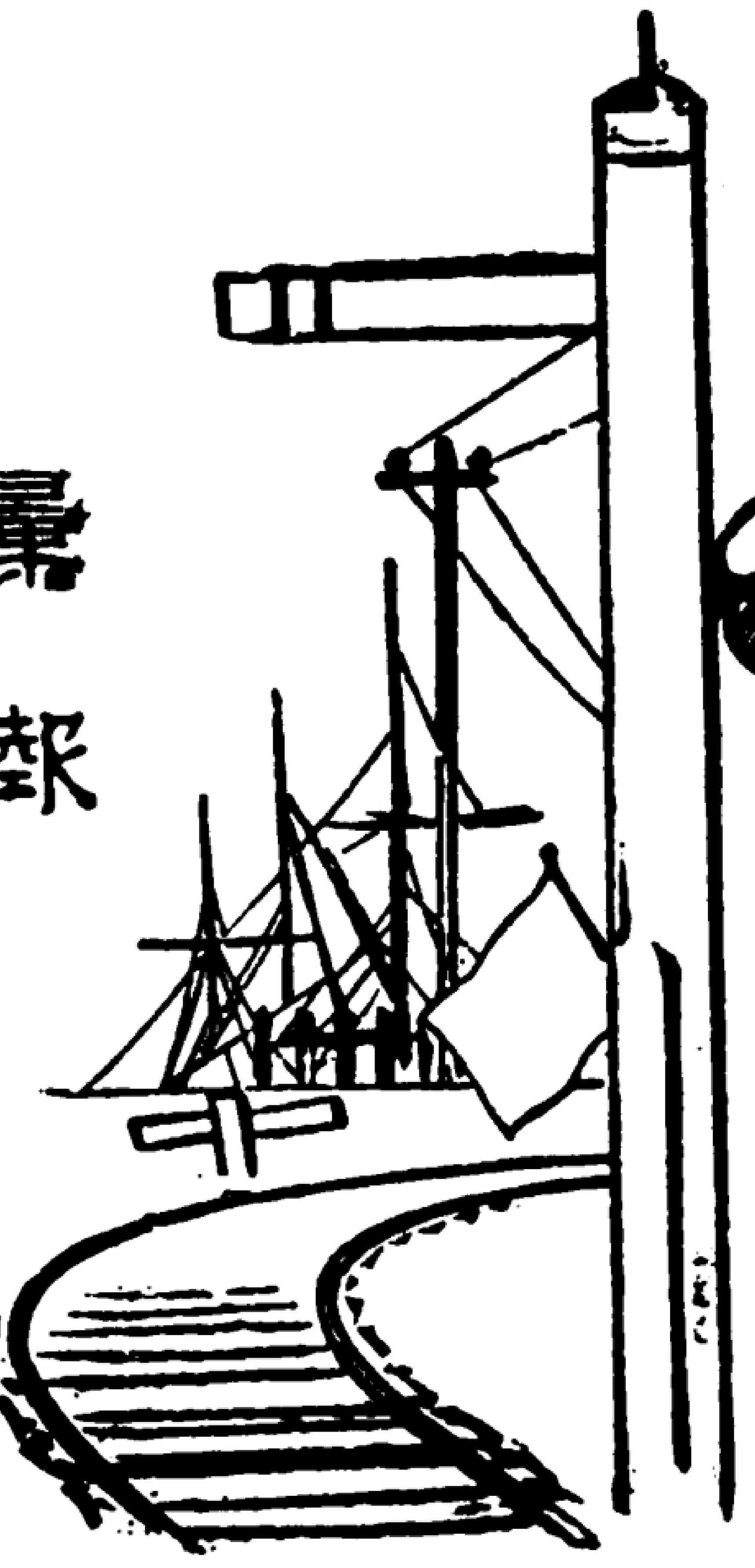
さらぬだに、皐月はものゝかなしきを、ほとゝぎすの一聲もまだきかなくに、早くもかきくらし降るさみだれのわびしさよ、いとつれ〳〵なるまゝ、ふつくゑに向ひて何くれのふみなどよみもてゆくうちに、いつしか身は、いにしへの美はしかりし君たちに、侍るこゝちしてい、とうれし。世のおとづれ稀なる山里の蓬生の門もさしこめて、あるかなきかに過しけるも、たゞめでたかりし人人のものし給へるふみにこそ、住にし昔も忍ばるれ、こよなき師ともおもほゆれ、賤が心もおのつから慰めらるゝぞかし。さればとよ、この世にふみのなかりせば、かくつれ〳〵の雨の窓、千々の思を引くならめ、明らけき御代の光のみ惑に生ひ立ちて、かくもさちなる學の林にわけ入る事の心うれしも、あなたふとき文の道かな。池の蛙の心もて、いでや勵まん。

東京　中林英子

雨久しう降らぬか爲め、靑葉もしほたれていとあはれなり、折しも夕つかたより、はら〳〵と降り來れるぞうれしき、柳の葉に白玉の如き雫、池のひこびもいと心地よけなるもうれし、あたりも靜まりて、只、葉らんの上に降れる雨の音のみなり。されば、心もおのづから文に移りて窓のもとに座せば、涼風吹き來ていふばかりなく心地よく、日のくるゝをも知らず、且、常になく文になかしさを添へたるこそ、うれしけれ。

いにしへの野なかのしみづぬるけれど
　もとのこゝろをしる人ぞくむ

古今集



彙報

○常宮殿下の御篤志

松吹く風を琴の音と聞し召しつるは古への皇女が風流の御才に在ませども今の代の進歩は雲井の園も詩歌管絃のみに遲日を短かしと歎ち給ふ事を許さず皇女の御學びも萬の科學にわたりて宇宙間の事はしも高きも卑きも學ばせ給はずといふ事なければ其御心がけの深き密かに在するは申さんも愚かなるべし常宮昌子内親王殿下の御聰明に渡らせられ殊に富國の基礎となるべき工藝作業に御心を用ひさせ給へるは豫ても洩れ承はる所なるが今また聞きつる所に據れば其御篤志の程こそ一向にうち驚かるれ

大阪博覽會御出發途の前一日の事とぞ山脇事務官御禮として御用邸に參候したる序殿下には三日間も博覽會に御成を辱うし員に列なる小官の如きも此れに勝したる面目は候はず就ては御巡覽の列品の中にていかなる物が深く御心に適はせ給ひつるや御手許に留め置かせられんとまでに御意に入りたるも候はんづらん何まれ仰せ聞せたび給へと言上したりけるに殿下には微にうち笑せ給ひてさればとよ百工の匠が神を碎き意を籠めて作りなしたる品なれば孰れに粗鹵はあらねども中にて深く思召しに入りつるもの三點ありされども其は固より參考として出品したる物なれば語るとも詮なしと仰せ給ひて更に思召しを洩し給はず事務官は

尚進みて博覽會事務官として伺ひ奉るがいかゞなれば一個の微臣山脇が參考にまで御旨を洩らせ給ふべうもやと畏る〳〵強て伺ひまつりしかばさまでに言へとならば言ひもすべし第一思召に適ひつるは郵船會社の出品たる汽船の模型なり彼は實物を毫差はずあからさまに調へしとの事なれば船の構造を研究するには此上なきものならめ別て船には姉妹の名もありていとゆかしければと仰せつゝ周宮殿下の方を顧みさせ給ひていとしげに御笑を浮べさせ給ひぬ、事務官も餘りに大人びたる御好みに其御篤志の尋常ならぬに敬服しつゝ尚他の御好みを伺ひしが第二は美術學校の出品の圖案にして之に對して仰せ給ひつるには夫の圖案は尚未だしと思はるゝ點なきにあらずそは花まれ蔓まれ仔細に顯微鏡試驗を行ひて纖維組織等を解剖して圖案とせんには一層の妙を極むべく自らも學びの暇に試たればその參考として欲しとこそ思はゆれ、第三は農業館、福岡縣出品區に揭げられつる縣下の摸型地圖なり米の産地は米粒を麥は麥を石炭は石炭を生絲産地は繭をつけて一目其生産力をさへ瞭然たらしむれば地理の研究には此上なきものぞかしと仰せ聞け給ひつるになん事務官も恐れ多き御着眼に只々敬歎の外なくて御前を退りける

かくて山脇事務官は重ねて思ふに竹の園生の末葉まで人間の種ならじとは申せ元より皇女に渡らせ給へど紅の麗はしきを愛でさせられ珠の輝きを好ませ給はんずらんと存じつるに美術館敎育館を御精覽在せられ工業館に在りては陶磁器化學工業、採鑛冶金に御注意あらせられし程なれば染織工業に移らせ給ひなば一日をや費やし給ひなんと思ひしものを唯だ一わたり御覽せられて深く御目も注がせられず却りて生絲羽二重等の輸出表には

御行立遊ばせられぬまた沖縄の天然眞珠三重の養殖眞珠、高知、愛媛の珊瑚珠はいかなる御わたりにも殊の外愛でさせらるればさこそは御意に適ふらめと御說明に勉めつるものを絶えて御心を惹かんよしもなく海產の魚介、林業の木材等至つて無趣味なる物の產額等を御下問ありつるのみか農業館には別して御注意ありて養蠶の御精査は當該職司をして驚かしめ給ひ參考館、機械館、通運館、の御細覽も殆ど皇女の上とは思はれざるばかりなるは誠に文明の奬勵、智術の擁護の爲に生れましたる女神にてぞ在しますらん、あはれかばかり御聰明にして國本養成に御篤志なる皇女の御心にかけさせられし出品なればいかにも進獻の手順を運ばゝやとて直ちに先づ郵船會社大阪支店長に汽船模型進獻の事を議したるが支店長は本社に通じて成るべく社長より進獻の事に勉むべしと答へたり夫より轉じて正木美術學校長にも圖案獻上の事を談じ且又福岡縣事務員を招きて進獻しては如何にやと說きたるに事務員はこよなき榮譽なりとし出品者も領諾すべしとなり、事務官は猶福岡一縣下の模型も留めず、農務山林水產鑛山地質諸局に議りて大日本全國の模型を製し農商務省より高輪御殿に進獻の事にしたしとの考案ありとぞいふなる猶宮内省御用品をはじめ皇后宮職、東宮職ともに幾多の御用品ありしに獨内親王殿下の御用品なきはいかにと疑ふ者あれども常宮御方には專ら勤儉節約を尙ばせ給ひて華やかなる布帛、奇重なる指環などは御心を喜ばし奉る料ならねばさる向に御用なきは申すに及ばず何物をも召させ給はざるは御見學としての御旅行にして徒の御遊行に在さゞればなりと承はりぬ

○國語夏期講習會

神田三崎町の國語傳習所に

ては連年夏期講習會を開設し文部省の中等敎員檢定に應ぜんとする者幷に國語學を專攻せんとする者の爲に資し來れると尠なからざるが本年も來八月一日より同廿五日迄第十三回講習會を開く筈にて學科講師は日本文法金澤文學博士、近世文學史佐々文學士國文講讀今井平田兩氏なりといふ尙課外として芳賀文學博士の講義もある由なり

○女子夏期講習會　神田三崎町の大成學館にては女子高等師範學校入學志望者及女子大學、高等女學校等にありて、復習せんとする者の爲來七月廿五日より八月三十日迄夏期講習會を開設し女子高等師範學校受驗科、國語漢文專修科、地理歷史專修科の三學科を講習すといふ

○小女の養蠶　往古養蠶にいみじく御心を留めたまふ帝ありけり其臣須賀留をして諸國より蠶兒を集めしめたまふ、其頃は蠶兒をたゞ『子』とのみ稱へしかば須賀留は之を誤解して嬰兒を數多集めて京に還りけり帝之を見て可笑しがりたまひ須賀留に命じて養育せしめたまふ、是れ今の幼稚園の始めとも云ふべく蠶兒と子供の因緣淺からずと思へば次の話も亦いよ／＼愛らしく面白きなり山口縣の知事武田千代三郎氏の長女とみ子（八年）は生得女性の手わざに勝れたるにや學校へ通ふ道すがら、蠶兒の無用なるものチラホラ路傍に棄てられたるを見て子供心にも惜しく思ひ之を養はゞ必ず繭を作るべしと密と袂に拾ひ入れ家に持ち歸り物蔭に隱し置き庭に桑の木のあるを幸ひ日々摘みて養ふ程に或る日父母の目に觸れたれば父の知事は子供のわざとしては無用なりと制しけり、とみ子は父の仰せに背かん事を恐れ又蠶兒を、棄つる事も惜ければ、其後は之を袂に移し入れ學校に行く途中袂の中にて養ひけるが日を經るまゝに其蠶兒は徐

徐と繭を作り初めたるより子供心の嬉しさ限りなく少しづゝの藁を拾ひ集め蠶兒と共に小さき紙箱に收めてなは父母の目を忍びつゝ遂に完き繭を作らせたりとぞ、

○女學生若學美譚　近時學生間の腐敗漸く甚しく都鄙到る處として彼等が惡聲を聞かざるはなく特に女學生の如きまた往々にして忌はしき風說の起ること少なからざるには心あるものをして轉た慷慨の情に耐へざらしむることとなるがこゝに最も感ずべき一事實こそ現出したれ世の少女子等の龜鑑にもと左に其概略を記載せんに愛媛縣越智郡日高村大字馬越田坂チカ(十七年)といふは今より三年前に父母に死なれ身には一人の姉あれども遠國に嫁して便らん由もなくさりとて家に殘されしは自分ばかりなれば自から心を堅持して悲しき中に慰めらるゝ友もなくて幾月日をか送りける然るにチカは天性學を好みまだ稚なかりし頃より爭で讀書の業にも、勝れ世の名譽を收めんとの志は其小さき胸に滿ちしかども家にはさまでの餘裕あらざりければ可憐なる少女が願ひを充たすことも能はで空しく片田舍に牛逐ふ賤の子等と交はりて憂年月を送り迎へしがチカが素志は如何なる惡魔も之れを奪ふこと能はず兩親死去の後は彌よ向學の志篤く今は却々に身の上こそ後安かれ父母在して遠く離るゝは子たるものゝ爲すべからざる處なりしも斯くなりし上は最早何事の障りもあらず兎角は我故鄕久戀の地にあらずと健氣にも心を決し同じ年馬越を去て松山市に出で其處此處に下女奉公してありしが或處の主人チカが志に感じさる希望のある身にて我家の如きに奉公すればとて何の得る處もあらざるべし我が知れる私立松山女學校には學婢を尋ね居れりとか其處ならば御身の望む如

く學問も思ひのまゝなるべしとて其人の周旋に依りて同女學校の學婢に雇はれしは昨年のことなりしが夫よりチカは校用の暇には讀書に熱中し少時も書卷を手より放したることなければ學術は次第に上達し今は基督教信者の手に依りて建てられぬる永木町の夜學校に通學し既に高等科學年程度迄進歩せしが志こゝにあれば其成績も大に見るべきものあり將來益々上進すべき有材の女をこのまゝ彼が身邊にまつはる或小なる事情のため朽廢に至らしむるは天賦を尊しとする我等宗教家に於て忍びざる處なりとて同女學校の職員は互に資を醵してこの憐れむべきチカを保護し飽までも其志望を達せしめ得させんと盡力しつゝあるやに聞く徒らに驕奢を事とし美裝美飾を名譽の極なりと、心得再び拭ふべからざる醜名を外に洩らして猶且つ恥とせず我から好みて少女の神聖を瀆すもの滔滔として近時女學生の俗習なるにチカの如きは萬綠叢中紅一點とも謂つ可く又た空谷に跫音を聞くの思ひなくんばあらず

○興風會の善行表彰

前號記載與風會にて表彰せれらし善行者十數名の人名人行を記載せん

大阪市東區南久寶寺町二丁目安藤豊三郎(三十)は香川縣三豊郡比地二村に生れ幼にして父母を失ひ十五歳單身大阪に來り南久寶寺町桂文七方に雇はれ中主家は主人文七と老母の二人にて老母は中風症にて常に病褥に在り豊三郎は商業に服すると共に病主婦の看護を爲す中主人文七も亦去る三十四年より同病に罹り半身不隨の身となりしかば豊三郎は看護の傍ら內外の事を一身に擔ひ勤儉主家に盡し殊に病主を脊負ひ每朝附近の湯屋に至り入浴せしめ且寺院に伴ひ參拜せしめ其心を慰むる等忠誠

義俠なる實子も尙及ばざる所ありされば昨年三月市内朝風呂會なる團體より銀盃を贈り其善行を表彰したるが與風會は多く得難きの義僕として白絹一卷を贈りたりとぞ

◎同府下泉南郡多奈川村大字谷川島矢とみ(十二)は家固より貧しく父は病身にして働きも心に任せず母は日雇稼ぎを爲すも女手の得る所少く搗て加へて弟は盲目にして起ち居儘ならざる等一家糊口の窮困實に目も當られぬ間に人と成り幼きより能く兩親の手助を爲し學齡に達する頃請うて入學し朝夕盲目の弟を脊負ひ炊事洗濯等かひ〲しくも一身に引請しかも學校にては常に優等の成績を占め殊に昨三十五年四月父肺患に罹りしよりは一層母を助けて父の看護を怠らず夜間暇ある毎に父の手足を摩り其意を慰むるをもてこよなき樂みと爲し居る中同年九月父は身まかりしが臨終の際とみ女の孝養に感じ幾度か掌を合せたりといふ與風會はその至孝を表彰して白絹一卷を贈れり

◎大阪市北區西野田新家谷村梅太郎(二十八)は六歲父を失ひ十四歲にして母眼病に罹り遂に明を失ふ家計豊かならず諸所に流寓し遂に賣藥行商を始めたるに或夜行商歸宅の際盲母の水に浴し頻りに神佛に祈願するの狀を視て其故を問へば母は泣く〲梅太郎のまだ賣り聲の出でぬを憐み神佛の冥護に依りその業を助けんことを祈ると告げゝれば一層奮勵して僅に家計を維持し益孝道の誠を盡し自ら炊事を掌り朝夕母の面前に拜し夜間は時々の出來事又は見聞の事實を物語り母の憂鬱を散じ其喜びを見て無上の樂みと爲す斯の如きこと十年一日の如く近來母疾に罹り蓐中に在り商業の傍ら看護の足らざるを恐れ且母の意を安せんと欲し妻を娶り共に孝養を勵み居れりとこれもまた與風會より白

絹一卷を贈りたる孝子なり

◎大坂市北區堂島北町山田ちゑ（五十五）は兵庫縣川邊郡東谷村字山野原に生れ幼少の頃父母に別れ年十六大阪市東區大川町奥田伊三郎方に雇はれ居ること七箇年後主人の許しを受け更に同平野町卯野宇兵衛方に雇はれ居ること五箇年孰れにてもまめまめしく立ち働き忠勤を勵み二十七歳の春媒酌人ありて魚商山田留吉に嫁ぎしかど暮しの豊かならざれば夫に從ひ只管家業に勤め漸く少しの貯へも出來女兒さへもまうけたるに夫留吉は酒を嗜み醉へば必ずあら〳〵しき擧動を爲すも絶えてこれに逆はず徐に宥めて一時の怒りを解き居りしも夫の酒癖は益募りて遂には其貯へも消え失せ剰へ其後夫は病に罹りけるが其時既に三兒をまうけ皆幼かりしもおちゑは夫を看護する旁末子を脊負ひ魚籠を肩にして日々賣り歩き自ら食を減じ夫に藥餌を進め幼兒を愛育し少しも怠ることなく瞬く内に三歳の月日を過ごせし秋の末つかた眞心こめし看病も其かひなく夫は遂に身まかりぬおちゑは痛く歎き悲しみしが其後は三人の幼兒を慈しみ以前の如く魚籠を荷ひ賣り歩き暑さ寒さの厭ひなく夜を日に繼ぎて勵みけれども漸く一家糊口の資を得るに過ぎず人皆之を憐み再び夫を迎へて家業を助けしめよと勸むれども女は更に耳にもかけず家業に勵みしかば勞働勤儉の功空しからず再び少しの貯へを爲し得るに至れり殊に女兒の敎育の上に心を用ひ各學問裁縫を習はしめ朝夕亡夫の位牌に拜禮し又女兒をして之に倣はしむる等實に其節操の堅きと勤儉にして忍耐に富みたる加ふるに曾て恩顧を受けたる故主の位牌を自宅に祭り且兩主家に對し今に吉凶贈遺を絶たざる等禮義の正しきは貞女として世の龜鑑たるはいふまでもなく勤儉の模範

と爲すに餘りあるにぞ興風會は表彰の紀念として白絹一卷を贈れり

◎大阪市東區糸屋町一丁目織田金次(四十八)は六歳にして母に別れ十一歳父を失ひ爾來諸所に轉寓し一時殆ど糊口にも窮迫するほどなりしが堅忍志を移さず獨立生計の途を得んと欲し遂に遊藝に身を投じて名を爲すに至り平素義俠に心がけ無告の貧困者を救助し亦國事に斃れたる者の靈を慰め天變地異其他不測の罹災者を救ひ近くは彼雪中行軍等死者の遺族へ多額の金圓を寄贈したるが如き大阪市内三千の貧民を救助したるが如き或は警官の職務に斃れたるを弔慰したる等洵に枚擧に遑あらず浮薄なる世間と思はるゝ時節柄此人の如きは得易すからざる義俠者といふべし白絹一卷を贈り其善行を表彰せるも理道なり

●動物虐待防止會例會　過日一ツ橋外學士會に開會、出席者三十餘名、本田增次郎氏は修身教科書及び讀本中に動物愛憐に關する教訓を加ふべき事を文部當局に建議すべしと發議し、江原素六氏は軍隊に於ける馬の待遇につき、山本直良氏は動物園に於ける象、猪、獅等の待遇につきおの〳〵食卓上に談話を爲し午後九時頃散會したり、又同會の婦人部は去る廿日午後一時より九段坂下なる體育會に於て初めての集會を開きたり、猶は同會にては此度「動物虐待防止會一覽」と題する小冊子を印刷配布したり

◎三井呉服店の婦人採用　同店にては從來賣場裁場、電話掛其他へ二十餘名の婦人を使用し來りしが其成蹟良好の傾きなるより今回更に店内各部へ多數の婦人を採用するに決し過日來右募集の廣告を出したるに既に三百人以上の申し込あり意外の候補者を得たるが先月中に數日を分ちて申し込

候補者の試驗を行ひ精選の結果及第せしめたる筈なり資格は高等小學を卒業せしものなりと

○波止場の婚禮

（一時に九組の結婚）

先月四日の朝布哇の波止場に上陸したる客の内に十數名の日本婦人ありこは布哇に於ける日本移民が異域の孤棲に堪へず日本より呼び迎へたる新婦なるがいづれも寫眞の見合がありし位にてまだ同居せし事もなき其夫に初めて逢ふの喜びは知らぬ他境の地に上陸するの心細さも感ぜざるならん此に米國の移民局官吏は此新婦に對して珍らしき結婚式を同波止場に於て擧行せしむる事とせり其理由を聞くに移住民が本國の婦人と結婚の手續を了して既に入籍せし上は日本の法律は之を夫婦と認むれども米國の政府はこれを適法の夫婦とは認めず從つて種々の不都合を生ずるより移民局官吏は其弊害を未然に防ぐ臨機の處置としてかゝる婦人の布哇に上陸せし時は其夫なる者を呼出し我が目前に於て改めて正式の婚禮を行はしむる一新例を造りこれまで兩三回を行ひ來りしものなるが當日は其數甚だ多く九組の結婚式を擧ぐるに至れり今其模樣を記さんに午前十時コーランテン波止場を直ちに式場にして列席者には移民局長ブラオン、ボイト氏の外稅關官吏二三名、日本人には勝沼ドクター、本川牧師、岸本氏ホテル宿泊の日本人十餘名が親戚なり賓客なりとして式に臨みまづボイト氏、新婦新郎を呼出して其確に夫婦なるや否やと問ひ定めし上結婚の認許狀を下附し之を受けたる新夫婦は女は右、男は左席の腰掛に順次着席するや本川牧師は男女に向ひ神の惠みに信賴して幾久しき睦みを爲すべき由を宣誓せしめ後勝沼ドクター新夫婦に代りて神への禮を述べ男女はこゝに

天下晴れての夫婦となり九組の握手は嬉しげに交されしが税官關吏はこの新夫婦に夫々一本づゝの男へは白、女へは赤の花を與へて目出度き結婚式を祝しこゝに全く式を終りたるが當日に結婚せし九人の外に猶七名の女ありしがこは夫の來る事遲かりし爲翌五日に廻され七名の内三名だけ同じ儀式を以て結婚式を擧げ都合十二組となれりと

○聾啞の結婚　英國ヤーマスの寺院に於て此程ジヨン、アンドルースと云ふ男とヘレン、デーヴイーと云ふ女と結婚の式を擧げたるが此男女は共に聾啞にして式を行ふ際双方に附添びたる男女は皆聾啞を選び僧侶の通辯は聾啞に傳道を爲す宣敎師之を務め新郎新婦は手眞似の語にて悅びを爲したりと云ふ。

○野津陸軍大將夫人の視察談

野津陸軍大將夫人には長女なる上原陸軍少將槇子夫人と共に下女二名を隨へ去四月二十六日橫濱出帆の伊豫丸にて女婿林日本郵船會社上海支店長訪問の爲め渡淸し去十二日午後橫濱入港神戶丸にて無事歸朝したり今其視察談を聞き得たれば梗概を左に摘記する事となしぬ

●●●●●●

▲上海と漢口　橫濱を立ちましたのは四月二十六日でしたが、途中で此處彼處へ寄途いたしましたから、上海に着きましたのは五月の五日でした。それから上海も大抵見物しましたから、五月二十二日に商船會社の船で、長江沿岸を、漢口まで行つて參りましたから、私の見ましたのは上海と漢口との二ケ所で御座います。

●●●●●●

▲在上海日本人の希望　御承知の通り是まで日本の婦人は、餘り好んで外國抔へ出掛けない故でも

ありますかして、私抔が案内を附けて市街を歩きますと、各國人が在來の洋妾(日本婦人の多數は洋妾)の樣に思つて居りますので、上海の日本人が頻りに氣の毒がつて居りました。之に附けても早く立派な婦人達が漫遊に出て呉れる樣になつて、日本の貴婦人を各國の者に見せびらかしてやりたい抔と云ふ事を申して居りました。

▲市場の整頓　魚野菜類の市場の整頓して居るには驚きました、先づ其家の構造を見ますと、四方打通しの屋根、柱計りに下は全部叩となつて居て商賣の時間は大抵晝頃までに仕舞とする事になつて居ります。濟むと直ぐポンプで全體を洗ひ清めるのですから、洵に氣持の能い行り方です。

▲次は道路　の奇麗な事です。此點に至りましては東京抔は迚も及ばない樣に思はれます砂利を敷くのにもセメントを雜せて敷くと、其上を直ぐに蒸氣機械で壓迫して堅めると云ふ事にして居りますから、此方の樣に往來止杯をしないで、交通しつゝ普請するのです、尤も上海では一番道路に金を費して居ると云ふ事ですから、此位な事が出來るのは無理はありません。

▲公園の設備　も隨分能く出來て居りまして、音樂堂の設備杯もあり、旁西洋館抔も大分ありますので、小さくも全體が清潔ですから、西洋の紳士が夕飯前若くは食後抔に、夫婦連で散策すると云ふ樣な譯で、却々盛んで御座います。

▲上海城内　の支那町へ行て見ますと、居留地とは大分違ひ、道路抔は絶えず川から飲用水を運ぶので、大抵は泥濘して居りますし、道幅も至つて狹く一體が不潔ですが店抔は隨分大きなのが御座います。賣物を買ひましても、居留地よりは此所の方が、直段が安いと云樣な事も聞きました。

▲繁華なる處　一番賑かな處は四馬路と云ふ處で此處の近所は四馬路を中心にして、種々な見世物から支那の芝居が四ヶ所もあつて、飲食店抔も大分見えますし、東京で云へば淺草の公園とでも云ふ樣な處で、絶えず賑かに混雜して居る處です。

▲女權驚くべし　支那は昔から女に非常な權理を持たしてあると云ふ事は豫て聞て居りましたが、今度行つて見聞しますと、夫れは隨分甚しい事があります。特に中以下になりますと、人通りの多い賑かな所で、妻が態と大きな聲を出して良人を叱り付ける事が往々ありますが、それでも男は何とも口返しをしないのです。此抵抗せぬと言ふ事が支那の習慣で、矢張り善い事になつて居るのださうです、斯う云ふ狀態ですから、支那人が日本に來ますと日本婦人の樣子を見て、教育が善いから皆んな立派に婦人が仕込んであると云つて、大變羨ましがつて居ると云ふ事抔も聞きました。

▲婦人慈善會　上海には日本の婦人計りで設けた日本婦人慈善會抔が出來て居りまして、日本人の苦境に在る者を救ひ、又他國人をも助けると云ふ目的で、近頃は却々盛大になつて居ります。

▲小孤山　楊子江の沿岸を船で通りましたが、途中に小孤山と云ふ大變景色の好い山を見ましたが、頂上には寺の樣なものや塔の樣なものがあつて、却却立派な樣に見受ました。

▲蘇州と杭州　上海の直ぐ近所になつて居ります蘇州の太湖杭州の西湖は、織物で大變名高い、處ですが、船の都合や時日のないので見る事の出來なかつたのは洵に殘念で御座いました。

▲漢口港　に着きました處が、各國何れも其居留地に立派な堤防が出來て、見事に何事も整つて居りますが、一つ大變に汚いのがありましたか

ら、彼れは何處の居留地かと聞きますと、お恥かしい譯ではありませんか彼れが日本のですと云はれました時は、眞個にどうしたら宜いかと思ひましたよ。宛で支那の貧民窟の樣になつて居るのですもの…………

▲伯牙臺　昔有名な琴を彈じた處で、伯牙臺と云ふ處を見ましたが、却々立派な處でした。それから漢口の向ひにある武昌と云ふ處にも一寸行つて見ました兎に角、今に蘆漢鐵道を始め其他の鐵道が悉皆出來上つた曉には、上海處ではなく、東洋第一の港になるとか云ふ樣に聞きました。

▲日本婦人の渡清を望む　彼地の人等が絶えず私共に申しましたのは、日本の婦人が度々遊びながら見物に來て呉れゝば宜いと云つて居りましたが、まあ此地に居て温泉歩き抔をして居るよりも割合に安價で身體も壯健になり、旁若い御婦人達には將來子女の敎養上に就ても、大いに得る、處もある事でせうと思ひます。

▲長江沿岸　上海から長江沿岸を上るのも、河を行くのですから少しも危險はないのですし、船中も日本人に適した食物があるので、何にも不自由な事はありません。それに近い處でもあり船の便も宜いので殊に春秋の二季が一番漫遊に適して居るさうですから、彼方でも頻りに皆んなに來て貰ひたがつて居ります。



○新刊書目

愛國婦人(第卅一、二號)	東京麴町區下二番町	愛國婦人發行所
福井商工要報(第一號)		福井商工要報社
少年界(第七號)	東京日本橋區本町三丁目	金港堂
少女界(第六號)	同	同
慶應義塾學報(第六號)	東京芝區三田慶應義塾內	慶應義塾
ふでのはな(第一九〇集)	東京京橋區本材木町三丁目	わかば會
うらにしき(第一二八號)	東京神田區駿河臺廿甲賀町	尚絅社
圖書月報(第一〇號)	東京日本橋區本材木町二丁目	書籍商組合事務所
女學雜誌(第五一六號)	東京北豊島郡巣鴨村	女學雜誌社
佛教文藝(第六號)	東京淺草區驛谷町	佛教社
藥石新報(每號)	大阪市西區江戸堀下通三丁目	藥石新報社
法令審議錄(第九號)	東京々橋區尾張町一丁目	法令審議會
朝野公論(第二號)	東京府荏原郡品川町	公論社
世路鏡(第四、五號)	東京芝區愛宕下町二丁目	東京同明館
軍人遺族新報(第四號)	東京々橋區築地三丁目	東京救護會
女子新聞(第卅一號)	東京々橋區南鍛冶町	女子新聞社
福井商工要報(第卅八號)	福井市佐佳枝中町	福井商工新報社
大八洲雜誌(第二、六四號)	東京神田區三崎町	大八洲館
國學院雜誌(第六號)	同麴町區飯田町	國學院
紀念錄(全一冊)	東京府豊多摩郡戸塚町早稲田大學內	早稲田學會
新聲(第六號)	東京神田區錦町	新聲社

七月以後 女鑑兼題豫告

月	日	歌	文
七月	十五日	水鷄	杜鵑を聞きて
八月	一日	海邊螢	海水浴日記(三日間)
	十五日	朝顏	歸省
九月	一日	初秋虫	思ひを記して女鑑に贈る
	十五日	殘暑	山家に月を觀て記す

注意

一 歌は題毎に用紙を別にし一題には一人一首若くは二首を限りとす上句に**一二音**の**漢字**一字入れ其他は悉く**平假名**又は**一音**の**漢字**にて認むべし

一 文は毎行**十五字詰二十行**以内を限りとす必ず**楷書**を用ゐ字體は**鮮明**ならむことを要す

一 其他從前の投稿心得を熟讀詳知せらるべし

御注文の節は女鑑廣告に據りたる旨御附記被下度候



新刊

澁澤男爵 最近實業談

紙數四百頁
上製定價七十錢
並製同　六十錢
菊版總クロース美本

本書は澁澤男爵が各種集會の席上に於て演述せられたる最近の演説集也その諄々として説き侃々として辨ずる處風生卓發の妙あるのみならず寔に實業家銀行員の寶典にして政治家經世家の良參考書といふべし卷末附するに歐米漫遊紀行等を以てしたれば各國の財政及經濟界の狀勢をも窺ふて彼我關係の如何を詳知するを得べし弊社今回實費同樣の廉價を以て發賣するは聊か各位の便宜を謀るの微意に他ならず幸に購讀せられなば本社の光榮のみならんや

新刊

澁谷愛編纂

萬國女子風俗

四六版洋裝　定價廿五錢　郵稅四錢

著者高等女子教育に從する十餘年今は萬里の波濤を越へて歐米觀光の路に上る亦たゞ斯學に裨益せんが爲なり本書世界各國女子の面相服裝風俗習慣化粧及結髮法等を平易に記述して洩らす所なし此人にして此著あり又何ぞ觀察の奇警にして文字の飛躍せるを疑はんや

東京築地二丁目
國光社發兌

御注文の節は女鑑廣告に據りたる旨御附記被下度候

水主天姥著

千古寃魂

石田三成

及其時代之形勢

勝てば即ち官軍。負くれば即ち賊のみ。理非往々にして轉倒し、曲直或は顚逆す。天道漠々、世事茫々慨嘆せざるべけんや。三成六條河畔の露と消えしより三百有餘年に及ぶもその寃枉は依然として、伸雪する能はざるなり。著者乃ち、明快痛切の筆を操て當年の形勢を描出し、東西の兩雄たる家康と三成とを較論比評するや。恰も法官の刑を斷ずるが如く、毫も假借宥恕を須ゐず、一褒一貶、一黜一陟の間、文舞ひ句踊て千古の功罪を眼前に見るの思ひあり。汽車關ヶ原を過ぎて、蔚葱たる松尾南宮の諸山を望みし者、此書を繙いて當年の事蹟を思はゞせ裂け、腸斷たざれば已まざるべし、蓋し近來の快著なり。

再版

四六版美本

一部定價金卅錢

郵稅四錢

在法科大學 矢田七太郎著

幕末之偉人

江川坦庵

著者は曾て「帝國文學」に「岳南の奇才」と歌はれし狩水生。主人公は幕末の碩儒安積艮齋をして「文武兼備勇略超倫」と驚嘆せしめし德川武士。舞臺は近世史中最も興味饒き安政嘉永の幕府時代。清灑の文、警拔の識、韮山代官の傳記として讀むも可一部ン幕末史として見るも可。新文明の發達史として見るも亦た可なり、道義頽敗して士氣を拂へる今日世人若し武士道の理想的人物を知らんと欲せば――學生若し日本固有の模範的武士に泰西的紳士の品格を加味したる崇拜者を求めんと欲せば――婦人若し德川武士の理想的家庭を知らんと欲せば――此の書は決してパンを求むるものに小石を與ふるものはあらざる也

全一册

和製美本

寫眞銅版數葉

壹部定價

金參拾錢

郵稅四錢

東京築地二丁目

發行所 株式會社 國光社

御注文の節は女鑑廣告に據りたる旨御附記被下度候

明治三十六年七月一日發行　毎月二回一日十五日發行　明治廿五年三月十二日第三種郵便物認可
第拾參年第拾參號

株式會社國光社